

# 亘理町東日本大震災活動等記録集



平成25年3月

 宮城県亘理町

## はじめに

平成23年3月11日午後2時46分に発生した千年に一度といわれる未曾有の大災害、東日本大震災から2年余りが経過いたしました。亘理町でも震度6弱の揺れと町面積の約半分以上が浸水被害を受けるというこれまでに経験したことのない津波に直面いたしました。この震災で亡くなられた方々のご冥福をお祈りしますとともに、ご遺族の皆様に対しまして深く哀悼の意を表します。また、震災以後、今までの生活基盤を失われ、辛く癒えないお気持ちを長く強いられている住民の皆様には心からお見舞い申し上げます。

亘理町では、一日も早い町の復旧と復興を目指し、住民の皆様と連携しながら、日々取りくんでまいりました。現在の町の姿に至るまで、町内外を問わず様々なご支援を頂戴し、復旧への原動力とさせていただきました。これまでに町が取り組んできた活動と、ご支援をいただいた様子を住民の皆様にご報告するとともに、後世へ伝承することが一つの使命であると考え、活動記録集を発行することといたしました。本書では、東日本大震災で受けた被害状況と町の震災対応への初動から、おおむね1年間の活動記録や被害に遭われた方々へのアンケート結果、証言等を公表することで、今後の災害への備えとなることを願い掲載しております。

本書作成にあたり、震災当日からの一定期間は皆様ご承知のとおり、記録をとれる環境下にはなく、各職員のメモや証言、町広報紙の取材や住民の皆様からご提供いただいた写真等で作成いたしました。被災された住民の方々には、当時の光景を目にしたくないお気持ちの方が多数いらっしゃるを考え、写真の選定・掲載には発行まで役場内部で協議が繰り返されました。私たちは、後世が二度と同じ被害に遭わないためにも、東日本大震災で亘理町が受けた傷を伝えていかなければならないという答えに至りました。皆様にこの活動記録集の趣旨をご理解いただければ幸いです。

最後に、この発行にご協力をいただきました住民の皆様、ならびに関係機関の皆様には厚く御礼を申し上げます。

平成25年3月

亘理町長 齋藤邦男



# 目次

## はじめに 1

亘理町長 齋藤邦男

## 第1章 東日本大震災の概要 7

1. 地震の概要
2. 余震の概要
3. 津波の概要
4. 地殻変動の概要

## 第2章 被害の概要 17

### 宮城県の被害の概要…………… 19

1. 人的被害（平成24年12月31日現在）
2. 住家被害（平成24年12月31日現在）
3. 避難所・避難者数
4. ライフライン被害
5. 各施設の被害額（平成25年1月10日現在）

### 亘理町の被害の概要…………… 23

1. 人的被害（平成25年1月31日現在）
2. 住家被害（平成25年1月31日現在）
3. 避難者数
4. 仮設住宅入居状況（ピーク時）
5. 津波被害

各地区の被害状況 1	25
巨理地区	
吉田地区	
荒浜地区	
逢隈地区	
各地区の被害状況 2	36
巨理町被害状況	

### 第3章 巨理町の地震発生後の対応と一年の軌跡 57

---

巨理町の地震発生後の対応	59
巨理町の動きと取り組み	67
自衛隊の活動	
緊急消防援助隊の活動	
災害ボランティアセンターの活動	

### 第4章 巨理町被災現況調査について 181

---

巨理町被災現況調査の再整理	183
被災状況	184
1. 被災区域の状況	
2. 防災施設、避難所の運用状況	
3. 建物の被災状況	
4. 被災した建物の構造、建物用途	
5. 建物構造別の浸水深と建物被災状況の関係	
6. 浸水区域と津波規模	
7. 救援・救護活動状況	
8. 大字・町別死亡率	
9. 公共施設等の被害状況（防災施設）	
10. 公共施設等の被害状況（インフラ）	
11. 公共施設・ライフラインの被害状況	
12. 産業関係施設の被害状況	
13. 避難地・防災活動拠点	

住民意見..... 204

1. 避難行動に関する個人への聞き取り調査の主な結果
2. 避難者個人ごとの行動に関する集計
3. 避難路の問題点
4. 避難時の交通手段
5. 渋滞指摘箇所
6. 震災時の居住地別集計
7. 避難に関する流動図

第5章 3.11から生き延びて ～あの日そして今、未来へ～ 245

亘理町社会福祉協議会職員(災害ボランティアセンター長)	佐藤寛子さん
ボランティア参加者	塚邊綾子さん
前長瀨小学校校長	武藤育子さん
児童センター	菊地由香さん
いちご農家	浅川一雄さん
海苔養殖業	菊地幹彦さん
鮭店経営(浜寿し)	太田政志さん
亘理町荒浜～東日本大震災一ヶ月の記録～ 撮影者	森健輔さん
亘理町消防団吉田分団副分団長	平間勝彦さん
亘理町臨時災害ラジオFMあおぞら放送総合担当チーフ	吉田圭さん
前亘理町荒浜支所長	渡辺恵子さん
亘理町総務課長	佐藤仁志さん

第6章 町長からのメッセージ 279

亘理町長 齋藤邦男

第7章 支援物資・義援金・寄附金報告と御礼 283



## 第1章

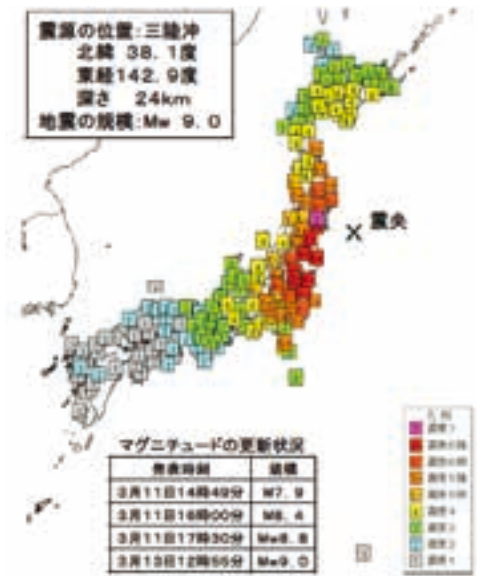
# 東日本大震災の概要





# 1 地震の概要

発生時刻：平成23年3月11日（金）  
 14時46分  
 震源：三陸沖  
 牡鹿半島の東南東約130km付近  
 深さ約24km  
 規模：マグニチュード（M）9.0  
 断層の大きさ：長さ約500km、幅約200km  
 地震の種類：海溝型地震、逆断層型



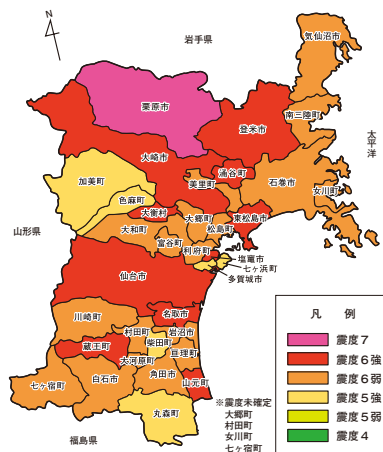
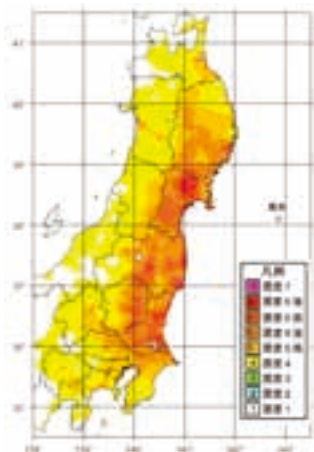
平成23年3月11日（金）14時46分に発生した「平成23年東北地方太平洋沖地震」は、三陸沖を震源とするマグニチュード9.0、栗原市で最大震度7、東北から北関東にかけての広い範囲で震度6強の強い揺れを観測した我が国の観測史上最大規模の地震であった。

また、三陸沿岸では30m、仙台湾岸の砂浜海岸でも10mを超える大津波が発生。近年の実測観測値（チリ地震津波等）をはるかに超える巨大な津波は、広範囲に及ぶ浸水（亘理町約35km<sup>2</sup>）、沿岸の構造物や家屋の破壊と流失、養殖施設や船舶の漂流、漂流物による二次的な被害、可燃物の流出と火災、海岸の浸食や堆積等による地形変化、道路や鉄道等交通網の分断、農業・漁業、製造業等産業基盤の喪失等、かつてないほどの甚大な被害をもたらした。特に沿岸部では漁船、水産加工設備、養殖場等の水産関連施設をはじめ、農地を含む農業関連施設や様々な企業の関連施設等、産業活動の全てが甚大な被害を受け、多くの人々が就労の場を失った。

また人的被害が少なかった内陸部でも、住宅被害や宅地の崩壊、学校や商業施設等の建物被害、道路や公共交通機関の分断、電力等のエネルギーの供給停止により、日常生活に大きな支障をきたした。さらに東北地方を出入りする原材料、部品及び製品等の供給網が分断し、その影響は海外にまで波及。被害は多岐かつ広範囲に及んだ。

沿岸部・内陸部とも住宅被害は全壊半壊家屋が23万棟を超え、地域によってはライフラインの復旧の目処が立たず、ピーク時には県内1,183箇所の避難所に32万人の被災者が避難を余儀なくされた。

そして、東京電力福島第一原子力発電所の施設被害は、地震と津波による被害をさらに深刻化させ、東北から北関東一帯は大地震、大津波、原発事故、風評被害等の複合的な被害に直面することとなった。



仙台市	6強	滝沢市	6強	大畑町	不明
石巻市	6強	七ヶ浜町	不明	富谷町	6強
塩竈市	6強	大河原町	6強	大津町	6強
気仙沼市	6強	村田町	不明	色麻町	5強
白石市	6強	柳田町	5強	加美町	5強
志保市	6強	川崎町	6強	清田町	6強
角田市	6強	丸森町	6強	高野町	6強
多賀城市	6強	田代町	6強	女川町	不明
若沼市	6強	山元町	6強	南三陸町	6強
陸奥市	6強	牡鹿町	6強		
栗原市	7	七ヶ浜町	5強		
東松島市	6強	利府町	6強		
大川町	6強	大川町	6強		

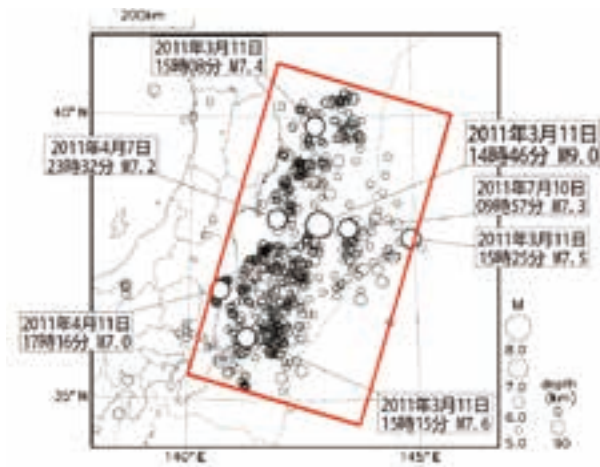
気象庁発表資料に基づき作成

## 2 余震の概要

東北地方太平洋沖地震は、余震が非常に多いのが特徴。M7.0以上が6回発生し、最大余震は平成23年3月11日（金）15時15分に茨城県沖を震源として発生したM7.6の余震で、最大震度は6強を記録した。平成24年12月31日末現在で震度5以上の余震は、本震を含めて59回、震度4以上の余震は280回にもものぼる。

宮城県では平成23年4月7日23時32分に発生した最大震度6強の余震により、本震で損傷していた道路等の公共土木施設の被害が拡大。一部で運行を再開していた東北本線が再度運休する等、生活に再び被害を与えた。

また、福島県いわき市等では陸域で余震が発生。地表面に地震断層が確認される等、非常に活発な余震が見られたことが特徴であった。



期 間	最大震度別回数						震度4以上を 観測した 回数
	4	5弱	5強	6弱	6強	7	
2011年 3/11 14:00- 3/31 24:00	91	17	6	0	1	1	116
4/ 1 00:00- 4/30 24:00	41	8	0	2	1	0	52
5/ 1 00:00- 5/31 24:00	14	2	0	0	0	0	16
6/ 1 00:00- 6/30 24:00	7	2	0	0	0	0	9
7/ 1 00:00- 7/31 24:00	7	1	2	0	0	0	10
8/ 1 00:00- 8/31 24:00	9	2	0	0	0	0	11
9/ 1 00:00- 9/30 24:00	6	1	1	0	0	0	8
10/ 1 00:00-10/31 24:00	2	0	0	0	0	0	2
11/ 1 00:00-11/30 24:00	1	0	1	0	0	0	2
12/ 1 00:00-12/31 24:00	2	0	0	0	0	0	2
2012年 1/ 1 00:00- 1/31 24:00	5	1	0	0	0	0	6
2/ 1 00:00- 2/29 24:00	5	1	0	0	0	0	6
3/ 1 00:00- 3/31 24:00	2	3	1	0	0	0	6
4/ 1 00:00- 4/30 24:00	6	2	0	0	0	0	8
5/ 1 00:00- 5/31 24:00	1	0	0	0	0	0	1
6/ 1 00:00- 6/30 24:00	3	0	0	0	0	0	3
7/ 1 00:00- 7/31 24:00	2	0	0	0	0	0	2
8/ 1 00:00- 8/31 24:00	2	0	1	0	0	0	3
9/ 1 00:00- 9/30 24:00	1	0	0	0	0	0	1
10/ 1 00:00-10/31 24:00	4	1	0	0	0	0	5
11/ 1 00:00-11/30 24:00	5	0	0	0	0	0	5
12/ 1 00:00-12/31 24:00	5	1	0	0	0	0	6
総 計	221	42	12	2	2	1	280

(震度7は本震)

No.	地震発生	発震時刻	震央地名	深さ	マグニチュード	最大震度
1	2011/ 3/11	14:46	三陸沖	24	9	7
2	2011/ 3/11	14:51	福島県沖	33	6.8	5弱
3	2011/ 3/11	14:54	福島県沖	34	6.1	5弱
4	2011/ 3/11	14:58	福島県沖	35	6.6	5弱
5	2011/ 3/11	15:06	岩手県沖	29	6.5	5弱
6	2011/ 3/11	15:08	岩手県沖	32	7.4	5弱
7	2011/ 3/11	15:12	福島県沖	39	6.7	5弱
8	2011/ 3/11	15:15	茨城県沖	43	7.6	6強
9	2011/ 3/11	15:18	茨城県沖	41	4.7	5弱
10	2011/ 3/11	16:28	岩手県沖	11	6.6	5強
11	2011/ 3/11	16:30	福島県沖	27	5.9	5弱
12	2011/ 3/11	17:40	福島県沖	30	6	5強
13	2011/ 3/11	20:36	岩手県沖	24	6.7	5弱
14	2011/ 3/12	22:15	福島県沖	40	6.2	5弱
15	2011/ 3/13	8:24	宮城県沖	15	6.2	5弱
16	2011/ 3/14	10:02	茨城県沖	32	6.2	5弱
17	2011/ 3/16	12:52	千葉県東方沖	10	6.1	5弱
18	2011/ 3/19	18:56	茨城県北部	5	6.1	5強
19	2011/ 3/23	7:12	福島県浜通り	8	6	5強
20	2011/ 3/23	7:34	福島県浜通り	7	5.5	5強
21	2011/ 3/23	7:36	福島県浜通り	7	5.8	5弱
22	2011/ 3/23	18:55	福島県浜通り	9	4.7	5強
23	2011/ 3/24	17:20	岩手県沖	34	6.2	5弱
24	2011/ 3/28	7:23	宮城県沖	31	6.5	5弱
25	2011/ 3/31	16:15	宮城県沖	47	6.1	5弱
26	2011/ 4/ 7	23:32	宮城県沖	66	7.2	6強
27	2011/ 4/ 9	18:42	宮城県沖	58	5.4	5弱
28	2011/ 4/11	17:16	福島県浜通り	6	7	6弱
29	2011/ 4/11	17:17	福島県浜通り	8	4.7	5弱
30	2011/ 4/11	17:26	福島県中通り	5	5.4	5弱
31	2011/ 4/11	20:42	福島県浜通り	11	5.9	5弱
32	2011/ 4/12	8:08	千葉県東方沖	26	6.4	5弱
33	2011/ 4/12	14:07	福島県中通り	15	6.4	6弱
34	2011/ 4/13	10:07	福島県浜通り	5	5.7	5弱
35	2011/ 4/21	22:37	千葉県東方沖	46	6	5弱
36	2011/ 4/23	0:25	福島県沖	21	5.4	5弱
37	2011/ 5/ 6	2:04	福島県浜通り	6	5.2	5弱
38	2011/ 5/25	5:36	福島県浜通り	7	5	5弱
39	2011/ 6/ 4	1:00	福島県沖	30	5.5	5弱
40	2011/ 6/23	6:51	岩手県沖	36	6.9	5弱
41	2011/ 7/23	13:34	宮城県沖	47	6.4	5強
42	2011/ 7/25	3:51	福島県沖	46	6.3	5弱
43	2011/ 7/31	3:53	福島県沖	57	6.5	5強
44	2011/ 8/12	3:22	福島県沖	52	6.1	5弱
45	2011/ 8/19	14:36	福島県沖	51	6.5	5弱
46	2011/ 9/21	22:30	茨城県北部	9	5.2	5弱
47	2011/ 9/29	19:05	福島県浜通り	9	5.4	5強
48	2011/11/20	10:23	茨城県北部	9	5.3	5強
49	2012/ 1/23	20:45	福島県沖	52	5.1	5弱
50	2012/ 2/19	14:54	茨城県北部	7	5.2	5弱
51	2012/ 3/ 1	7:32	茨城県沖	56	5.3	5弱
52	2012/ 3/10	2:25	茨城県北部	7	5.4	5弱
53	2012/ 3/14	21:05	千葉県東方沖	15	6.1	5強
54	2012/ 3/27	20:00	岩手県沖	21	6.6	5弱
55	2012/ 4/ 1	23:04	福島県沖	53	5.9	5弱
56	2012/ 4/29	19:28	千葉県北東部	48	5.8	5弱
57	2012/ 8/30	4:05	宮城県沖	60	5.6	5強
58	2012/10/25	19:32	宮城県沖	48	5.6	5弱
59	2012/12/ 7	17:18	三陸沖	49	7.3	5弱

本震

### 3 津波の概要

気象庁は、地震の揺れが継続していた14時49分、北海道から関東地方の太平洋沿岸に大津波警報、北海道の日本海側、関東地方から沖縄地方に津波警報、北海道のオホーツク海、瀬戸内海、九州地方の東シナ海側等に津波注意報を発令。宮城県沿岸では、15時14分に津波予想高が6 mから10mに拡大された。

この大津波は、高潮や波浪を対象に建設された第一線の海岸堤防をはるかに超えて、内陸へ侵入。海岸線を超えて遡上した大津波は、海岸線の松林を根こそぎ倒し、構造物をことごとく壊し、その先端部で発生した射流は恐るべき破壊力で家屋や自動車等を流し、あたり一面ががれきで覆われた。

さらに陸に上った津波は戻り流れとなり、倒壊した家屋や港湾貨物等を次々に海へ流出させ、第1波で破壊した海岸堤防をさらに陸側からも破壊。また河川を遡上した津波は、地震に耐えた河口付近の橋梁を波圧と揚圧力により落橋させた。

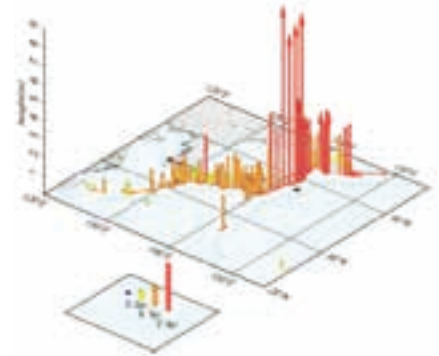
リアス式海岸での大津波は、海岸沿いに密集した家屋はもちろん、RC構造の業務ビルを基礎杭諸共倒壊させ、防潮堤、水門等を含む沿岸部の施設を壊滅状態に追いやった。大型の船舶やバス等の車両は内陸奥深くまで入り込み、建物を破壊した後そのまま無残にも内陸部に取り残された。

これら大津波のすさまじい破壊力は、海岸線から内陸1 kmに位置する仙台空港で、流れ込んだがれきや車両が滑走路を塞ぎ、使用不可能となったことから見て取れる。

さらに、大津波の発生に伴い流出した燃料に引火して起こった火災は、被害を拡大させ、避難や救助を妨げた。がれきや大規模な浸水により道路が遮断され、電力不通のため通信手段を失い、多くの避難所は道路が復旧するまでの数日間孤立。避難者の安否さえ不明の状態が続いた。地域医療を担う多くの病院も被災。かろうじて津波を逃れて救助されても、十分な手当てを受けられずに命を落とす被災者も見られた。道路寸断や燃料不足のため救援物資は届かず、必要最低限の物資の入手ですら困難であった。このような状況下で、正確な被災状況の把握は困難を極め、事態が明らかになったのは地震発生後数日が経過し、自衛隊等による救護・救援活動が本格化してからのことだった。

仙台市、石巻市、塩竈市、気仙沼市、名取市、多賀城市、岩沼市、東松島市、亘理町、山元町、松島町、七ヶ浜町、利府町、女川町、南三陸町の本県沿岸15市町全てが津波による甚大な浸水被害を受けた。その数は、推定浸水域にかかる8市7町で人口1,205,851人のうち23.1%にあたる277,952人、世帯数では466,356世帯のうち21%にあたる97,705世帯にもものぼる。

津波の観測状況

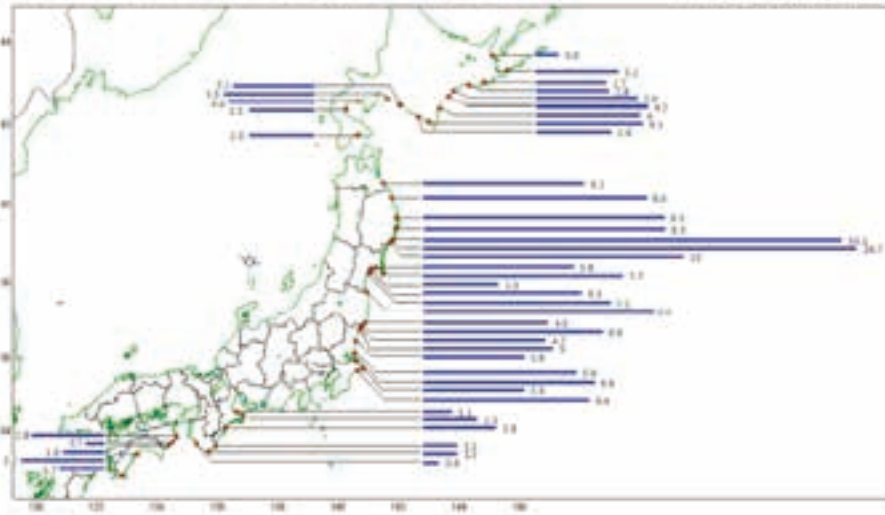


○津波警報の発表状況

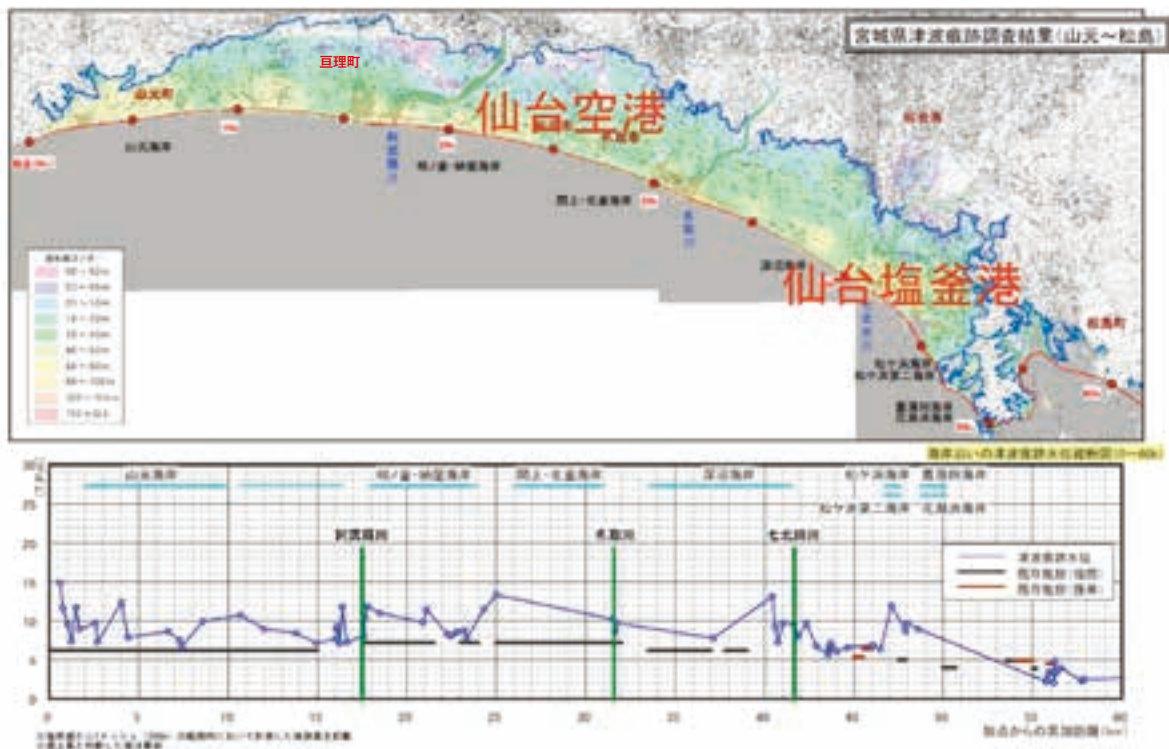
津波警報発表日時	11日	11日	11日	11日	11日	11日	11日	11日	12日	12日	12日	12日	13日
津波予報区	14:49	15:14	15:30	16:08	16:47	17:35	22:55	00:20	13:50	20:20	07:30	17:56	
青森県太平洋沿岸	1m	2m	2m	15m以上	15m以上	15m以上	15m以上	15m以上		低下げ	低下げ	解除	
親不知	3m	3m	10m以上	10m以上	10m以上	10m以上	10m以上	10m以上		低下げ	低下げ	解除	
宮城県	4m	10m以上	10m以上	10m以上	10m以上	10m以上	10m以上	10m以上		低下げ	低下げ	解除	
福島県	3m	4m	10m以上	10m以上	10m以上	10m以上	10m以上	10m以上		低下げ	低下げ	解除	
茨城県	2m	4m	10m以上	10m以上	10m以上	10m以上	10m以上	10m以上	低下げ	低下げ		解除	
千葉県九十九里・外房	2m	3m	10m以上	10m以上	10m以上	10m以上	10m以上	10m以上	低下げ			解除	
北海道太平洋沿岸中部	1m	2m	2m	3m	3m	3m	3m	3m	低下げ	低下げ		解除	
北海道太平洋沿岸東部	0.5m	1m	2m	3m	3m	3m	3m	3m	低下げ	低下げ		解除	
北海道太平洋沿岸西部	0.5m	1m	2m	3m	3m	3m	3m	3m	低下げ	低下げ		解除	
伊豆諸島	1m	2m	2m	3m	3m	3m	3m	3m	低下げ			解除	
千葉県内房	0.5m	1m	2m	3m	3m	3m	3m	3m	低下げ			解除	
小笠原諸島	0.5m	1m	2m	3m	3m	3m	3m	3m	低下げ			解除	
青森県日本海沿岸	0.5m	1m	2m	2m	2m	2m	2m	2m	低下げ			解除	
岩手県・三陸半島	0.5m	0.5m	2m	2m	2m	2m	2m	2m	低下げ			解除	
静岡県	0.5m	0.5m	2m	2m	2m	2m	2m	2m	低下げ			解除	
和歌山県	0.5m	0.5m	2m	2m	2m	2m	2m	2m	低下げ			解除	
徳島県	0.5m	0.5m	2m	2m	2m	2m	2m	2m	低下げ			解除	
高知県	0.5m	0.5m	2m	2m	2m	2m	2m	2m	低下げ			解除	

気象庁機動調査班による現地調査の結果(速報値)

平成23年4月15日時点



○山元町～松島町の津波痕跡図





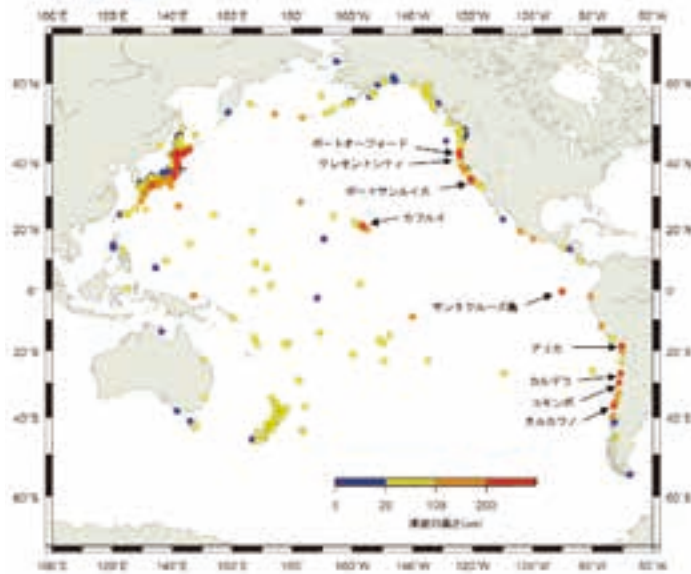
○津波の浸水範囲



○推定浸水域にかかる人口及び世帯数

市区町村	推定浸水域にかかる人口及び世帯数(a)		当該市区町村の人口及び世帯数(b)		推定浸水域の割合(%) (a)÷(b)×100	
	人口	世帯数	人口	世帯数	人口	世帯数
宮城野区	11,858	4,192	190,485	85,390	6.2	4.9
若林区	8,700	2,470	132,391	58,891	6.6	4.2
大田区	2,519	818	220,715	91,585	1.1	0.9
石巻市	102,670	39,091	160,704	57,812	63.9	67.6
塩竈市	173	80	56,480	20,314	0.3	0.4
気仙宮市	29,648	10,456	73,484	23,464	40.3	41.1
名取市	12,132	3,956	73,140	23,190	16.6	15.7
多賀城市	13,681	5,421	62,978	24,047	21.7	22.5
鹿沼市	7,310	2,082	44,198	15,530	16.5	13.4
東松島市	32,993	10,817	42,908	13,995	76.9	78
亶理町	13,185	3,938	34,846	10,899	37.8	36.1
山元町	9,341	3,021	18,711	5,233	55.9	57.7
松島町	1,944	738	15,089	5,149	12.9	14.3
七ヶ浜町	9,433	2,850	20,418	6,419	46.2	44.4
新倉町	242	96	34,000	10,819	0.7	0.9
文川町	8,815	3,470	10,051	3,968	87.7	87.4
栗三橋町	13,306	4,109	17,431	5,295	76.3	77.6
合計	277,952	97,705	1,205,851	466,356	23.1%	21.0%

海外での津波の観測



主な観測点の観測値 (100km以上)

6月11日現在

観測点名	国名	津波の高さ (m)	観測点名	国名	津波の高さ (m)
フレセントシティ	アメリカ	247	フリーナ港	アメリカ	155
アフリカ	チリ	245	シビルパライン	チリ	154
コキンボ	チリ	242	スワイワー	ロシア連邦のロシア	151
サンタクルーズ島	エクアドル	226	ラ・ブンタ	ペルー	144
サルグワ	チリ	214	ボイントレイズ	アメリカ	135
サルガフノ	チリ	209	セロ	アメリカ	133
ポートオーフォード	アメリカ	202	スクアワフテ	トンガ	124
ボートサンルイス	アメリカ	200	アタック	アメリカ	119
カプサイ	アメリカ	200	ロンプラム	バブアニューギニア	108
コンスタントゥーション	チリ	183	アカブルコ	パキスタ	105
ボイントアリーナ	アメリカ	174	イキケ	チリ	104
サンヤニ	メキシコ	170	カワハエ	アメリカ	104
ラリベルター	エクアドル	161	マヌス島	バブアニューギニア	103
コラル	チリ	159	サンタ・ルイス	アメリカ	102
シホス島	アメリカ	157			
ミッドウェイ諸島	アメリカ	157			

## 4 地殻変動の概要

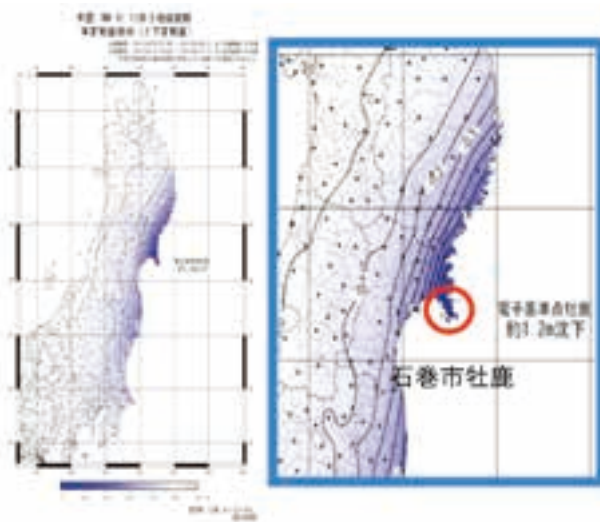
東北地方太平洋沖地震による直接的な被害に加え、石巻市牡鹿では上下方向で約1.2mの地盤沈下、東南東方向に5.3m移動したことを確認。石巻市や気仙沼市等の沿岸部では、住宅街が満潮時に浸水する被害が深刻化した。

地震によって海拔0m以下の面積は56km<sup>2</sup>と、地震前の3.4倍に増加し、大潮の満潮位（T.P.+0.7m）以下の面積は129km<sup>2</sup>で地震前の1.9倍に増加。宮城県沿岸部を中心に大規模な地盤沈下が発生したことが確認された。

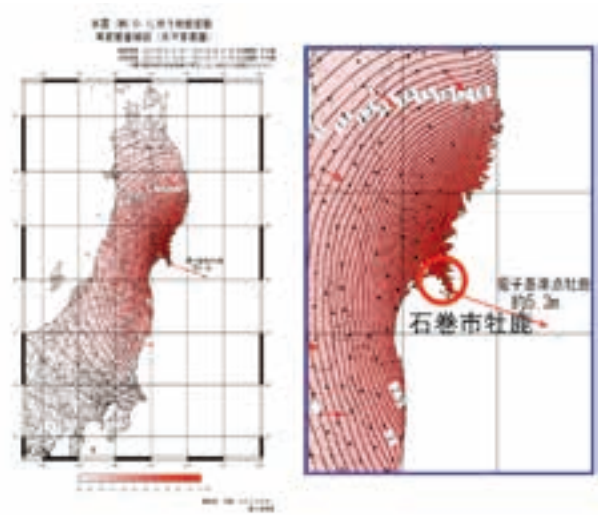


地盤沈下して今も水が引かない荒浜中学校東側の横山地区

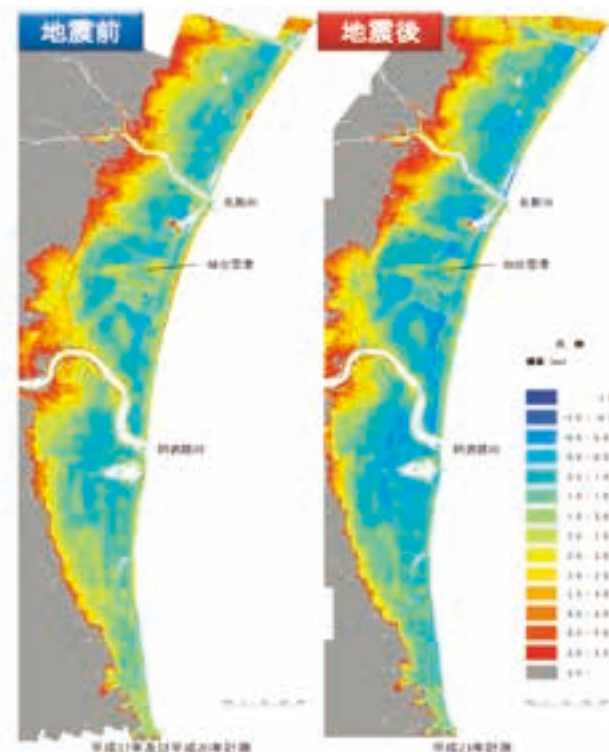
### ○上下変動



### ○水平変動



### ○海水面以下となった土地



	地震後	地震後の増加割合
海拔0m以下の面積 (T.P.±0.0m)	56km <sup>2</sup>	3.4倍
大潮の満潮位以下の面積 (T.P.+0.7m)	129km <sup>2</sup>	1.9倍
過去最高潮位以下の面積 (T.P.+1.6m)	216km <sup>2</sup>	1.4倍





## 第2章

# 被害の概要



## 宮城県の被害の概要

### 1 人的被害 (平成24年12月31日現在)

死者		10,415人
内訳	直接死	9,573人
	関連死	842人
行方不明者		1,314人
重傷		504人
軽傷		3,611人
負傷その他		29人

### 2 住家被害 (平成24年12月31日現在)

全壊	85,414棟
半壊	152,523棟
一部損壊	224,162棟
床上浸水	14,678棟
床下浸水	12,894棟
非住家被害	26,292棟

### 3 避難所・避難者数

ピーク時：平成23年3月14日

避難所	1,183施設
避難者数	320,885人

(県内の避難所は、平成23年12月30日に全て閉鎖)

### 4 ライフライン被害

電気、停電戸数	ピーク時：1,545,494戸 (平成23年6月18日復旧)
水道供給支障	ピーク時：35市町村
ガス供給支障	ピーク時：13市町

### 5 各施設の被害額 (平成25年1月10日現在)

交通関係	103億円
ライフライン施設	1,668億円
保健医療・福祉施設	510億円
建築物（住宅関係）	51,273億円
民間施設等	9,912億円
農林水産関係	12,952億円
公共土木施設・交通基盤施設	12,606億円
文教施設	2,024億円
廃棄物処理・し尿処理施設	69億円
その他の公共施設等	773億円
合計	91,890億円

## ○人的被害の状況（平成24年12月31日現在）

市町村	人口 【国勢調査】 (H22.10)	人的被害						
		死者			行方不明者	負傷者		
		直接死	関連死	合計		重傷	軽傷	その他
		人	人	人	人	人	人	人
仙台市	1,045,986	654	245	899	30	276	1,995	0
石巻市	160,826	3,256	234	3,490	453	不明	不明	不明
塩竈市	56,490	29	18	47	0	2	8	0
気仙沼市	73,489	1,107	104	1,211	234	不明	不明	不明
白石市	37,422	0	1	1	0	0	18	0
名取市	73,134	911	37	948	41	14	194	0
角田市	31,336	0	0	0	0	0	4	0
多賀城市	63,060	188	29	217	0	不明	不明	不明
岩沼市	44,187	181	6	187	1	7	286	0
登米市	83,969	0	8	8	0	12	40	0
栗原市	74,932	0	1	1	0	6	544	0
東松島市	42,903	1,064	63	1,127	29	62	59	0
大崎市	135,147	2	4	6	0	79	147	0
蔵王町	12,882	0	0	0	0	0	0	0
七ヶ宿町	1,694	0	0	0	0	0	0	0
大河原町	23,530	0	2	2	0	0	0	1
村田町	11,995	0	0	0	0	0	1	0
柴田町	39,341	2	3	5	0	3	1	0
川崎町	9,978	0	0	0	0	0	0	3
丸森町	15,501	0	0	0	0	0	1	0
亘理町	34,845	246	18	264	8	2	43	0
山元町	16,704	681	17	698	18	9	81	不明
松島町	15,085	2	5	7	0	3	34	0
七ヶ浜町	20,416	70	3	73	4	調査中	調査中	調査中
利府町	33,994	4	0	4	0	4	0	0
大和町	24,894	0	1	1	0	0	7	0
大郷町	8,927	1	0	1	0	1	4	1
富谷町	47,042	0	0	0	0	2	30	0
大衡村	5,334	0	0	0	0	0	4	0
色麻町	7,431	0	0	0	0	0	9	0
加美町	25,527	0	0	0	0	0	33	0
涌谷町	17,494	1	0	1	2	3	20	24
美里町	25,190	0	1	1	0	19	48	0
女川町	10,051	580	22	602	268	不明	不明	不明
南三陸町	17,429	594	20	614	226	不明	不明	不明
計	2,348,165	9,573	842	10,415	1,314	504	3,611	29

※1 上記には、平成23年4月7日・7月25日・7月31日・8月19日・10月10日・平成24年8月30日・12月7日の余震の被害を含んでいます。

※2 ライフラインは、平成23年12月11日をもちましてすべて復旧いたしました。（津波で流出した地域を除く）

※3 避難所は、平成23年12月30日をもちまして県内避難所はすべて閉鎖されました。

※4 死者について

・直接死とは：津波や家屋倒壊などが原因で死亡したと被災市町村で確認された方の合計となっています。

・関連死とは：直接死以外で、この震災が原因で死亡したと災害弔慰金支給審査会等で認定された方の合計となっています。

## ○住宅被害の状況（平成24年12月31日現在）

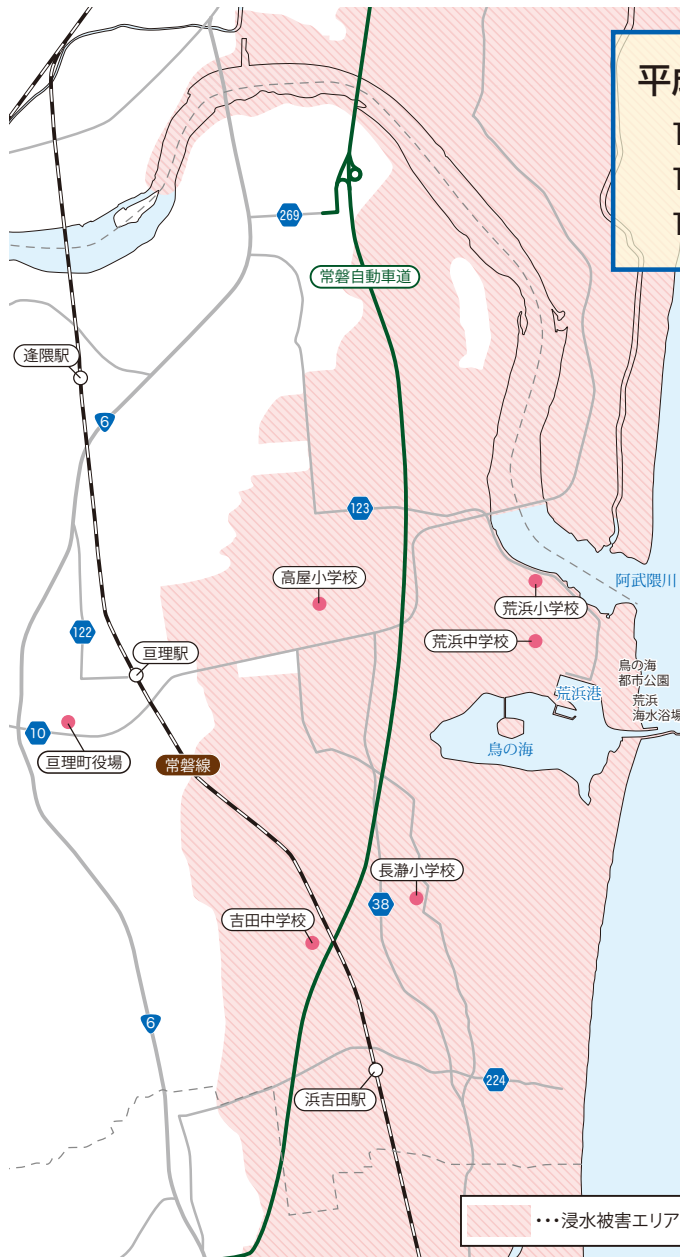
市町村	住 家 被 害					非住家被害 棟
	全 壊	半 壊	一部破損	床上浸水	床下浸水	
	棟	棟	棟	棟	棟	
仙 台 市	29,981	109,274	115,746	調査中	調査中	調査中
石 巻 市	22,357	11,021	20,364	6,821	10,908	調査中
塩 竈 市	655	3,188	6,798	2,606	266	2,345
気 仙 沼 市	8,483	2,570	4,683	不明	不明	9,602
白 石 市	40	566	2,171	0	0	調査中
名 取 市	2,801	1,129	10,061	3,403	1,179	2,805
角 田 市	13	159	1,017	0	0	15
多 賀 城 市	1,746	3,730	6,034	不明	不明	不明
岩 沼 市	736	1,606	3,086	1,611	114	3,126
登 米 市	201	1,792	3,360	0	3	823
栗 原 市	58	372	4,552	0	3	48
東 松 島 市	5,505	5,562	3,511	調査中	調査中	928
大 崎 市	596	2,430	9,139	0	0	328
蔵 王 町	16	155	1,137	0	0	175
七ヶ宿町	0	9	0	0	0	0
大河原町	10	146	1,333	0	0	117
村 田 町	9	115	646	0	0	調査中
柴 田 町	13	189	1,678	0	0	調査中
川 崎 町	0	14	448	0	0	2
丸 森 町	1	38	513	0	0	22
亘 理 町	2,568	1,205	2,448	0	285	387
山 元 町	2,217	1,085	1,138	不明	31	339
松 島 町	221	1,591	1,557	192	91	125
七ヶ浜町	675	648	2,598	調査中	調査中	625
利 府 町	56	900	3,543	45	14	165
大 和 町	42	268	2,778	0	0	調査中
大 郷 町	50	274	781	0	0	203
富 谷 町	16	537	5,291	0	0	0
大 衡 村	0	19	764	0	0	0
色 麻 町	0	15	215	0	0	18
加 美 町	8	35	749	0	0	22
涌 谷 町	144	734	1,021	0	0	543
美 里 町	129	627	3,130	0	0	1,705
女 川 町	2,924	347	663	調査中	調査中	1,590
南 三 陸 町	3,143	173	1,209	不明	不明	234
計	85,414	152,523	224,162	14,678	12,894	26,292

○各施設の被害額（平成25年1月10日現在）

単位：千円

項	目	金額	概要	
交通関係 10,323,204  (東日本旅客鉄道の被害額は含まれていない)	鉄道 8,595,043  (東日本旅客鉄道の被害額は含まれない)	阿武隈急行	386,980	
		仙台臨海鉄道	1,745,000	
		仙台市営地下鉄	1,250,000	
		東日本旅客鉄道	-	全体で678億円（県別の金額は公表していない）
		日本貨物鉄道	5,213,063	
	バス	1,318,000	仙台市営バス、宮城交通等	
	離島航路 410,161	塩竈市営汽船	25,151	
大島汽船		327,700		
網地島ライン		27,310		
シーパル女川汽船		30,000		
ライフライン施設 166,780,019	水道 31,052,619	上水道	30,702,210	水道、水道用水供給事業施設
		工業用水道	350,409	
	電気	51,000,000		
	都市ガス	27,550,000		
保健医療・福祉関係施設 50,953,367	医療機関等	33,412,340		
	民間等社会福祉施設	16,791,221		
	その他県有施設等	749,806	県立社会福祉施設、宮城県立病院機構等	
建築物（住宅関係）		5,127,268,000		
民間施設等 991,190,000	工事関係	590,000,000	建物・機械・設備備品等	
	商業関係	145,000,000	建物・商品等	
	自動車・船舶（漁船を除く）	256,190,000		
農林水産関係 1,295,225,545	農業関係	545,396,810	農地、農業施設、農作物等	
	畜産関係	5,009,460	畜舎、家畜、畜産品等	
	林業関係	55,117,016	林道、林地、治山施設、林産物等	
	水産業関係	680,382,645	水産施設、漁港、漁船、水産物等	
	その他（県所管施設）	9,319,614	船舶、水産技術総合センター等	
公共土木施設（仙台市含む）・交通基盤施設 1,260,559,000	高速道路 12,420,000	NEXCO東日本所管分	12,000,000	東北自動車道、仙台東部道路、仙台北部道路、常磐自動車道
		宮城県道路公社所管分	420,000	仙台南部道路、仙台松島道路
	国直轄分	145,696,000		
	道路（橋梁を含む）	245,793,000		
	河川（ダムを含む）	251,967,000		
	海岸	82,088,000		
	港湾	108,797,000		
下水道	371,690,000			
その他公共土木施設等（空港、所管施設を含む）	42,108,000	砂防、公園等		
文教施設 202,380,097	県立学校	27,126,612		
	市町村立学校	53,611,610		
	私立学校	11,409,888		
	国立学校施設	69,000,000		
	私立大学	3,755,830		
	その他文教施設	37,476,157	社会教育施設、文化財施設、研究施設、宮城大学等	
廃棄物処理・し尿処理施設		6,917,259		
その他の公共施設等 77,317,813	観光施設	21,600,000		
	消防関係施設等	16,428,000		
	警察関係施設等	10,171,336		
	その他	29,118,477	庁舎、県施設等	
合計		9,188,914,304	(東日本旅客鉄道の被害額は含まれていない)	

## 巨理町の被害の概要



**平成23年3月11日(金)**  
 14時46分 地震発生 震度6弱(巨理町)  
 14時49分 大津波警報発令  
 15時52分頃 津波到達

- 町民の死者…………… 306人
- 町民の遺体未発見者…………… 6人
- 住宅被害…………… 6,221棟  
 全壊…………… 2,568棟  
 大規模半壊…………… 285棟  
 半壊…………… 920棟  
 一部損壊…………… 2,448棟
- 津波浸水面積…………… 約35km<sup>2</sup>  
 (巨理町の面積73.21km<sup>2</sup>の約48%が浸水)
- 住宅被害額…………… 1,303億円
- 公共施設被害額…………… 186億9,112万8,000円
- 産業被害額…………… 1,862億6,258万1,000円
- 被害額合計…………… 3,352億5,370万9,000円
- がれき量…………… 約76万トン  
 (津波による堆積物も含む)

### 1 人的被害 (平成25年1月31日現在)

死者 306人  
 (災害関連死亡18人、認定死亡13人を含む)  
 257人 (町内で発見された遺体数)  
 遺体未発見者 6人 (認定死亡13人中)  
 負傷者 45人 (重傷2人、軽傷43人)  
 救助者 2,796人 (避難所からの救助を含む)

### 2 住家被害 (平成25年1月31日現在)

- ・ 地震被害によると思われるもの  
 全壊 99棟 大規模半壊 63棟  
 半壊 290棟 一部損壊 2,164棟
- ・ 津波被害によるもの  
 全壊 2,469棟 大規模半壊 222棟  
 半壊 630棟 一部損壊 284棟
- ・ 合計 (総被害棟数：6,221棟)  
 全壊 2,568棟 大規模半壊 285棟  
 半壊 920棟 一部損壊 2,448棟



### 3 避難者数

- ・ 荒浜小学校 最大避難者数：850人（3月11日15時開設、津波により被災、12日13時全員救出により閉鎖）
- ・ 荒浜中学校 最大避難者数：450人（3月11日15時開設、津波により被災、13日8時全員救出により閉鎖）
- ・ 長瀬小学校 最大避難者数：400人（3月11日15時開設、津波により被災、12日17時全員救出により閉鎖）
- ・ 荒浜支所 最大避難者数：72人（3月11日15時開設、津波により被災、13日13時全員救出により閉鎖）
- ・ 吉田支所 最大避難者数：400人（3月11日15時開設、津波により被災、13日13時全員救出により閉鎖）

避難所名	3月計	4月計	5月計	6月計	7月計	合計
亘理中学校	9,580	8,582	6,471	1,882		26,515
亘理小学校	12,141	6,214	5,195	3,044	211	26,805
亘理高等学校	13,876	16,204	12,262	2,950		45,292
吉田小学校	18,741	7,813	3,730	292		30,576
逢隈小学校	16,387	9,069	4,992	1,182		31,630
逢隈中学校	3,979	1,346				5,325
福祉避難所	252	568	484	169	97	1,570
その他施設	5,458				370	5,828
合計	80,864	49,796	33,134	9,519	678	173,541

### 4 仮設住宅入居状況（ピーク時）

- ・ 館南仮設住宅（116戸） 113戸入居（104世帯384人） 4月29日入居開始
  - ・ 旧館仮設住宅（95戸） 91戸入居（91世帯301人） 5月12日入居開始
  - ・ 宮前仮設住宅（85戸） 81戸入居（68世帯294人） 5月21日入居開始
  - ・ 公共ゾーン1（104戸） 102戸入居（94世帯353人） 5月21日入居開始
  - ・ 公共ゾーン2（198戸） 190戸入居（187世帯635人） 5月28日入居開始
  - ・ 公共ゾーン3（256戸） 252戸入居（242世帯829人） 6月11日入居開始
  - ・ 中央工業団地1（104戸） 102戸入居（91世帯230人） 6月11日入居開始
  - ・ 中央工業団地2（104戸） 103戸入居（99世帯190人） 6月30日入居開始
  - ・ 中央工業団地3（64戸） 60戸入居（59世帯115人） 7月8日入居開始
- 合計（1,126戸） 1,094入居（1,035世帯3,331人）

吉田地区 410世帯1,405人

荒浜地区 577世帯1,788人

町内その他 19世帯54人

町外 29世帯84人（仙台市、岩沼市、女川町、山元町、南相馬市他）

### 5 津波被害

- ・ 津波浸水面積 約35km<sup>2</sup>（亘理町の面積73.21km<sup>2</sup>の約48%が浸水）
- ・ 塩害予想区域水田面積 1,826ヘクタール
- ・ 水稲作付自粛区域面積 387ヘクタール（排水路機能損傷による）
- ・ 水稲作付可能区域面積 536ヘクタール

## 各地区の被害状況 1

### 巨理地区



揺れで倒れたブロック塀。

3月11日 14時56分



役場庁舎北側屋上部分のコンクリートが剥がれ落下。

3月11日 15時00分

## 亘理地区



書類が散乱する役場庁舎1階保健福祉課。

3月11日 15時05分



平成23年4月1日採用予定者の研修中に地震が発生した役場庁舎3階会議室。

3月12日 9時20分

吉田地区



吉田支所から見た津波到達後の吉田地区。  
3月11日 17時10分



吉田支所から見た津波到達後の吉田地区。  
3月11日 17時10分

## 吉田地区



吉田支所内に避難した住民。

3月11日 17時22分



津波が押し寄せた浜吉田駅北側の吉田浜街道踏切。

3月14日 6時45分



がれきに覆われた浜吉田駅。

3月14日 6時46分



津波襲来後の痕跡が残る長瀬小学校の教室。

3月24日 11時24分

## 荒浜地区



地震後液状化した、わたり温泉鳥の海の玄関前。

3月11日 15時21分



わたり温泉鳥の海に押し寄せる津波第二波。

3月11日 16時02分



荒浜支所から見た、津波到達後の荒浜地区。

3月11日 17時20分



津波が引いた後の、わたり温泉鳥の海。

3月12日 11時38分



## 荒浜地区



津波が引いた後の荒浜小学校。

3月13日 7時34分



がれきに覆われる荒浜中学校の校庭。

3月19日 7時42分



津波の猛威から橋上にはワゴン車等が打ち上げられた。  
(海浜の森へと続くマリンレインボーブリッジ)

3月19日 9時35分



漁船が陸に上がった状態の荒浜漁港。

4月7日 10時28分

## 逢隈地区



側道が崩れ落ちガードレールが大きく歪んだ。(町道上郡小山線 梅ノ原ため池法面)  
平成23年3月撮影



プール施設内にひびが入った逢隈小学校。  
平成23年4月撮影



施設壁面に被害を受けた逢隈中学校。  
平成23年4月撮影

## 各地区の被害状況2





荒浜地区上空。平成23年3月18日撮影



鳥の海上空。平成23年3月18日撮影



自衛隊による入浴支援で設置された仮設風呂。平成23年4月撮影



震災後解体された巨理町役場庁舎。平成23年5月撮影









分別され積み上げられる震災がれき。平成23年6月撮影





東方上空から見た鳥の海周辺。平成24年10月撮影



西方上空から見た亙理町内。平成24年10月撮影

## 巨理町被害状況



津波を免れた内陸の地域でも、ブロック塀の倒壊などが相次いだ。(祝田東地区)



巨理町役場庁舎もガラスが割れるなどの被害に見舞われた。



地震発生から約1時間。津波は瞬く間に町の東部地域を飲みこんだ。(吉田中学校)



津波の被害を受けた「わたり温泉 鳥の海」ロビー。



いちごのビニールハウスも甚大な津波被害を受けた。



みやぎ生協巨理店も浸水被害を受け、翌朝になっても水が引かない状況だった。(3月12日撮影)



内陸部でも、地震による地面の隆起が見られた。(悠里館)







津波の威力により、道路はめくられ、電柱がなぎ倒されている。(荒浜一丁目川口神社付近)



がれきは住宅地の路地まで押し寄せた。



緊急車両が入れるよう、がれきは道路の端に寄せられた。(荒浜一丁目)



震災当日の午前中に行われた卒業式の紅白幕が張られたままの荒浜中学校。



津波は消防団の活動も妨げた。(鳥屋崎)



津波によってえぐり取られた道路。(荒浜五丁目阿武隈川河口付近の堤防)



荒浜五丁目から西部を撮影



震災後1週間を過ぎても、沿岸部はがれきに覆われ、水が引かない地域があった。(荒浜中学校付近)



津波により、多数の自動車が水没した。(鳥の海)



津波は、防潮林をも根こそぎなぎ倒した。(荒浜海水浴場付近)





陸上には多数の船が打ち上げられた。(箱根田東御狩屋公園付近)



1階部分の柱があらわになった「宮城県漁業協同組合 亘理支所」。





震災の爪痕が残る中でも、桜はいつも通り咲いた。



津波によって根元から倒された電柱。(港町)

## 第3章

# 巨理町の地震発生後の対応と 一年の軌跡



## 巨理町の地震発生後の対応

日 時	国・宮城県の動き	巨理町の動き
2011年		
	<b>14時46分 三陸沖を震源とするマグニチュード9.0、最大震度7の地震発生。</b>	
3月11日 14時46分	地震発生と同時に、宮城県庁5Fに知事を本部長とする非常災害対策本部を設置（非常配備3号）。 宮城県内の全市町村に災害救助法を適用。	震度6弱観測。 町内全域で停電発生。
14時49分	大津波警報発令、宮城県沿岸に津波最大6mと予想（気象庁）。	
14時50分	県危機対策専門監から陸上自衛隊第22普通科連隊（多賀城駐屯地）に対し、電話で災害派遣準備を連絡。 政府で官邸対策室を設置し、緊急参集チームを参集。	巨理町災害対策本部設置（本部長：齋藤町長）。
14時55分		防災車による広報活動のため、荒浜地区と吉田東部地区へ出発。
14時58分	県内全市町村に対し、衛生無線FAXにて手描きによる避難指示を一斉送信。	
15時01分	宮城県知事が自衛隊へ災害派遣要請を指示。	
15時02分	東北方面総監部防衛部防衛課へ電話で災害派遣要請。	
15時14分	宮城県沿岸に津波最大6mから10mと修正（気象庁）。 県内全市町村に対し、衛生無線FAXにて手描きによる避難指示を再度一斉送信。	
	<b>15時15分 茨城県沖を震源とするマグニチュード7.6、最大震度6強の最大余震発生。</b>	
15時15分		避難計画に基づく避難指示決定（防災無線放送は消防署）。以後15時50分まで計7回の放送。 悠里館からの報告で避難者の状況を確認。
15時17分		荒浜児童館・保育所から避難実施に際しての応援要請。
15時18分		荒浜小学校からの報告で避難者の状況を確認。
15時19分		巨理警察署地域課から災害対応の体制確認。
15時30分	第1回災害対策本部会議。知事より、津波で甚大な被害が出ているので、人命救助、情報収集に全力を挙げると指示。	
15時36分	国に対し、緊急消防援助隊の派遣を要請。	
15時55分		津波襲来による避難指示の放送（消防署）。以後18時10分まで計18回の放送。
16時00分	知事が臨時記者会見をし、援助、避難活動への協力や落ち着いて行動するよう呼びかけを実施。	
16時45分		船岡自衛隊から状況確認（津波襲来報告）。
16時52分		巡回から阿武隈川堤防、今泉公会堂裏堤防に亀裂を発見したとの報告で国交省仙台河川国道事務所岩沼出張所に連絡。
17時00分	第2回災害対策本部会議。この時間を過ぎた頃から、一般、市町村、地方機関から被害報告や避難情報の電話が多数入る（以後、災害対策本部会議は平成24年3月26日開催の第95回まで継続）。	
17時15分		吉田支所からの報告で避難者の状況を確認。
19時25分		わたり温泉鳥の海からの報告で避難状況及び被災状況確認。 巡回職員から森消防団長他4名が吉田中学校に一時避難したとの報告。
20時00分		吉田中学校から津波浸水深1mとの報告。
20時02分		巡回から高屋堀から東は水没。高屋小学校には行けないとの報告。
20時07分		吉田支所、現在326名が2階に避難し、全員無事との報告。
20時18分		荒浜支所、現在70名が避難し、1階は浸水との報告。

日 時	国・宮城県の動き	巨理町の動き
20時19分		荒浜中学校、浸水50cm、浮遊物が多いとの報告。
20時25分		逢隈中学校10名、逢隈小学校200名の避難者を確認。
20時50分	東京電力福島第一原子力発電所半径2km以内の避難指示。	
21時20分		中央公民館に臨時の救護所を設置。
21時23分	東京電力福島第一原子力発電所半径3km以内の避難指示。	
21時43分		山本医院に避難者3名との連絡が入る。
21時45分		宮城県災害対策本部へ被害状況を報告（第1報）。
21時50分		巨理町災害対策本部長、自衛隊出動を県知事に要請。
21時54分		吉田小学校避難者800名との報告と無線機貸与の要請。
22時25分		吉田中学校から一時避難の5名は無事、水位は30cmまで下がっているとの報告。
22時55分		大津波警報発令中、仙台港で10mを観測（消防署放送）以後2回放送。
23時07分		ホクト建機へ災害支援要請（発電機、投光機、ストーブ）。
3月12日 0時26分		大津波警報発令中、津波襲来放送（消防署）。
0時50分		災害支援協定に基づき、米沢市に飲料水の支援要請。
1時57分		炊き出しを婦人防火クラブ会長に要請（中央公民館、逢隈支所）。 災害時支援協定により、災害活動車輛に対して燃料の優先給油を要請（本部：ワタヨシコーポレーション）。
2時35分		宮城県災害対策本部へ食料・毛布・ストーブ・灯油等の支援物資を要請。
3時20分		庁舎内電話不通となる。
3時30分		宮城県災害対策本部へ被害状況を報告（第2報）。
	<b>3時59分 誘発地震と見られる長野県北部地震が発生。マグニチュード6.7、最大震度6強。</b>	
4時50分		宮城県災害対策本部へ支援物資の準備状況を確認（調整中）。
5時00分	第5回災害対策本部会議。知事より、人命救助最優先、医師の派遣、ご遺体の安置対策の指示あり。	
5時44分	東京電力福島第一原子力発電所半径10km以内の避難指示。	
6時00分	国で宮城県に緊急災害現地対策本部を設置。	
6時10分		宮城県災害対策本部へ被害状況を報告（第3報）以降3月中に第55報まで報告。
6時55分	知事と関係者が現地調査を行うため、自衛隊ヘリで沿岸部に出発。	
7時10分		警察救援隊、本町に到着。
7時45分		船岡自衛隊104施設隊到着、活動開始。
7時55分		宮城県知事へ救助ヘリの出動要請。
8時30分		宮城県災害対策本部へ巨理高等学校の避難所使用を要請。
8時53分		宮城県災害対策本部へ巨理高等学校の避難所使用を確認（宮城県教育委員会了承により使用可能となる）。
9時00分		給水車による給水作業開始（中央児童センター・旭台中央公園・逢隈支所）。
10時00分		米沢市来町。中央公民館南側でペットボトル水450本を配布。
10時20分		陸上自衛隊第10師団到着。 荒浜小学校避難者の救出活動開始（逢隈小学校へ）。
13時00分		荒浜小学校避難者全員救出し、避難所を閉鎖。
13時35分		宮城県災害対策本部へ支援物資の準備状況を確認。
15時00分		愛知県から消防緊急援助隊5隊到着（二の丸駐車場）。 長瀨小学校避難者巨理高等学校避難所への移動を開始。

第3章 亶理町の地震発生後の対応と一年の軌跡

日 時	国・宮城県の動き	亶理町の動き
15時30分		消防緊急援助隊、荒浜中学校・荒浜支所へ食料配布その後、救助ヘリによる避難者救出を開始。
<b>15時36分 東京電力福島第一原子力発電所1号機水素爆発。</b>		
17時20分		日赤医療応援隊14名着任。
18時25分	東京電力福島第一原子力発電所半径20km以内の避難指示。	
20時10分		亶理町災害対策本部員会議開催。
20時20分	宮城県沿岸の津波警報から津波警報に切下げ（気象庁）。	
3月13日 5時35分		荒浜中学校避難者の救助ヘリによる救出活動開始。
6時40分		亶理町災害対策本部員会議開催。
7時00分		消防緊急援助隊捜索活動開始。
7時30分	宮城県沿岸の津波警報から津波注意報に切下げ（気象庁）。	荒浜中学校避難者の救助ヘリによる救出終了。その後亶理高等学校避難所へ町のバスで移送を開始。
8時00分		荒浜中学校避難所を閉鎖。
8時43分		津波警報再度発表、防災無線で放送（消防署）。
8時45分		宮城県市町村課へ飲料水と食料の支援要望報告。
9時00分		中央公民館に日赤臨時救護所開設。
10時30分		吉田支所避難者の救出活動開始（逢隈中学校へ）。
13時00分		吉田支所避難所を閉鎖。
14時00分		町議会と緊急の全員協議会を開催。
15時45分		荒浜地区、吉田東部地区の全避難所閉鎖を確認。
16時00分		消防本部の防災行政無線バッテリーダウン。
17時58分	宮城県沿岸の津波注意報解除（気象庁）。	
19時15分		みやぎ生協からの支援物資到着。
20時00分		国土交通省四国地方整備局から派遣の4名到着（排水機場損壊に伴うポンプ車による排水活動のため）。
<b>11時01分 東京電力福島第一原子力発電所3号機水素爆発。</b>		
3月14日		佐藤記念体育館で支援物資の受け入れ開始（～平成23年12月31日）。
<b>6時20分頃 東京電力福島第一原子力発電所2号機の圧力制御室付近で水素爆発。</b>		
11時35分		アイリスオーヤマからビニールシート寄附の申し出あり。角田工場より300枚受領。
14時00分		津波被害地域以外、町の半分が停電解消。
<b>22時31分 誘発地震と見られる静岡県東部地震が発生。マグニチュード6.4、最大震度6強。</b>		
3月16日	がれき撤去が一部終了した仙台空港に米軍機1号機が着陸。	荒浜小学校、荒浜中学校の児童生徒全員の無事を確認（教育委員会）。
3月17日		長瀨小学校の児童全員の無事を確認（教育委員会）。 仙台地方振興事務所からの支援物資到着。
3月18日		B&G海洋センター体育館をご遺体の安置所とし、旧角田女子高等学校から町民のご遺体を安置した（～4月5日）。
3月19日	「トモダチ作戦」として日米合同救援活動を開始。	日就館に災害ボランティアセンターを開設（8月13日まで延べ31,666人が活動）。 陸上自衛隊第3師団による入浴支援が中央児童センター駐車場で開始（～7月3日）。翌21日から逢隈中学校でも開始（～6月19日）。
3月20日	石巻市の倒壊家屋から80歳女性と16歳男性を救助。	遺体安置所（旧角田女子高等学校）への送迎バス運行開始。
3月21日		建築物応急危険度判定作業開始。 亶理駅～長町駅間の直行バスの運行開始（1日4往復）。
3月22日		亶理町仮埋葬地（観音院内）への仮埋葬始まる（4月14日まで121人を埋葬）。 燃料不足により臨時灯油販売を町内で開始。
3月23日		村井嘉浩宮城県知事来町。

日時	国・宮城県の動き	巨理町の動き
3月24日	東北自動車道の交通規制を全面解除。	大分県日田市職員来町。支援物資搬入。
		罹災証明発行指示、聞き取りにより申請書受理開始。
		巨理町臨時災害放送局「FMあおぞら」が午後4時に開局（周波数78.6MHz・出力30W、4月2日に周波数を79.2MHzに変更する）。
3月26日		水道の復旧により臨時給水所を閉鎖。
3月27日		原口一博、松木謙公衆議院議員来町。
		谷垣禎一自民党総裁（当時）来町。
3月28日		応急仮設住宅の建設工事始まる。
3月29日		応急仮設住宅入居者募集開始。
3月30日		旧角田女子高等学校に安置している身元不明遺体（15人）を宮城県警察から町が引き受け、仮埋葬する。
3月31日		ベガルタ仙台慰問による来町。
		町内保育所で卒園式。
		町内小学校で卒業式及び修了式。
		町内中学校で修了式。
4月1日		家庭ごみの収集が被災地域を除き再開される。地震災害によるがれき受け入れ開始（割山採取場・5月31日まで）。被災車両の撤去始まる（公共ゾーンに仮置きする）。
4月2日		東北本線岩沼駅～仙台駅間で運転再開（4日から巨理駅～下郡～岩沼駅の路線バス運行開始）。
4月3日		小池百合子自民党総務会長（当時）来町。
		鈴木克昌総務副大臣（当時）来町。
4月4日		役場の業務を再開。町内避難所から医療機関等までの送迎バスを運行。町内保育所・児童クラブで保育再開（吉田保育所は巨理保育所と中央児童センターで、荒浜保育所は鹿島保育所で再開）。
4月6日		埼玉県長瀨町長来町。
4月7日	宮城県に津波警報、青森から茨城へ津波注意報発令。	<b>23時32分 宮城県沖を震源とするマグニチュード7.2、最大震度6強の余震が発生。</b>
		震度5強観測。庁舎停電。 仙南広域水道漏水のため断水（8日～12日）。臨時給水所を中央児童センター・旭台中央公園・旧J A高屋出張所・浜吉田駅前に設ける。
4月8日		桜井充財務副大臣（当時）来町。
		安倍晋三衆議院議員来町。
4月9日		避難所の再編計画による移転・統合が始まり、逢隈中学校を廃止（～10日）。
4月11日	宮城県震災復興基本方針（素案）を発表。	宅地内がれき撤去の旗表示開始。
		震災一ヵ月追悼、黙祷実施。
		サッカー日本代表今野泰幸選手来町。
4月12日		震度4観測。津波注意報発令。 常磐線巨理駅～仙台駅間運転再開。JRによる巨理駅～相馬駅間の代行バスの運行始まる。
4月13日	仙台空港で国内臨時便が震災後初就航。	仙南広域水道の復旧により臨時給水所を閉鎖。
4月14日	塩竈市魚市場で震災後初の水揚げ。	町は緊急生活支援金として、2人までの世帯2万円、3人以上の世帯3万円を支給（平成24年3月31日受付終了）。
4月16日	仙台市ガス局の都市ガス復旧工事終了（仙台市の津波被災地域除く）。	
4月18日		津波によるがれきの撤去開始（旗による意思表示を採用）『広報わたり（臨時号）』をA2版サイズで発行。
4月19日		日本財団の甲慰金・見舞金の支給開始。
4月20日		生活再建支援法の申請受付を開始。
		巨理地区内の避難所にプレハブの調理室を設置し、被災者による炊出し開始。
4月21日	東北本線の仙台～一関間で運転再開。	

### 第3章 巨理町の地震発生後の対応と一年の軌跡

日 時	国・宮城県の動き	巨理町の動き
4月22日		大村秀章愛知県知事来町。
4月23日	東北新幹線の盛岡～一関間で運転再開。	発災から人命捜索に当たった愛知県緊急消防援助隊の解隊式が悠里館で行なわれる。
	マリンピア松島水族館が営業再開。 サッカーJ1が再開。ベガルタ仙台が川崎フロンターレに2対1で勝利。	
4月24日		仙谷由人官房副長官(当時)、辻元清美首相補佐官(当時)来町。
4月25日	東北新幹線の仙台～福島間で運転再開。仙台～東京間が直通運転となる。	国土交通省四国地方整備局4名排水活動終了し帰還。
		小中学校始業式。荒浜中学校は逢隈中学校で、荒浜小学校は逢隈小学校で、長瀬小学校は吉田中学校で授業を再開。
		さざんか号が、北部循環線・サニータウン線で運転を再開。
4月26日		応急仮設住宅入居の抽選実施。
		町内の各小学校で入学式を挙行。
		震災復興本部を設置。
		鳥屋崎・箱根田西・箱根田東・一丁目・二丁目の一部で試験通水を開始。
4月27日	天皇后両陛下が南三陸町・仙台市をご訪問。	
4月28日		静岡県函南町来町。支援物資搬入。
		支援物資を届けるため、町民生委員児童委員協議会による「レッツゴーわたり」が逢隈の高音寺駐車場にオープン(～7月10日)。
		震災犠牲者の仮埋葬地で、犠牲者を供養する四十九日法要が営まれる。
4月29日	東北新幹線が仙台～一関間で運転再開し全線復旧。	館南仮設住宅入居開始(116戸)。
	仙台市営地下鉄が台原～泉中央間で運転再開し全線復旧。	元サッカー日本代表監督岡田武史氏来町。
	震災復興キックオフデー開催。	
5月1日		巨理公園(野球場・テニスコート)、あぶくま公園(野球場・ソフトボール場・サッカー場)の利用を再開(中央公民館等の社会教育施設は6月再開)。
5月2日	第1回宮城県震災復興会議開催。	岐阜県羽島市来町。支援金贈呈、支援物資搬入。
5月3日		茨城県牛久市長来町。
5月4日	皇太子妃が岩沼市、山元町をご訪問。	
5月5日		巨理町子どもの日復興祭を開催。
5月9日		拾得物の公開・返還を公共ゾーン大型テントで開始(～8月5日、10月1日～11月30日)。
5月11日		震災2ヵ月追悼、黙祷実施。
5月12日		旧館仮設住宅入居開始(95戸)。
5月14日		鹿野道彦農林水産大臣(当時)来町。
		義援金の申請受付開始。
		「わたり復興あおぞら市場」として荒浜地区などで支援物資の配布を開始。
5月17日		巨理いちごっこがオープン。
5月18日		仙台河川国道事務所長来町。阿武隈川堤防の被害状況と今後の対応について説明。
5月19日		仮埋葬ご遺体の改葬(仮葬)開始(～6月23日)。
5月21日	中国の温家宝首相、韓国の李明博大統領が来県。	宮前仮設住宅(85戸)、公共ゾーン1期仮設住宅(104戸)入居開始。
5月23日		陸上自衛隊第10戦車大隊並びに第10偵察隊帰隊式。
5月25日		震災後初となる巨理町議会臨時会を開催。
5月28日		公共ゾーン2期仮設住宅入居開始(198戸)。
5月30日		高円宮妃久子さまと長女承子さまがお見舞いのため巨理救難所(県漁協巨理支所)を訪問される。
6月1日		機構改革で震災復興推進課を新設。
6月3日	第2回宮城県震災復興会議(東京)。	町長記者会見(復興へ向けた方針について)。



日 時	国・宮城県の動き	巨理町の動き
6月4日	皇太子同妃両殿下が岩沼市、山元町をご訪問。	
6月6日		東京都練馬区の職員派遣（避難所運営業務等）が終了。
6月10日		震災後初めて、荒浜から釣り船が出航。
6月11日		ニシャンベ・トーゴ共和国大統領が巨理町を視察。
		震災3ヵ月追悼、黙祷実施。
		公共ゾーン3期仮設住宅（256戸）、中央工業団地1期仮設住宅（104戸）入居開始。
6月17日		旧角田女子高等学校遺体安置所閉鎖。
6月20日	政府で「東日本大震災復興基本法」成立。	
6月22日		第1回巨理町震災復興会議を開催。委員に18人を委嘱する。
6月25日	政府の東日本大震災復興構想会議が「復興への提言」を決定。	荒浜漁港にて震災後初水揚げ。
6月27日	秋篠宮同妃両殿下が気仙沼市をご訪問。	
6月30日		中央工業団地2期仮設住宅（104戸）入居開始。
7月1日	「仙台・宮城伊達な旅復興キャンペーン」スタート。	
7月3日		最後の避難所となった巨理中学校避難所を閉鎖。働く婦人の家に一時待機所を開設（8月3日に閉鎖）。
		陸上自衛隊第3師団による入浴支援が終了。翌4日に帰隊式を行う。
7月6日		荒浜地区にて姉妹都市被災支援事業壮行会開催。
7月8日		中央工業団地仮設住宅三期（64戸）が完成。これにより建設予定の仮設住宅1,126戸が完成する。
		役場総合案内所を閉鎖。
7月10日		いちご農家6家族がふるさと姉妹都市北海道伊達市でいちご栽培に取り組むため出発（うち2家族は8月28日に出発）。
		被災体験記録のため宮城学院女子大学J・F・モリス教授と共同で聞き取り調査を開始。
7月11日		災害ボランティアセンターへの依頼受付を終了。
7月13日	第3回宮城県震災復興会議（東京）。	
	「宮城県震災復興計画(案)」パブリックコメントを開始。	
7月14日		津波被災地の復興に関する第1回町民意向調査を実施。
7月16日	東北六魂祭開催（～17日）。	
7月19日		「津波被害による損壊家屋等の基礎等の撤去」の受付開始。
7月25日	「宮城県内における、東京電力福島第一原子力発電所事故に伴う被害への対応を求める要望書」を細野原発事故の収束及び再発防止担当大臣（当時）に提出。	
	仙台空港の国内定期便・国際臨時便が運行再開。	
7月26日		第2回巨理町震災復興会議を開催。
7月29日	「東日本大震災からの復興の基本方針」を決定。	
8月1日	宮城県内での自衛隊の支援活動が終了。	巨理町立荒浜保育所等の解体作業開始。
		地震による損壊家屋等の解体申請の受付始まる（～8月31日）。
8月2日		陸上自衛隊第10師団から任務を引き継いだ陸上自衛隊東北方面特科隊帰隊式（巨理町から自衛隊が全面撤退）。
8月4日	「東日本大震災に対処するための追加予算措置等を求める要望書」を菅内閣総理大臣（当時）に提出。	
8月5日		遺留品の公開展示終了。
		巨理町震災復興基本方針（案）に関する意見交換会を開催（～21日まで11回開催）。
8月6日	仙台七夕まつり開催（～8日）。	
8月10日	宮城県内初の事業用仮設施設（「しおがま・みなと復興市場」）が完成。	巨理町消防団協力事業所表示証交付式開催。
8月11日		巨理町合同追悼式を挙行（巨理中学校体育館）。

### 第3章 巨理町の地震発生後の対応と一年の軌跡

日 時	国・宮城県の動き	巨理町の動き
8月13日		災害ボランティアセンターの活動が終了。
8月15日		荒浜漁港「わたりふるさと追悼供養灯籠流し 鎮魂の夕べ」開催。
8月17日	「宮城県震災復興計画（最終案）」を公表。	
8月19日		巨理地区まちづくり協議会設立総会開催。
8月22日	第3回宮城県震災復興会議（県庁）。	
8月23日	ジョセフ・バイデン米国副大統領来県。	
8月26日	宮城県震災復興計画（案）を公表。	
9月1日		宮城県漁業協同組合巨理支所にて、漁業砕氷製造機並びに冷凍庫・冷蔵庫完成落成式開催。
9月4日		第3回巨理町震災復興会議を開催。
9月5日	「宮城県サポート支援センター支援事務所」開設。	震災復興計画の骨子となる巨理町震災復興基本方針を決定。
9月7日	「東日本大震災に対処するための追加予算措置等を求める要望書」を野田内閣総理大臣に提出。	
9月12日	「東京電力福島第一原子力発電所事故対策みやぎ県民会議」設立。	
9月16日	日本製紙石巻工場が生産を開始。	いちご農家が逢隈小山地区の耕作放棄地にいちご作り再開に向けて準備を開始。
9月17日	野田首相が気仙沼市を視察。	
9月25日	仙台空港ターミナルビルが完全復旧し、国際定期便（仙台～ソウル便）再開。	
9月29日	宮城県知事が宮城県産の新米の安全宣言を発表。	郡和子衆議院議員が来町。
10月1日	仙台空港アクセス鉄道全線運行再開。	災害ボランティアセンターに代わって、社会福祉協議会のささえあいセンター「ほっと」の活動始まる。
10月3日		さざんか号南部循環線の一部で運転再開。
10月5日	「東日本大震災に対処するための追加予算措置等を求める要望書」を野田内閣総理大臣に提出。	
10月16日・22日		巨理町震災復興計画（案）に関する住民説明会を開催。
10月18日	宮城県議会で「宮城県震災復興計画」を承認。	
10月20日		巨理町沖にてサケ漁再開。
10月23日		荒浜復興祭開催（荒浜地区まちづくり協議会）。
10月28日	東日本大震災復興特別区域法を閣議決定。	
10月30日		津波被災地の復興に関する第2回町民意向調査を実施。
11月2日	キリンビール仙台工場が震災後初出荷。	
11月9日		みやぎ巨理農業協同組合荒浜支所再開。
11月13日	宮城県議会議員選挙。	震災の影響により延期されていた巨理町議会議員選挙を実施。
11月14日	「宮城県産業復興相談センター」開設。	
11月19日		震災後初となる巨理のいちごの出荷開始。
11月25日		災害廃棄物処理業務巨理名取ブロック巨理処理区の安全祈願祭が行われ、震災がれき処理施設が本格着工する。
11月26日		台湾佛教慈濟基金会見舞金の贈呈。
12月1日	「みやぎの心のケアセンター」開設。	
12月2日	「2011 SENDAI光のページェント」開催（～31日）。	
12月7日	東日本大震災復興特別区域法が成立。	
12月12日	「東日本大震災により被災したJR各線の復旧に当たり財政支援を求める要望書【岩手県・福島県との共同要望】」を野田内閣総理大臣に提出。 「東日本大震災に対処するための継続的な予算措置等を求める要望書」を野田内閣総理大臣に提出。	
12月16日		イスラエル大使が来町。 巨理町震災復興計画を策定。
12月19日		町長記者会見（震災復興計画策定について）。
12月23日		鳥の海ふれあい市場、築港通り仮設店舗で営業再開。

日 時	国・宮城県の動き	巨理町の動き
12月27日	宮城県産業復興機構が発足。	
12月30日	宮城県内の全避難所が閉鎖。	
2012年		
1月1日		巨理町公共ゾーン仮設住宅にて花火大会開催。
1月4日	みやぎ被災者聴覚障害者情報支援センター開設。	
1月5日		荒浜支所を再開する。(吉田支所は4月2日に再開)。
1月8日		平成24年巨理町成人式挙行。
1月10日	野田首相が来県。 「東日本大震災に対処するための要望書」を野田内閣総理大臣に提出。	
1月13日		仮設住宅の防犯パトロールを行う「公共ゾーンセーフティークラブ」が結成される。(10月22日には中央工業団地仮設住宅に「じっちタリスマンズ」が結成される)。
1月15日		逢隈地域シンポジウムが「大震災を体験して」をテーマに開催される。
1月20日	「東京電力福島第一原子力発電所事故に伴う被害への早期対応を求める要望書」を野田内閣総理大臣に提出。	
1月21日		常磐線浜吉田駅までの運転再開を願い、同駅沿線の草刈り清掃作業が地域住民約180人が参加して実施される(2回目は7月8日に実施)。
1月22日	仙台港にて北米西岸／東南アジアコンテナ航路を再開。	
1月31日	東京電力福島第一原子力発電所事故被害対策基本方針を策定。 国に復興交付金事業計画(第1回)を提出。	
2月10日	復興庁が発足。	
2月22日		姉妹都市復旧支援で、北海道伊達市商工会議所と巨理町災害防止協議会との間で協定を締結。
2月25日		公共ゾーン仮設店舗ふるさと復興商店街がオープン。
2月28日		東京電力福島第一原子力発電所事故に伴い、環境省の「汚染状況重点調査地域」に指定される。
3月2日	国から復興交付金可能額通知(第1回)が発表。	
3月6日	「東日本大震災復興交付金に関する緊急要望書」を平野復興大臣に提出。	役場本庁舎(昭和38年建設)解体開始。半世紀の歴史に幕を閉じる。
3月10日		町内の各中学校卒業式挙行。
3月11日		東日本大震災一周年合同追悼式挙行。
3月13日	「被災者に対する新たな法的支援を実施するための特別立法を求める要望書」を野田内閣総理大臣に提出。	
3月16日		町内の各小学校卒業式挙行。
3月24日		災害廃棄物処理業務巨理名取ブロック巨理地区の火入式が行われ、4月5日から処理が開始される。
3月26日	津波避難のための施設整備指針を津波対策連絡協議会で承認。	
3月28日	宮城の将来ビジョン・震災復興実施計画を策定し公表。	
3月30日		巨理町災害対策本部解散。
4月1日		役場組織の機構改革。 震災復興推進課を廃止し、業務を企画財政課と復興まちづくり課(新設)に分割する。 用地対策課、被災者支援課を新設。 産業観光課を農林水産課、商工観光課に分割。 保健福祉課を福祉課、健康推進課に分割。

## 巨理町の動きと取り組み

### ■3月11日(金)14時46分 地震発生

巨理町では震度6弱を観測

14時49分 大津波警報発令

### ■14時50分 巨理町災害対策本部設置

ただちに防災無線放送により避難計画に基づく避難指示を開始

3月11日



巨理町役場も激しい揺れに襲われ、窓口来庁者（町民等）の避難誘導を行い職員も建物の外に避難した。

3月11日



役場内も落下物が相次いだ。



沿岸部では地震発生直後に液状化や地盤沈下が見られた。

3月11日



津波襲来直前の鳥の海。



まるで壁のように押し寄せた津波は、あっという間に町を飲みこんだ。

3月12日



逢隈小山地区の被害。



役場庁舎が損壊したため駐車場にテントを張り災害対策本部を設けた。

3月12日



町職員が手分けして早朝から炊き出しを開始した。



3月12日



津波の形跡がある巨理大橋。



沿岸部に取り残された住民の、ヘリコプターによる救出活動が始まった。

3月12日



翌日も水が引かず救助や道路のがれき撤去が難航した。

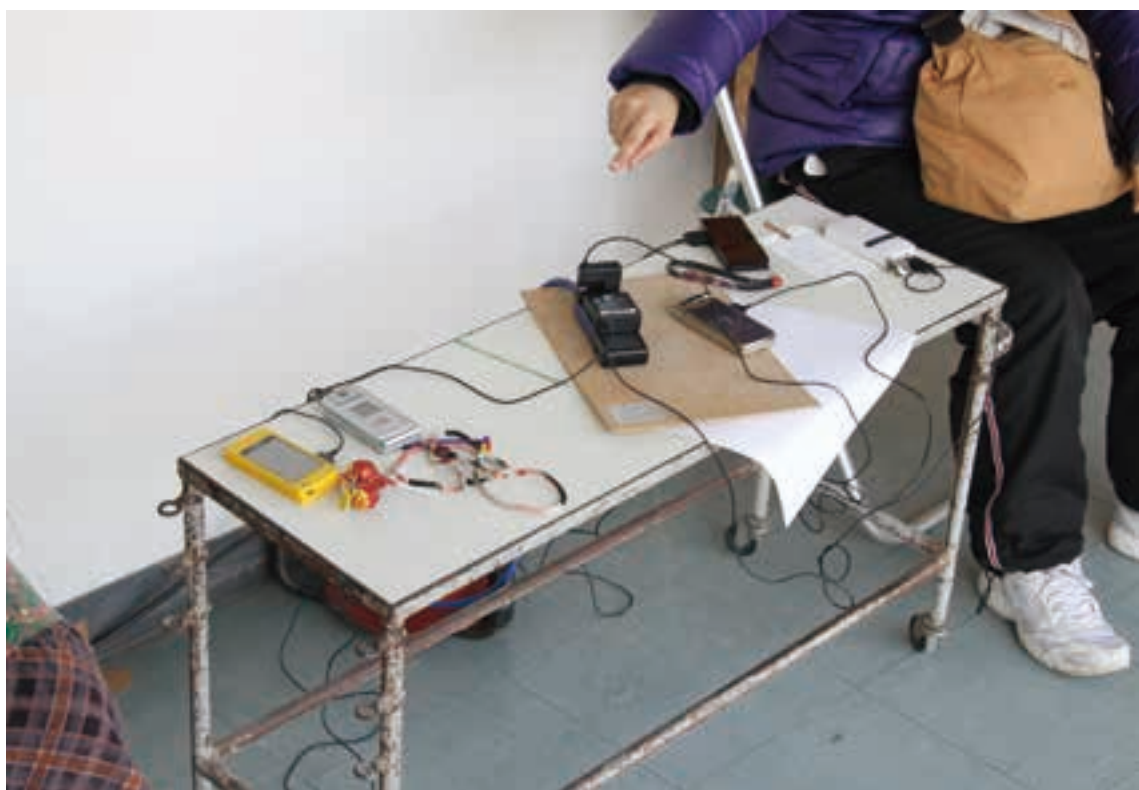


断水のため長い列ができた田沢清水地蔵尊。

3月13日



町内6箇所に避難所を開設。(逢隈小学校)



避難所では順々に携帯電話の充電をする住民の姿が見られた。

3月13日



ペットも家族とともに避難した。(逢隈小学校)

3月14日



震災があったとは思えない程、穏やかな朝だった。

3月14日



がれきの撤去と並行して陸上自衛隊、消防による懸命な捜索活動が続いた。  
(荒浜篠子橋付近)

3月15日



巨理町内で見つかったご遺体は、遺体安置所になっていた旧角田女子高等学校へ安置された。

3月20日



巨理町ではのべ173,541人が避難所生活を送った。(巨理中学校)



避難所の壁には、家族や知り合いに向けたさまざまな伝言が貼られた。

3月20日



齋藤邦男町長、岩佐信一町議会議員（当時）、渡辺和喜県議会議員がお見舞いのため町内避難所を訪問。



支援物資が次々と運び込まれ、ボランティアや町職員が手分けして衣類のサイズを分けるなどの作業を行った。

3月21日



町内のほとんどが断水したため、給水車が頼りだった。



災害対策本部前に設けられた掲示版。



3月23日



村井嘉浩宮城県知事来町。町内の被害状況を視察後、避難所を訪問。

3月24日



住民がバスにて被災地域を視察（避難所からバスで）。



FMあおぞらが午後4時に開局。

3月25日



トモダチ作戦で、米兵が逢隈小学校避難所へ多くの支援物資を届ける。

3月26日



町、消防、警察、自衛隊、その他の機関との間で毎日行われた搜索会議。

3月27日



谷垣禎一自民党総裁（当時）が来町。

3月27日



原口一博衆議院議員と松木謙公衆議院議員が来町。

3月30日



3月22日から苦肉の策として採用された仮埋葬（土葬）。巨理町仮埋葬地（観音院内）で行われた。

3月31日



町内の小・中学校を会場に卒業式を挙げる。津波で卒業式のために用意していた服が流された児童が多かった長瀬小学校では、普段着で参加する児童がほとんどだった。続いて修了式、離任式が行われた。



ベガルタ仙台の選手が来町。巨理運動場にて「ふれあいサッカー教室」が開催された。

4月1日



大震災から間もない混乱の時期に、新規採用職員が着任した。町職員は物資の仕分けや災害ボランティアセンター業務に従事していた。

4月2日



茨城県牛久市の職員が来町。

4月3日



小池百合子自民党総務会長（当時）がランドセルを持参の上、来町。



4月3日



鈴木克昌総務副大臣（当時）が来町。



震災で使用不可となった巨理町庁舎の前に仮庁舎を建設。町の機能を移転した。

4月5日



長引く避難生活に配慮して、各避難所に、株式会社たけのうち電器（群馬県沼田市）から洗濯機が支援された。（逢隈小学校）



巨理高等学校体育館の避難所に、東京青山表参道のヘアサロン『アルティファータ』の美容師10人が、ヘアカットのボランティアに訪れた。

4月6日



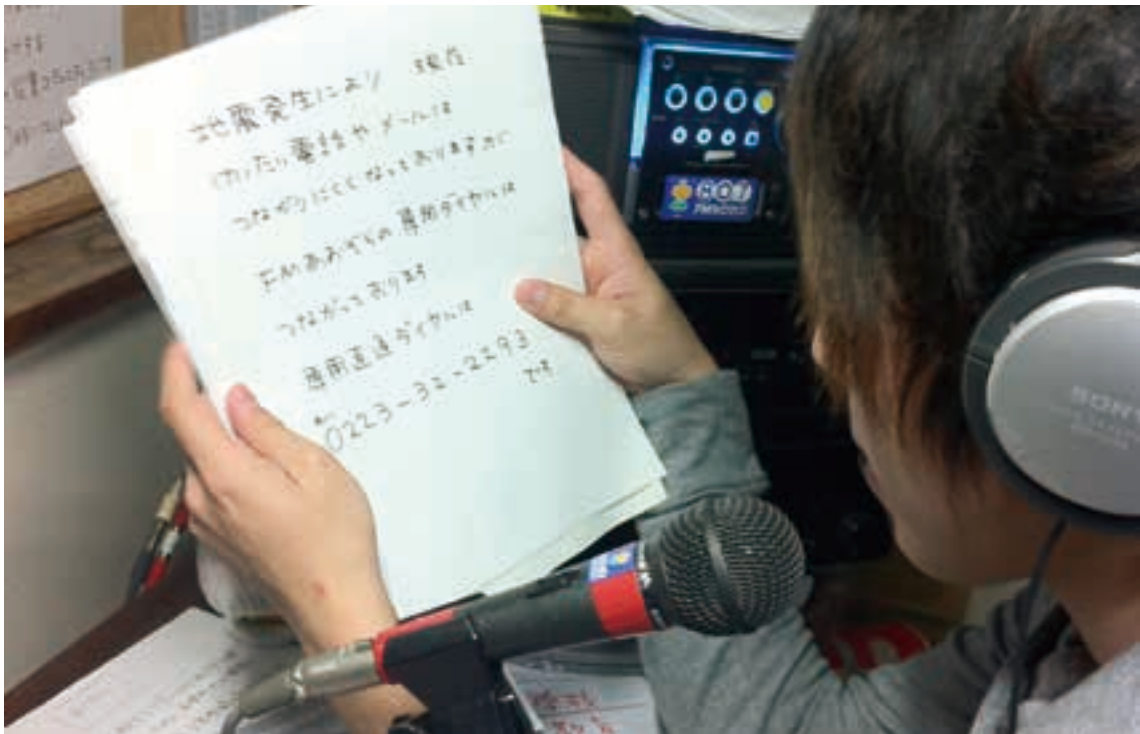
埼玉県長瀬町長が来町。

4月7日



23時33分 宮城県沖を震源とするマグニチュード7.2、最大震度6強の余震が発生。巨理町では震度5強を観測。庁舎が停電し、津波警報も発表された。

4月7日



FMあおぞらは発電機を回し、放送を行った。乾電池で聴けるラジオの必要性を実感した。

4月8日



桜井充財務副大臣（当時）が来町。

4月8日



安倍晋三衆議院議員が来町。避難所などを訪れた。

4月9日



生活再建に必要な物資を揃えられるレッツゴーわたりが発足。

4月10日



海上保安庁による鳥の海の潜水捜索が行われた。



津波で地上に打ち上げられた漁船の撤去作業が行われた。

4月11日



サッカー日本代表今野泰幸選手が巨理町を訪れ、中央児童センターで小学生約100人とミニゲームを行い、子供たちを励ました。



大震災から1ヵ月。いまだ多くの方が不便な避難生活を送る中、黙祷を捧げた。

4月13日



巨理町内で仮設住宅の建設が始まる。



被災した車両は公共ゾーンに一次保管された。



4月13日



自民党の党員が来町。

4月14日



角田にあるサケのふ化場から、70万尾の稚魚が阿武隈川に放流された。

4月15日



イスラエルからのボランティア団体が来町。子供たちと触れ合った。



「広報わたり」臨時号を発行。誰もが手に取りやすいよう7月まで新聞スタイルとした。町内スーパー・コンビニエンスストアの協力で店舗での配布も開始。

4月16日



女優・戸田恵子さんと瀬戸カトリーヌさんが来町。FMあおぞらにも出演した。

4月17日



すべての町民が力を合わせていくために、町内スーパーにおいて被害状況の写真展示を行った。

4月18日



消防の捜索活動と並行して荒浜地区でがれきの撤去が始まった。



倒壊した家屋で見つかったり、津波で流されていた写真や位牌などは消防団員によって、一時荒浜小学校体育館に並べられた。

4月22日



大村秀章愛知県知事が巨理町を訪れ、捜索活動にあたる緊急消防援助隊や陸上自衛隊を激励。

4月23日



愛知県緊急消防援助隊の解隊式を挙行。愛知県緊急消防援助隊は3月11日から約1ヵ月半、巨理町で捜索活動を支援した。

4月24日



仙谷由人官房副長官（当時）と辻元清美首相補佐官（当時）が来町。

4月26日



仮設住宅入居の抽選が行われた。

4月26日



町内の各小学校で入学式を挙行。(荒浜小学校)

4月28日



震災犠牲者の仮埋葬地で、犠牲者を供養する四十九日法要が営まれた。

4月29日



仮設住宅の入居説明会が開催された。(館南仮設住宅集会所)



元サッカー日本代表監督岡田武史氏が来町。サッカー教室が行われた。



4月30日



陸上自衛隊第10師団長が来町し、自衛隊の活動状況を視察。

5月1日



ボランティアによる、側溝の泥掃除を実施。

5月3日



茨城県牛久市長来町。

5月4日



津波の被害を受けたいちごハウスの復旧作業が進められた。

5月4日



陸上自衛隊による入浴支援。子どもの日を前に山形県の団体が持参したこいのぼりが上げられた。

5月5日



一般社団法人agreeen主催による亙理町子どもの日復興祭を開催。自衛隊音楽隊によるコンサートや、Mr.マリック氏、マギー司郎氏によるマジックショーが行われた。

5月7日



本郷婦人防火クラブより寄附金を受け取る。

5月14日



鹿野道彦農林水産大臣（当時）が来町。

5月14日



わたり復興！あおぞら市場を開催。

5月15日



毎年行われていた川口神社春祭りを、巨理小学校避難所にて開催。神社近くの畑で無傷で見つかった子ども神輿も登場した。

5月17日



北海道伊達市長が来町。



吉田小学校の5年生が、先生や地元ボランティア約30人と、学校横の水田で田植えを行った。

5月18日



津波被害を受けた鳥屋崎のアセロラが奇跡的に芽吹き開花する。



東京都練馬区長が来町。

5月19日



町の震災復興計画策定を前に被災地区の区長から意見を聞くための会合が開かれた。

5月21日



神戸市消防音楽隊による、東日本大震災被災地支援コンサートが行われた。



5月21日



逢隈小学校避難所にて、「宮川大輔×ケンドーコバヤシ トークライブ」を開催。

5月23日



東日本大震災発生2日目から支援活動が続けてきた陸上自衛隊第10師団が任務を終えて巨理町をあとにした。

5月25日



震災後初の議会を開催。

5月30日



高円宮妃久子さまと、長女の承子さまが巨理救難所を訪れ、所員である組合員一人ひとりに励ましのお声をかけられました。

5月31日



巨理高等学校避難所の閉鎖が近づき、共に助け合ってきたみなさんがきずなの会を開く。

6月1日



震災復興推進課が設置され、辞令を交付。

6月3日



記者会見を行い震災復興計画の策定見通しなどを発表する。

6月6日



4月12日から始まった、56日間にわたる東京都練馬区の職員派遣が終了。

6月6日



巨理山元会の笠井清子氏が来町。

6月7日



浜吉田駅開通に関する署名が巨理町長に提出された。

6月7日



吉田西児童館にて、ユニセフから吉田保育所仮園舎建設が発表される。

6月10日



震災後初めて、荒浜から釣り船が出航した。

6月11日



ニシャンベ・トーゴ共和国大統領が巨理町を視察。

6月12日



あおぞら市場開催。

6月12日



津波で被害を受けた吉田地区・いちご集荷場周辺で清掃活動が行われ、自衛隊員と住民、県外ボランティアなど約250人が参加した。

6月14日



歌手の五木ひろしさん、都はるみさん、和田青児さん、大石まどかさんが巨理中学校体育館避難所を訪れ、歌を披露した。



6月15日



逢隈小学校に間借りをして授業を行っている荒浜小学校を、黒柳徹子さんが訪問。2010年に大地震に見舞われたハイチの様子を報告したり、ハイチの子供たちから預かってきた手紙を手渡した。

6月18日



震災を乗り越え、巨理郡中学校総合体育大会が開催された。

6月22日



第1回目の巨理町震災復興会議を開催。

6月24日



山形県大江町渡邊兵吾町長が荒浜漁港を訪問。

6月25日



荒浜漁港に、震災後初となる水揚げがあった。

6月28日



青森市保健所チームによる仮設住宅入居者の健康チェック。

7月2日



巨理郡中学校陸上競技大会が角田市陸上競技場で開催された。

7月3日



3月から続いた陸上自衛隊第3師団による入浴支援が終了。

7月4日



ティファニー・ジャパンが来町。



入浴支援を展開した陸上自衛隊第3師団が任務を終え、巨理町をあとにした。

7月6日



荒浜地区で、姉妹都市被災支援事業の壮行会が開催された。

7月8日



東京都練馬区の環境造園協会から、町内の仮設住宅や避難所に朝顔が贈られた。

7月9日



FMあおぞらの防災に関する調査は京都大学の協力を得て行われた。

7月10日



地震発生直後からの住民の行動を把握して町の記録として残すため、住民への聞き取り調査を開始。調査は宮城学院女子大学の教職員や学生で組織するボランティアグループなどの協力で行われた。

7月10日



レッツゴーわたりが終了。

7月24日



本町出身の鈴木淳氏が当時監督を務めていたサッカーJ1大宮アルディージャの選手らが来町し支援物資を届けた。



8月2日



巨理町中央児童センター前駐車場にて、震災直後から長い間支援いただいた自衛隊のみなさんの帰隊式が行われた。



津波の被害を受けた巨理町立荒浜保育所の解体が始まった。

8月5日



震災以来続けてきた遺留品の公開展示が一時終了した。



巨理町震災復興基本方針に関して、住民から意見を聞く意見交換会が開催された。

8月7日



巨理町中央公民館にて東北大学名誉教授の中村尚司氏を招いて、放射線に関する講演会が開催された。

8月8日



東京都生活文化局の協力により巨理運動場にて大道芸フェスティバルが開催された。

8月10日



巨理町消防団協力事業所表示証交付式が開催され、21の事業所に交付証が交付された。

8月11日



震災から5ヵ月。巨理中学校体育館で巨理町合同追悼式が挙行された。追悼式には遺族や親族、内閣府副大臣や宮城県副知事ら約1,000人が参列。震災で亡くなられた方のご冥福をお祈りした。

8月12日



逢隈出身の小林栄子氏が代表を務めるNPO法人美・JAPON主催の巨理復興支援「ひびきあう心コンサート」が、悠里館エントランスホールで開かれた。

8月13日



災害ボランティアセンターとしての最後の活動が終了した。

8月15日



荒浜漁港にて「わたりふるさと追悼供養灯籠流し 鎮魂の夕べ」が開催された。あたりが薄暗くなった頃、湾内に1,200個の灯籠が放たれ、来場者はそれぞれの思いを胸に静かに水面に揺れる光を見つめた。

8月18日



巨理町吉田西部地区で花火教室が行われた。

8月19日



巨理地区まちづくり協議会設立総会が開催された。

8月20日



役場庁舎の解体に伴い新たに建てられた防災無線の鉄塔。

8月27日



AKB48、SKE48のメンバーが来町。ミニライブのほか、サイン会を開催した。

8月31日



荒浜地区まちづくり協議会より、巨理町震災復興計画に関する要望書が提出された。



9月1日



宮城県漁業協同組合 巨理支所にて、漁業用砕氷製造機並びに冷凍庫・冷蔵庫完成落成式が開催された。これでいつ漁が本格化しても安心だと漁協は喜びに包まれた。

9月2日



巨理郡中学校駅伝競走大会が開催された。

9月4日



第3回巨理町震災復興会議が巨理町中央公民館大ホールで開催された。

9月9日



巨理中学校体育館にて、綾戸智恵「PLAYER」、Live&Talkが開催され、軽快なトークとともに見事な歌声を披露した。

9月15日



巨理町地域公共交通会議が行われた。

9月16日



津波被害を受けたいちご農家が、逢隈小山地区の耕作放棄地でいちご作り再開に向けて準備を始めた。

9月25日



大畑浜の海岸にてサーファーによるビーチクリーン活動が実施された。

9月29日



J Aみやぎ仙南より荒浜保育所へ梨がプレゼントされた。

9月29日



郡和子衆議院議員が来町。津波被害を受けた沿岸部を視察した。

9月30日



巨理町役場仮庁舎にて、退職者に辞令が交付された。

10月1日



巨理郡中学校新人大会が行われ、熱戦が繰り広げられた。



わたり復興ライブ「あの素晴らしい歌をもう一度」が開催された。

10月2日



10年以上前に群馬県の中学生が海に放ったボトルレターが高屋地区で発見され、ボトルレターを書いた当時の中学生4人が巨理町を訪れた。

10月4日



東京都町田市からロータリークラブを通して、消防車が寄贈された。

10月6日



巨理町小学校音楽会が開催された。

10月7日



齋藤邦男町長と岩佐信一町議会議員（当時）が北海道伊達市を訪問。同市でいちご栽培に取り組む本町農家を激励。



10月9日



宮城県農業高等学校と亘理高等学校の吹奏楽部が、金沢のラベンダー・ジャズ・オーケストラとふれあいコンサートを開催した。

10月11日



茨城県牛久市民生委員のみなさんが来町。

10月12日



ベガルタ仙台より寄附金を受け取る。

10月15日



吉田旭台区の文化祭が開催され、復興祈願の風船が空に放たれた。

10月15日



佐藤記念体育館にて、物資の配布が行われた。

10月16日



吉田地区スポーツ大会が開催された。

10月16日



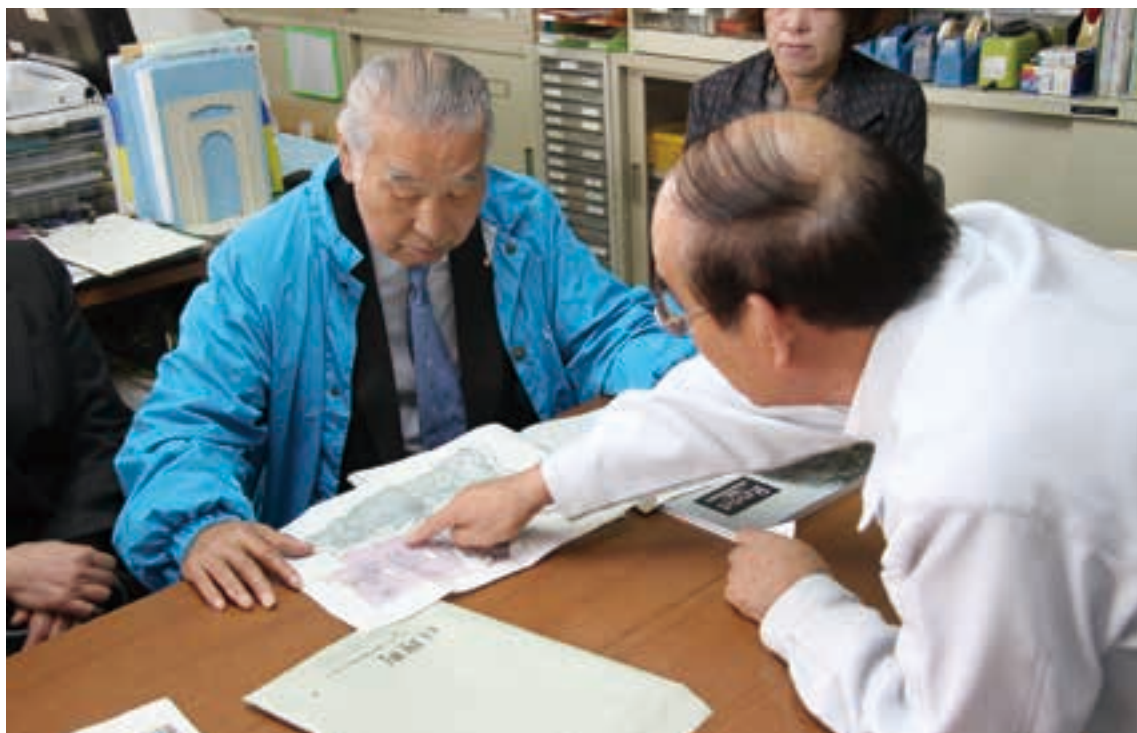
復興に向けたまちづくりを推進するため、震災復興計画について住民の意見を聞く説明会が、悠里館3階視聴覚ホールにて開催された。

10月20日



郷土料理はらこめしの材料となるサケ漁が、巨理町沖で再開された。

10月21日



吉田保育所仮園舎建設で日本ユニセフ協会副会長が来町。

10月22日



いきいきわたりっこまつりが開催された。

10月23日



五日町・中町商店街を歩行者天国にして、わたりトコトン商人まつりが開催され、伊達武将隊の演武や特産品・地場産品の即売などが行われた。



荒浜復興祭が行われ、荒浜小学校の児童が太鼓の演奏を披露した。

10月26日



逢隈小山地区でいちご栽培を再開。

10月27日



伊達市ロータリークラブが来町。本町ロータリークラブと交流深める。

10月29日



逢隈児童館まつりが開催された。

11月2日



町政功労者、教育功績者表彰式が中央公民館で挙行政された。



11月3日



悠里館で図書館まつりが開催され、恒例のフロアコンサートも開かれた。

11月6日

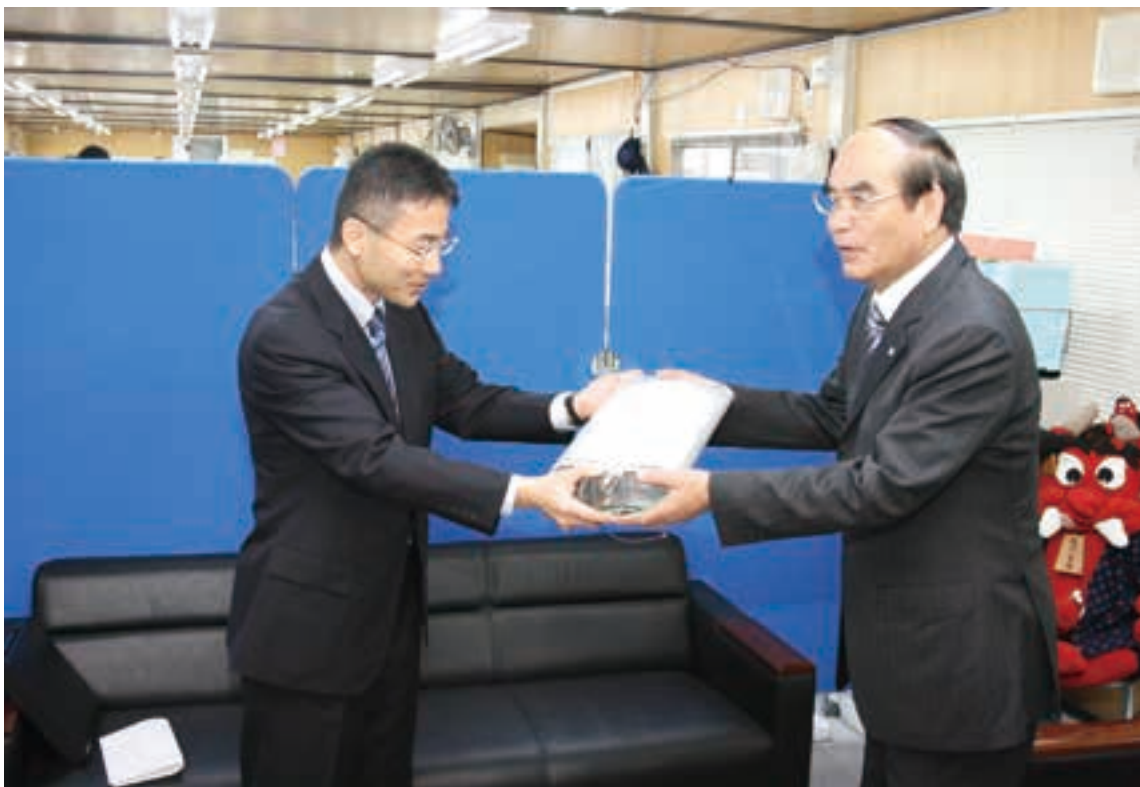


巨理町文化祭が開催された。

11月7日



北アルプス山麓ブランド運営委員会より支援物資を受け取る。



東北電力よりLED街路灯が寄贈された。

11月9日



みやぎ亘理農業協同組合は、津波被害を受けた荒浜支所を改修し、業務を再開した。

11月13日



震災の影響により延期されていた亘理町議会議員選挙を実施。

11月13日



支援を受けた埼玉県和光市の住民に恩返ししようと、荒浜地区の有志が和光市の市民まつりで郷土料理はらこめしの調理・販売に協力。

11月15日



巨理町中央公民館にて、わたり未来づくり発表会が開催された。

11月16日



北海道伊達市長をはじめ、近隣首長が来町。

11月19日



巨理のいちごが、震災後初出荷され、仙台中央卸売市場で販売開始式が行われた。

11月19日



仮設住宅のコミュニティづくりを支援しようと、宮前仮設住宅集会所にて、虹色表札作りが行われた。参加者は指導を受けながら、大小鮮やかなタイルを組み合わせ、世界でたったひとつの表札づくりにチャレンジした。

11月20日



津波被害を受けた吉田浜地区のいちご畑で「しあわせきいろプロジェクト」がスタート。除塩効果があるとされる菜の花の種まきが行われた。

11月22日



J Aさがえ西村山農協よりラ・フランスが贈られ、全仮設住宅に届けられた。

11月23日



第5回巨理町震災復興会議が行われた。(中央公民館)

11月25日



災害廃棄物処理業務安全祈願祭が吉田浜の児童公園跡地で行われた。

11月26日



(財)台湾佛教慈濟基金会より全壊・大規模半壊・半壊の世帯に対し、見舞金が支給された。



11月29日



大分県日出町職員が来町。津波被害を受けた沿岸部を視察した。

12月3日



巨理町に木を植えて復興支援する栃木県足利市の市民団体活動「足利・巨理～木でつながる絆プロジェクト」。これに参加する約40人が長瀬小学校で植樹活動を行った。

12月9日



J Aみやぎ巨理の岩佐國男組合長が、いちごの収穫を報告した。

12月11日



NHK「きらりえん旅」の番組収録が行われ、八代亜紀ミニコンサートがJA本所で開催された。招待された巨理町民の前で、数々のヒット曲を披露した。

12月16日



駐日イスラエル大使が来町。

12月23日



荒浜漁港市場そばの仮設店舗に「鳥の海ふれあい市場」がオープン。荒浜復興の第一歩として、「わたり温泉鳥の海」1階にあった産直販売がリニューアルして登場した。

12月28日



仮庁舎にて仕事納めが行われ、同時に派遣期間を終えた応援職員に感謝状が贈られた。

1月1日



大晦日から元旦にかけて、巨理町公共ゾーン仮設住宅で花火大会が行われた。会場では花火に合わせて住民から寄せられたメッセージが読み上げられた。

1月1日



新たな年の幕開け。荒浜海水浴場には初日の出を見に多くの住民が集まった。



川口神社の歳旦祭では、倭多里道の会による和太鼓演奏奉納が行われた。

1月8日



防災への誓いと町の復興を願って、平成24年巨理町消防出初式が巨理中学校の校庭で行われた。式のはじめには1年の無災害を祈願した。



巨理町中央公民館にて、平成24年巨理町成人式が開催された。平成24年の巨理町の新成人は平成23年11月30日現在の住民登録者と、平成19年町内の中学校に在籍した432名。

1月9日



小正月の伝統行事を体験する「お餅をついて団子さしをしよう」が郷土資料館で行われ、21人の親子が参加した。

1月15日



逢隈地域シンポジウムを開催。「大震災を体験して」をテーマに、消防団員や教員、民生委員など6人のパネラーが体験談を発表した。

1月21日



浜吉田駅の早期開通を願い、浜吉田駅沿線の草取り清掃作業が行われた。

1月22日



藩政時代から歌い継がれている民謡えんころ節の全国大会を開催。第22回は巨理町中央公民館で開催し、3部門に167人が出場した。



2月4日



巨理町中央公民館で「立春・おもちつき大会」を開催。もち米は巨理町と面積・総人口がほぼ同じの大分県日出町が支援米として生産したものをを使用した。

2月12日



千葉県松戸市で開催された東北復興支援チャリティコンサート。齋藤町長も来場者に舞台から挨拶をした。

2月12日



宮城県巨理クロスカントリー大会が開催された。

2月15日



日本損害保険協会より、最新鋭のポンプを搭載した消防自動車1台が寄贈された。

2月18日



荒浜小学校の当時の6年生がタイルを使い荒浜小学校の表札作りをサプライズ企画として進め、3月16日に卒業記念として贈呈した。

2月19日



吉田東部まちづくり協議会による新春演芸会が吉田中学校で開催された。

2月22日



巨理町と北海道伊達市による被災地復興支援事業協定書調印式が行われた。

2月25日



ふるさと復興商店街がオープン。

3月11日



町主催の東日本大震災一周年合同追悼式が巨理中学校体育館で挙行政され、800人を超える遺族・親族などが参列した。参列者は祭壇に献花をして、亡くなられた方のご冥福を祈った。

3月16日



町内6つの小学校で平成23年度卒業式が挙行された。震災の影響で校舎・体育館とも使用できない荒浜小学校は、間借りしている逢隈小学校の体育館にて、逢隈小学校の卒業式が終わった後での卒業式となった。

3月20日



「まるごとフェア」を開催。大阪王将を営むイトアンド株式会社の若手社員中心のプロジェクト「Keep On Challenging Project」運営のもと、餃子を使った世界一大きなモザイク画でギネス世界記録に挑戦し、見事に達成した。

## 自衛隊の活動

冷たい水に浸りながらの行方不明者捜索、がれきの撤去など、自衛隊なくして復旧はありえませんでした。そして、心身ともに温まったお風呂。町民とのふれあいを大事にしてきた自衛官は、子どもたちの憧れにもなりました。わたしたちは、みなさんが亘理で活動した日々を決して忘れることはありません。心から感謝しています。







## 緊急消防援助隊の活動

震災の日、行き先が決まらないまま、宮城へ向け出発した愛知県緊急消防援助隊。3月12日から亶理町で捜索活動に当たりました。泥にまみれ、がれきをよじ登り、危険と隣り合わせの現場で、くたくたになるまで活動していただきました。ご協力いただいた隊員のみなさん、本当にありがとうございました。





## 災害ボランティアセンターの活動

被災家屋の泥かきや物資の仕分けなど、ボランティアのみなさんには感謝感激です。支援に来てくれた方々から、「互理っていいね!」「温かい人が多いね」と言ってくれたことが何よりも嬉しく、復興の活力となっています。ボランティアと町民の心をつないだ「災ボラ」の風景がいまでも思い出されます。







## 第4章

# 巨理町被災現況調査について



## 亶理町被災現況調査の再整理

亶理町防災まちづくり計画のうち津波避難計画や地域防災計画見直しにあたり、平成23年度に国が実施した「東日本大震災による被災現況調査業務（宮城8）」に基づき、亶理町分の被災状況および住民意見等を調査した。



# 被災状況

## 1 被災区域の状況

下図と写真は、亘理町内の被災区域の状況を示している。凡例のように、水色のライン（エリア）は浸水区域を、赤色のライン（エリア）は被災区域を示している。

津波の来襲を受けた荒浜地区、吉田東部地区を中心に、浸水区域と被災区域が広がっている。

### ■被災区域の状況（荒浜地区）





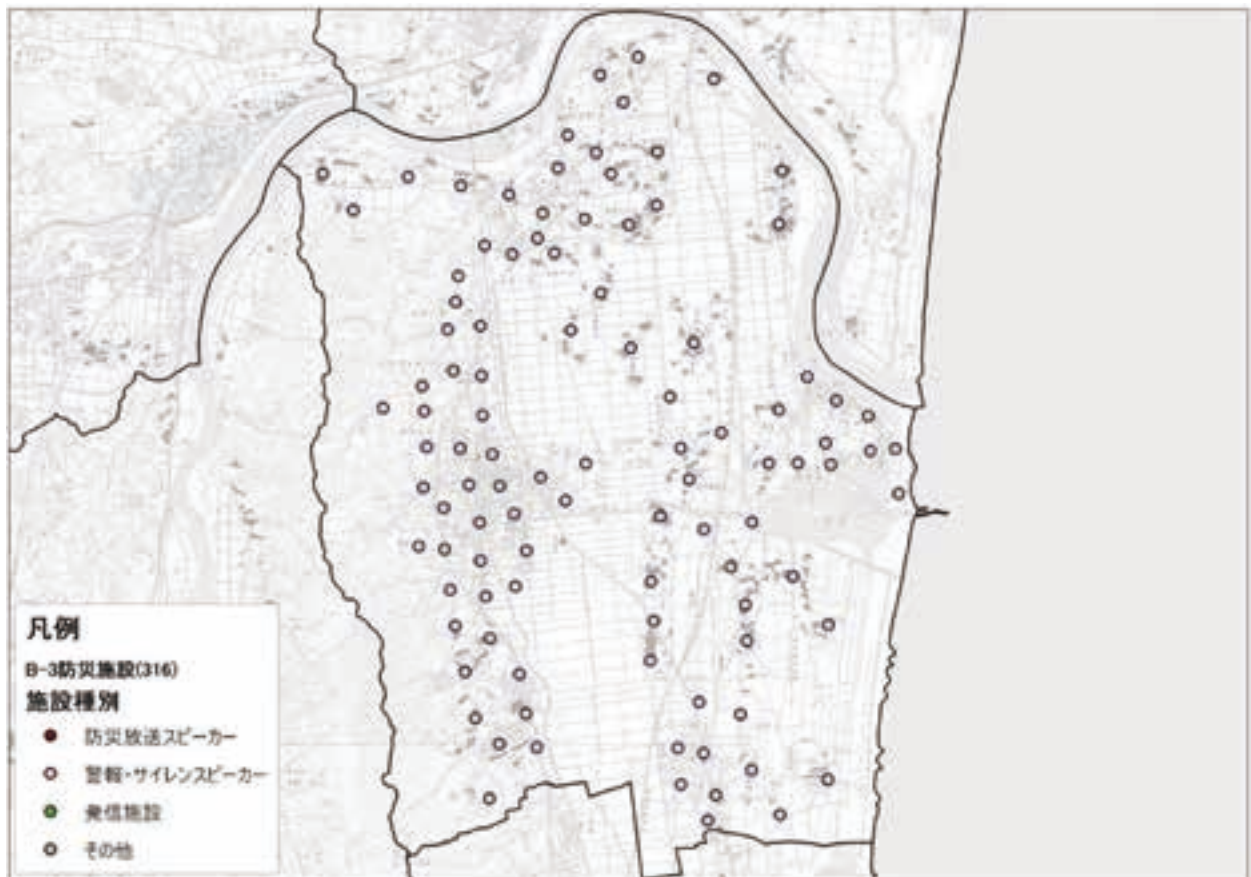
# 1) 防災施設

亶理町における防災施設に係る関係機関ヒアリング結果及び防災施設の位置は以下のとおりである。

## ■防災施設に係る関係機関ヒアリング結果

調査	市町村名	防災施設名	管理先	稼働状況	通知内容	稼働状況	備考
亶理町	亶理町	防災放送	亶理町	地震、津波発生に際してスピーカーからは放送し、避難指示が聞こえていた。	サイレン 避難所への避難指示	山形部18基は津波発生後、稼働せず、そのうち3基のスピーカーは流出し7/23現在復旧できていない。	地震時の放送は消防車が行うこととしていたため稼働ができた。 7/23現在、使用可能なスピーカーは18基
亶理町	亶理町	広報車等	亶理町	7か所で避難指示を行う。	サイレン 避難所への避難指示	広報車中で津波に遭遇した。一旦避難所に避難し一報を明かした。	
亶理町	亶理町	広報車(消防車)	亶理町	19台(京浜地区8台、吉田地区11台)にて避難指示を行う。	避難所への避難指示	8台が津波の被害を受けた。	
亶理町	亶理町	防災メール(ほっとメール等)	亶理町	地震直後は停電と電話回線の不通により配信できなかったが、3/11 17:30職員の高須健司から情報を配信した。	3/11 17:30配信 津波が到来しています。逃げ遅れた方は3階へ避難してください。非常には、火の元確認をしてください。落ち着いて行動してください。	しばらく電話回線が復旧せず配信ができなかった。	3/11には亶理町の学校のインターネットを使って配信した。
亶理町	亶理町	防災メール(ほっとメール等)	亶理町	3/11 20:45には被害の状況と避難所の人数を配信した。	3/11 20:45配信 7:20時点の状況。亶理町中学校水位99センチ、各地で道路の閉鎖、ブロックの倒壊。  避難所(人) 亶理町400 亶理中700 野浜町70 野浜中170 野浜東部72 長瀬町14 吉田町588 吉田実用300 遠藤町250 遠藤中90	しばらく電話回線が復旧せず配信ができなかった。	3/11には亶理町の学校のインターネットを使って配信した。

## ■防災施設の位置図



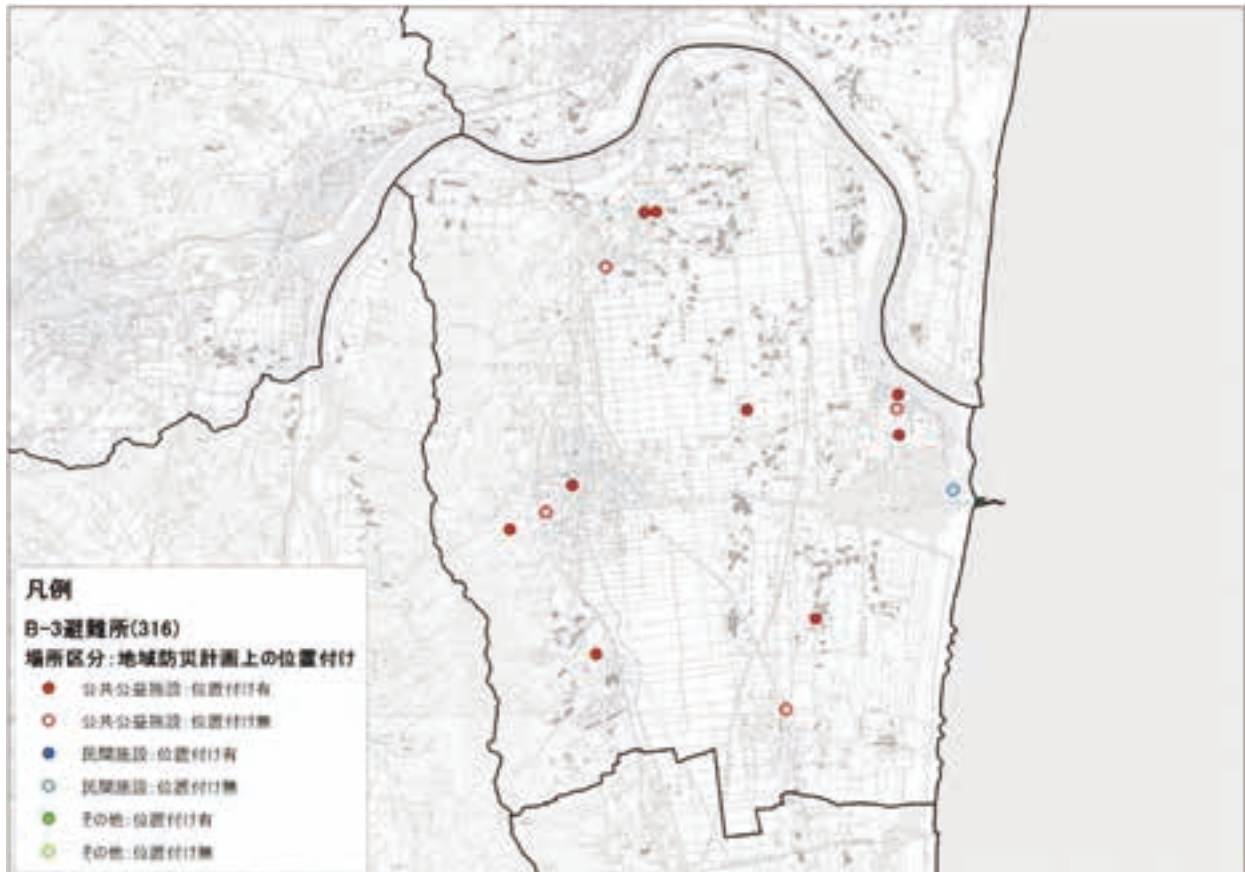
## 2) 避難所

巨理町における避難所に係る関係機関ヒアリング結果と避難所の位置図は以下のとおりである。

### ■避難所に係る関係機関ヒアリング結果

No	避難所名称	住 所
1	巨理小学校	下小路22-2
2	巨理中学校	沼頭1
3	荒浜小学校	荒浜字隈潟67
4	荒浜中学校	荒浜字東木倉70-1
5	吉田小学校	吉田字宮前63
6	長瀬小学校	長瀬字南原193-1
7	逢隈小学校	逢隈田沢字鈴木堀93-1
8	逢隈中学校	逢隈牛袋字南西河原2-6
9	高屋小学校	逢隈高屋字保戸原54-2
10	宮城県巨理高等学校	字館南56-2
11	下郡公会堂	逢隈下郡松木64
12	吉田支所	吉田大塚185
13	荒浜支所	荒浜字中野33
14	わたり温泉	荒浜字隈崎159-22
15	阿部工務店	荒浜字水神62

### ■避難所の位置図



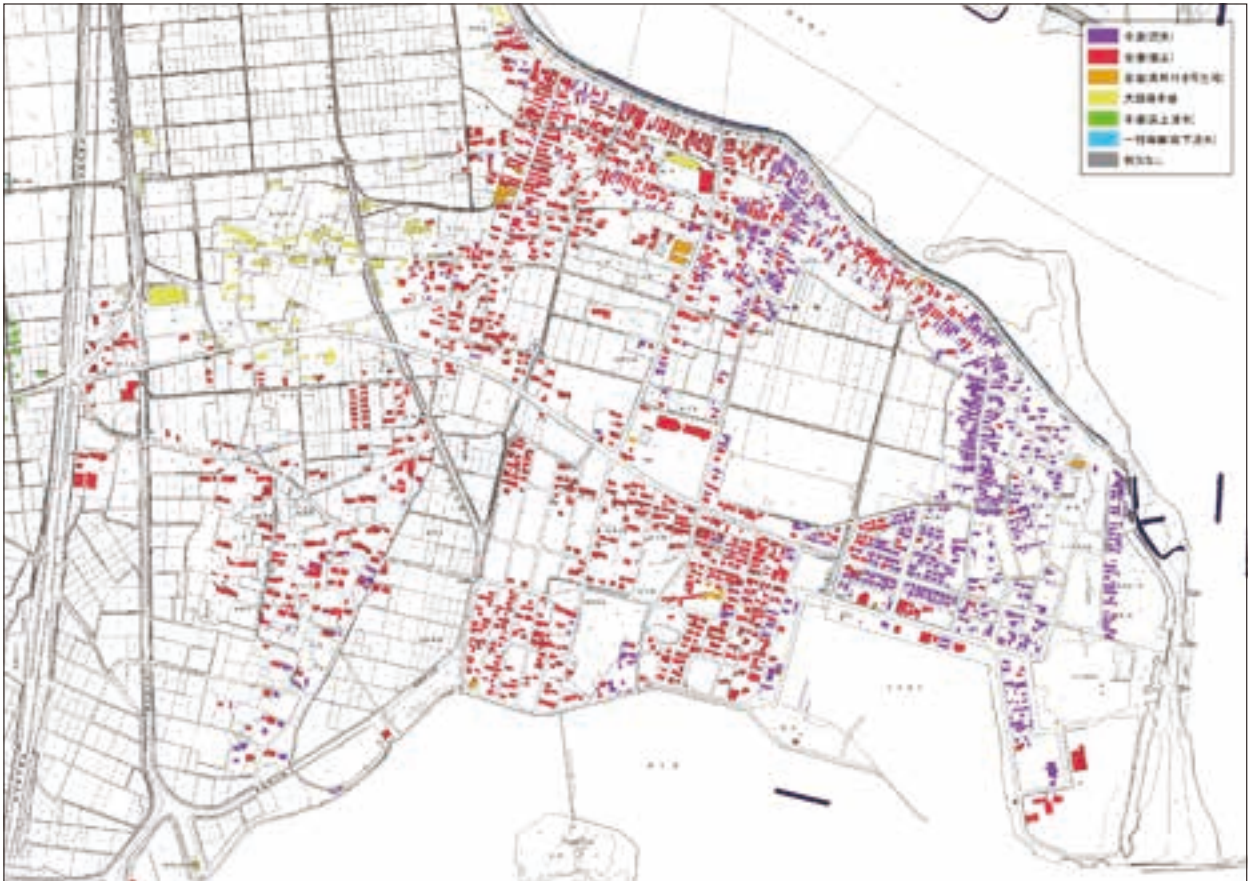
### 3 建物の被災状況

#### 1) 建物の被災状況

建物の被災状況を見ると、荒浜地区では、太平洋沿岸に面している集落で、全壊（流失）が多く、地区全体では、全壊（撤去）も含めて、全壊が多い。

吉田東部地区でも、同様であり、太平洋沿岸に面している集落で、全壊（流失）が多い。また、常磐自動車道、JR常磐線より西側では、大規模半壊、半壊にとどまっている。

#### ■建物の被災状況（荒浜地区）



■建物被災状況（吉田東部地区）



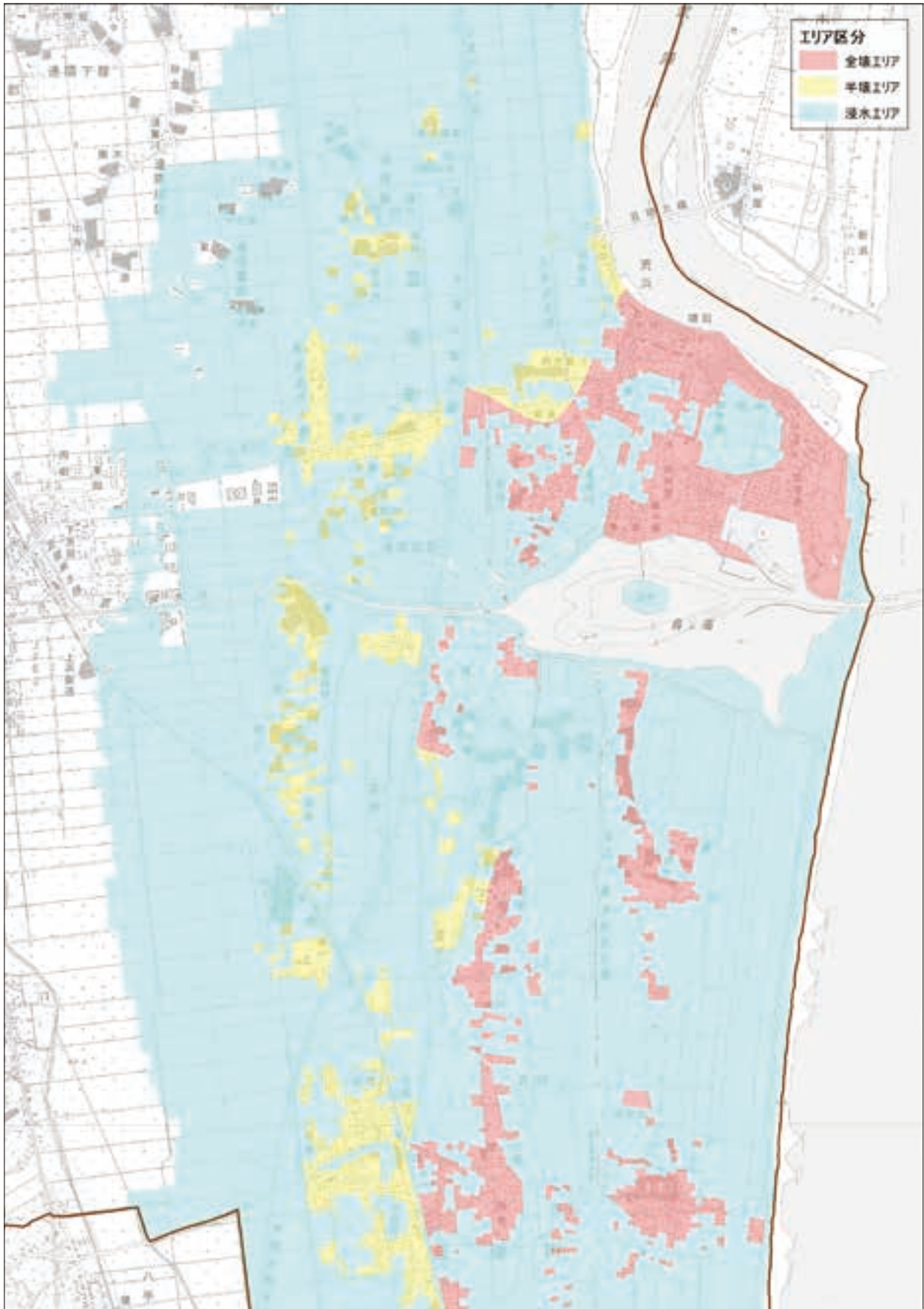
2) 建物の被災状況エリア区分

1) 建物の被災状況をもとに、下表の区分によりエリア分けすると、常磐自動車道、JR常磐線を境に、大きく、全壊エリアと半壊エリアが区分される。

■建物の被災状況のエリア区分

エリア区分	対 象
全壊エリア	建物の被災区分が「全壊（流失）」「全壊（撤去）」「全壊（1階天井以上浸水）」のエリア
半壊エリア	建物の被災区分が「大規模半壊」、「半壊（床上浸水）」のエリア
浸水エリア	建物の被災区分が「一部損壊（床下浸水）」のエリア

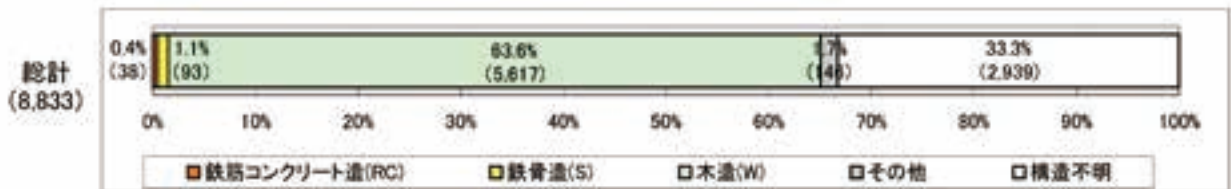
■建物の被災状況エリア区分



## 4 被災した建物の構造、建物用途

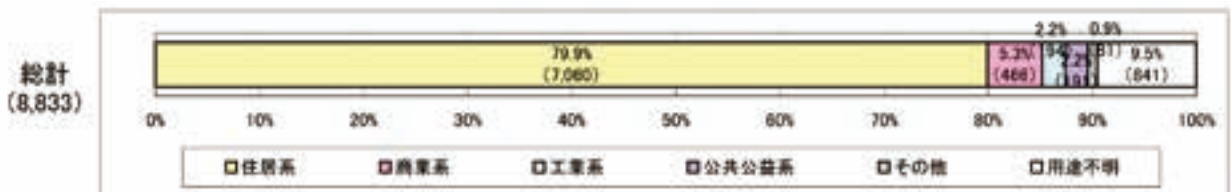
- 被災した建物の構造別の割合は、「木造」が63.6%、「その他（軽量鉄骨・土造・ブロック造）」が1.7%、「鉄骨造」が1.1%、「鉄筋コンクリート造」が0.4%となっている。
- 巨理町では「構造不明」が33.3%と多いため、被災6県の集計と比較すると、いずれの構造の割合も低くなっている。

### ■被災した建物の構造



- 被災した建物用途別の割合は、「住居系」が79.9%、「商業系」が5.3%、「工業系」が2.2%、「公共公益系」が2.2%、「その他」が0.9%となっている。
- 被災6県の集計と比較すると、「住居系」の割合が若干高く、「商業系」「工業系」「公共公益系」の割合が低くなっている。

### ■被災した建物用途



### ■参考：東日本大震災の津波被災現況調査結果（第2次報告）

～津波からの避難実態調査結果（速報）～（国土交通省：H23.10）

➤ 被災建物の構造別割合は、木造が全体の73%、鉄筋コンクリート造が2%、鉄骨造が5%、その他（軽量鉄骨、土造、ブロック造）が7%となっている。



➤ 被災建物の用途別割合は、住居系が全体の77%、商業系が8%、工業系が8%、公共公益施設が3%、その他が3%となっている。

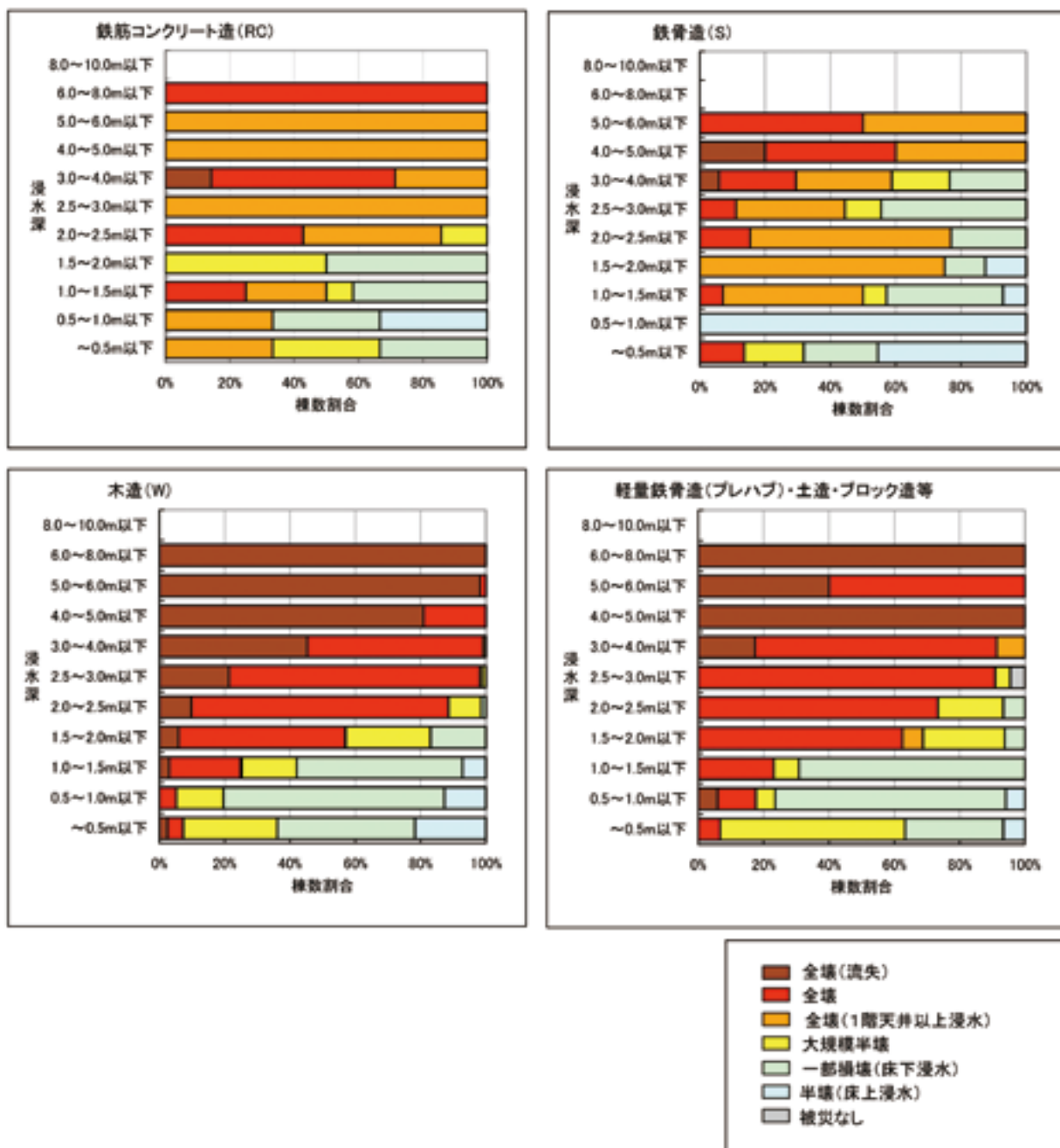




## 5 建物構造別の浸水深と建物被災状況の関係

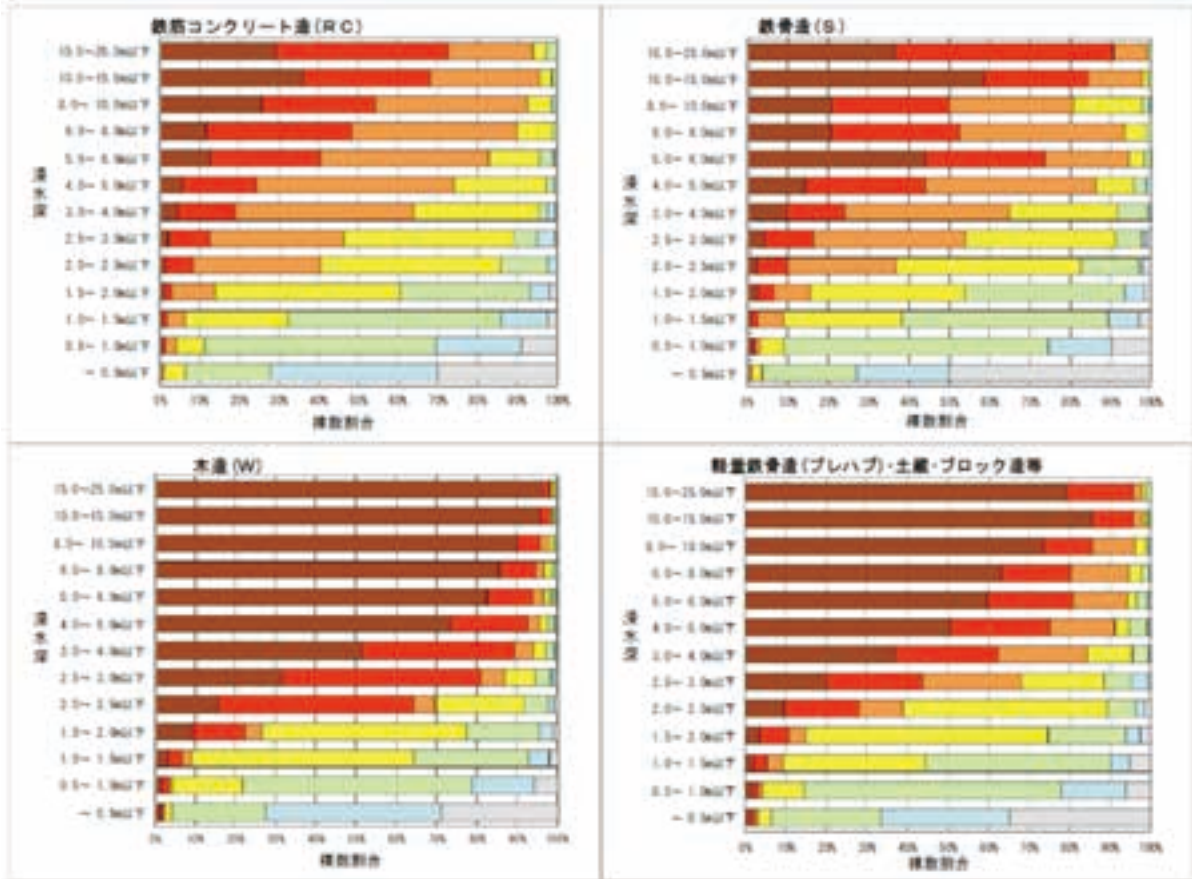
- 鉄筋コンクリート造では、「全壊（流失）」「全壊」の割合は低いが、浸水深2.0mを超えると、全壊〔全壊（流失）、全壊、全壊（1階天井以上浸水）〕の割合が50%を超える。
- 木造では、浸水深1.5mを超えると、「全壊（流失）」「全壊」の割合が50%を超える。
- 鉄骨造、軽量鉄骨造・土造・ブロック造でも同様に、浸水深1.5mを超えると、「全壊（流失）」「全壊」の割合が50%を超える。
- 件数の多い木造を、被災6県の集計と比較すると、「全壊（流失）」「全壊」の割合が50%を超えるのは、被災6県では、2.0m以上であるが、亘理町では1.5m以上である。

### ■建物構造別の浸水深と建物被災状況



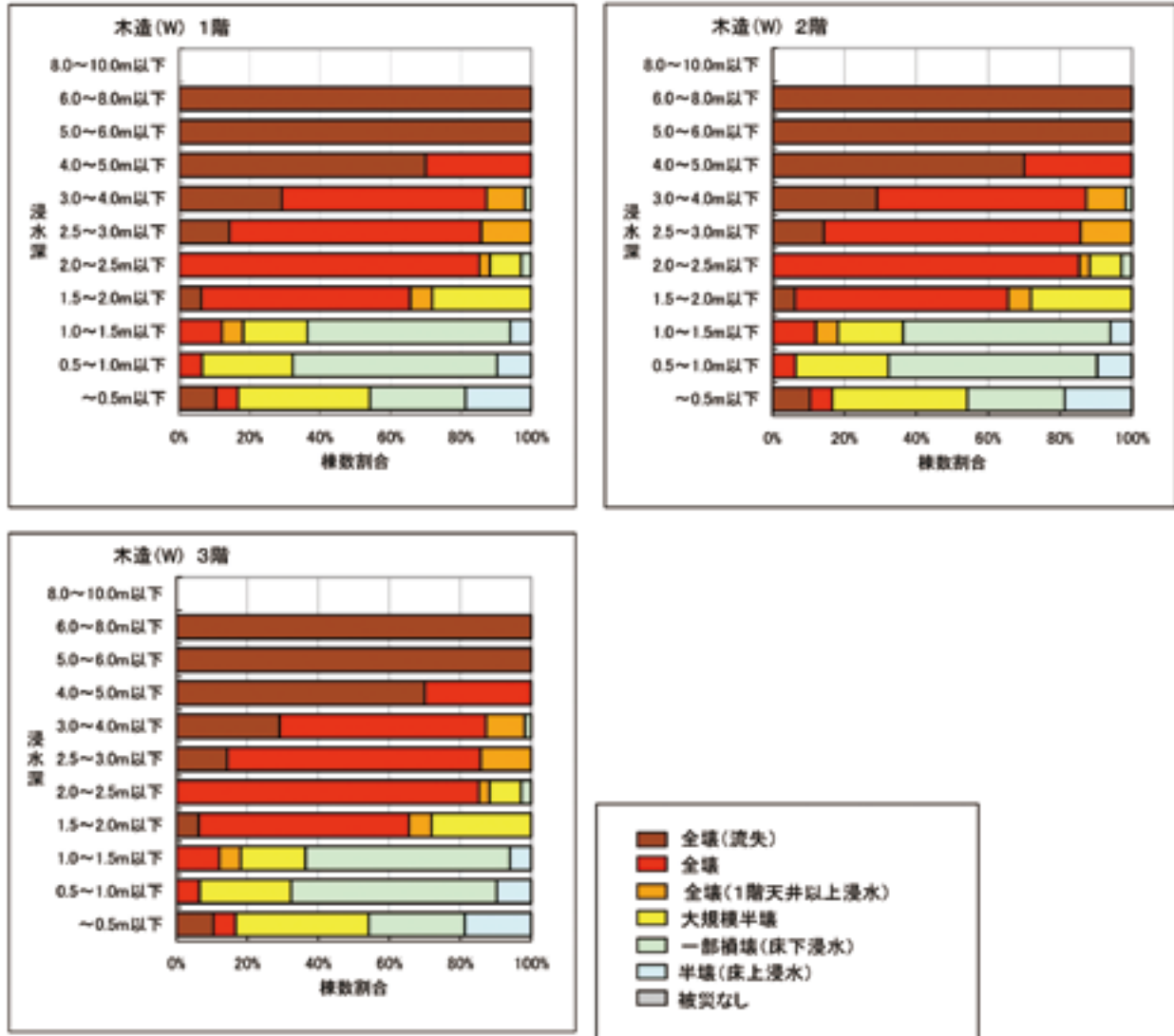
■参考：東日本大震災の津波被災現況調査結果（第2次報告）  
 ～津波からの避難実態調査結果（速報）～〔国土交通省：H23.10〕

➤ 鉄筋コンクリート造及び鉄骨造の建物は、その建物が再使用困難な損壊が生じる割合は低い。



○建物構造別の浸水深と建物被災状況を、木造・階数別にみると、被災6県の集計では階数があがるにつれて、全壊〔全壊（流失）、全壊、全壊（1階天井以上浸水）〕の割合が低下するが、亶理町では、階数に大きな差はみられない。

■建物構造別の浸水深と建物被災状況（木造・階数別）

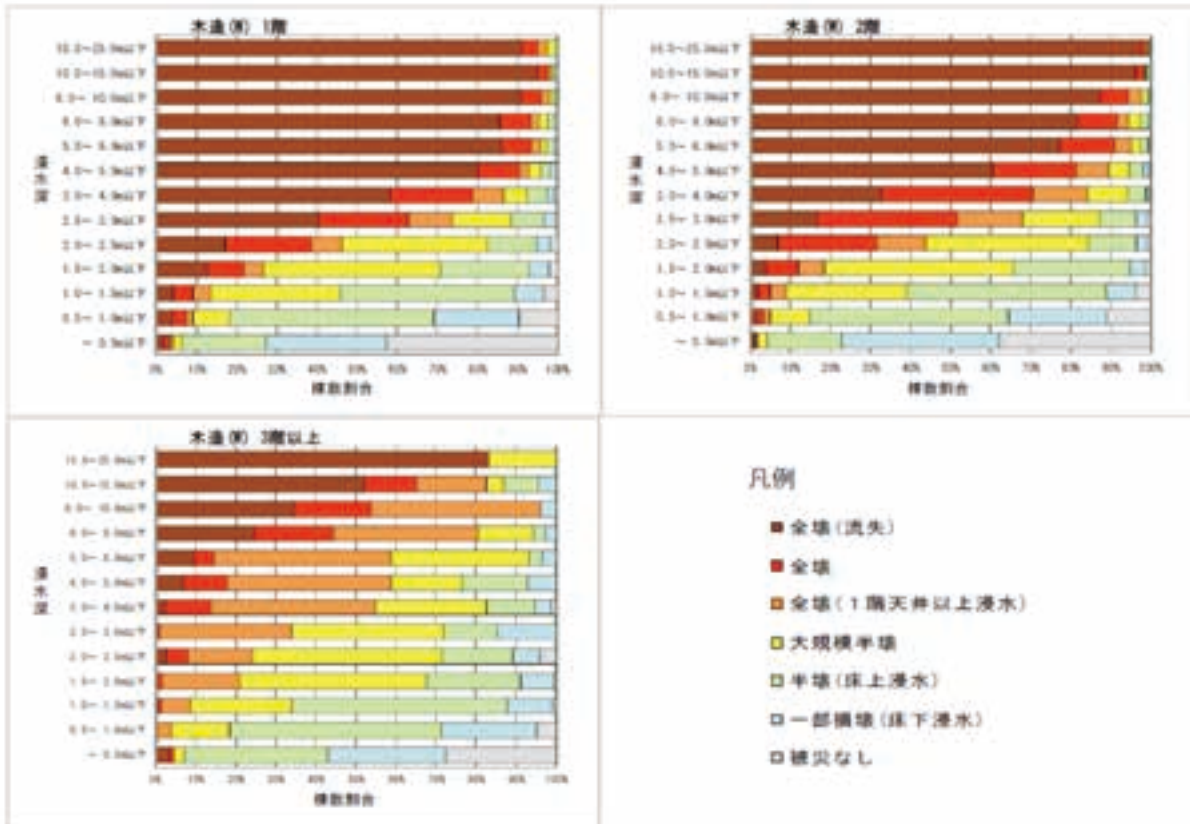


※鉄筋コンクリート造は、件数が少ないため図示しない。

■参考：東日本大震災の津波被災現況調査結果（第2次報告）

～津波からの避難実態調査結果（速報）～〔国土交通省：H23.10〕

<木造>

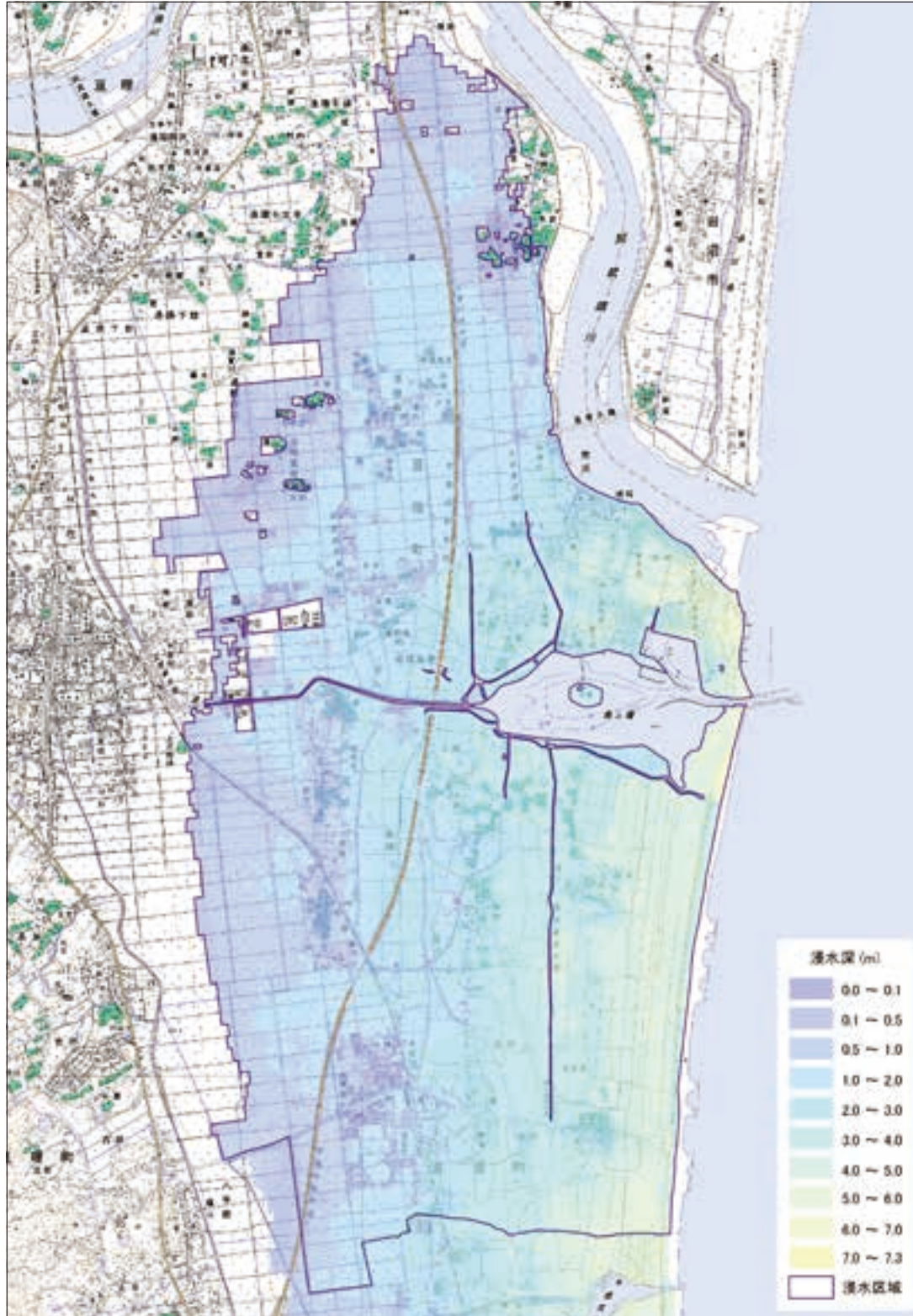


## 6 浸水区域と津波規模

浸水区域は、亶理町の低地部の広い範囲で広がっている。また、浸水区域は、前述の全壊エリア・半壊エリアの境界であった常磐自動車道、JR常磐線よりも以西にも広がっている。

亶理町では、津波による浸水深は約7.3mとなっている。

### ■浸水区域と津波規模



## 7 救援・救護活動状況

震災直後に一次避難先となった避難場所（地域防災計画に位置づけられた公的な避難所だけでなく民間施設や高台も含む）における救援・救護活動を把握するために、亶理町災害対策本部に対してヒアリングが実施された（2011年7月25日調査）。

その概要は、以下の表にまとめられている。

### ■救援・救護活動状況

番号	名称	避難所の区分	避難場所区分	所有形態区分	施設・設備内容(いつ、どれだけ、たいてい、何人、どこへ、どうした)	備考
1	亶理町	1	亶理小学校	公有	4月10日(日)亶理地区の避難住民で、亶理小学校、亶理中学校に通学する児童・生徒がいない世帯のうち、一丁目、二丁目、三丁目、四丁目、五丁目、高層先の避難住民を小学校体育館に受け入れた。	
2	亶理町	2	亶理中学校	公有	4月10日(日)亶理地区の避難住民で、亶理小学校、亶理中学校に通学する児童・生徒がいない世帯のうち、高層・南町地区の避難住民を全て小学校体育館に受け入れた。	
3	亶理町	3	亶理小学校	公有	3月12日(土)に亶理小学校の避難住民(約400名)をバスで遠藤中学校へ移送した。	11日17時救助完了
4	亶理町	4	亶理中学校	公有	3月12日(土)～13日(日)に自衛隊のヘリにより亶理中学校の避難住民全員(約200名)を前泊市陸上競技場へ移送した。その後、亶理高校へ移送した。	11日18時救助完了
5	亶理町	5	吉田小学校	公有	4月10日(日)吉田東部地区の避難者のうち、長瀬小学校、吉田中学校に通学する児童・生徒、及び浜吉田西、浜吉田北の全世帯のうち児童・生徒がいる世帯を体育館に受け入れた。	
6	亶理町	6	長瀬小学校	公有	4月10日(日)に長瀬小学校の避難住民全員(約200名)をバスで亶理高校(指定避難所ではない)へ移送した。	前を比べ、水の上を歩き結局まで徒歩で移動した。13日18時救助完了
7	亶理町	7	遠藤小学校	公有	3月12日(土)に亶理小学校の避難住民全員(約800名)を受け入れた。	
8	亶理町	8	遠藤中学校	公有	3月13日(日)に吉田支所の避難住民全員(約300名)を受け入れた。	
9	亶理町	9	高層小学校	公有	亶理小学校体育館へ移送した。	
10	亶理町	10	亶理南亶理高 等学校	公有	3月12日(土)に長瀬小学校の避難住民全員(約200名)を受け入れた。3月13日(日)に亶理中学校の避難住民全員(約200名)を受け入れた。	11日に二次避難所として急遽使用した。
11	亶理町	11	下郡公民館	公有	20の避難者を3月13日まで下郡公民館に受け入れた。	
12	亶理町	12	吉田支所	公有	3月13日(日)に吉田支所の避難住民全員(約300名)をバスで遠藤中学校に移送した。	11日17時救助完了
13	亶理町	13	亶理支所	公有	3月13日(日)に亶理支所の避難住民全員(72名)をバスで遠藤中学校へ移送した。	11日17時救助完了
14	亶理町	14	わたし温泉	公有	自衛隊のヘリにより避難住民を前泊市陸上競技場へ移送した。その後、バスで遠藤中学校へ移送した。	
15	亶理町	15	同郷工務店	私有	3月12日(土)に、自衛隊のヘリにより亶理50名を前泊市陸上競技場へ移送した。その後、バスで亶理高校へ移送した。	

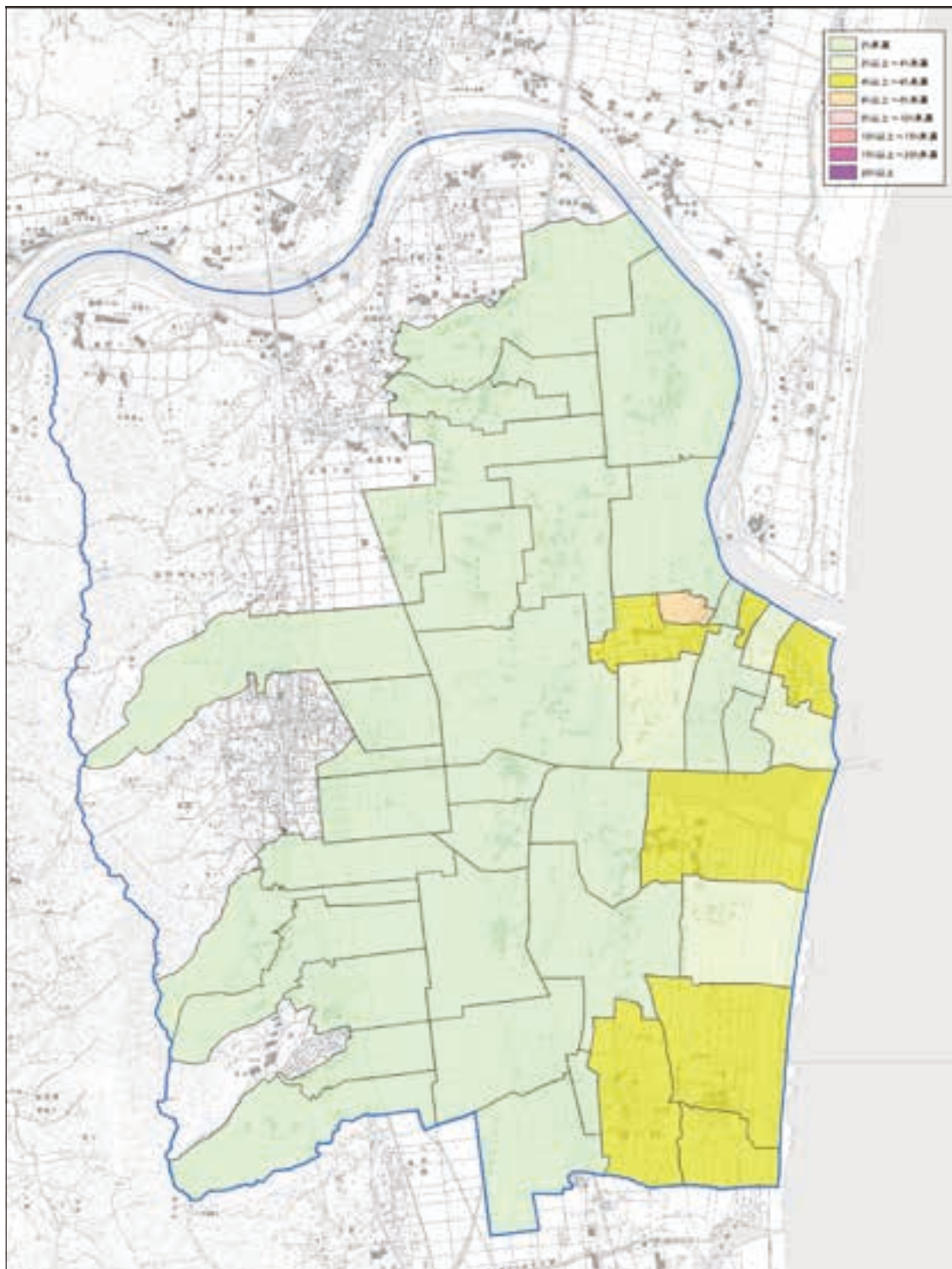
## 8 大字・町別死亡率

調査時点の死亡者は、亶理町260名であった。なお、現在の宮城県災害対策本部発表（平成24年2月15日）の死亡者は亶理町257名となっている。

亶理町では、住民基本台帳から集計した行政区レベルの地区別人口（2011年2月28日時点）をもとに、行政区ごとに集計した死亡者と行方不明者数（2011年6月9日時点）から、死亡率等を算出している。

亶理町では、沿岸部に近い行政区のいくつかで死亡率等4%以上の行政区がみうけられる。

### ■大字・町別死亡率



## 9 公共施設等の被害状況（防災施設）

防災施設の被害状況を見ると、防風林・防潮林が広く被害を受けていることがわかる。また、集落内の各戸における防風林・防潮林も被害を受けていることが確認される。

### ■公共施設等の被害状況（防災施設）





## 10 公共施設等の被害状況（インフラ）

道路や公園などインフラ関係の被害状況をみると、鳥の海周辺で道路や公園の被害が広がっている。また、吉田東部地区では、長い距離で道路の被害が広がっている。

### ■公共施設等の被害状況（インフラ）



## 11 公共施設・ライフラインの被害状況

ライフラインの被害状況では、町内に点在する病院・福祉施設とともに、JR常磐線が被害を受けている。

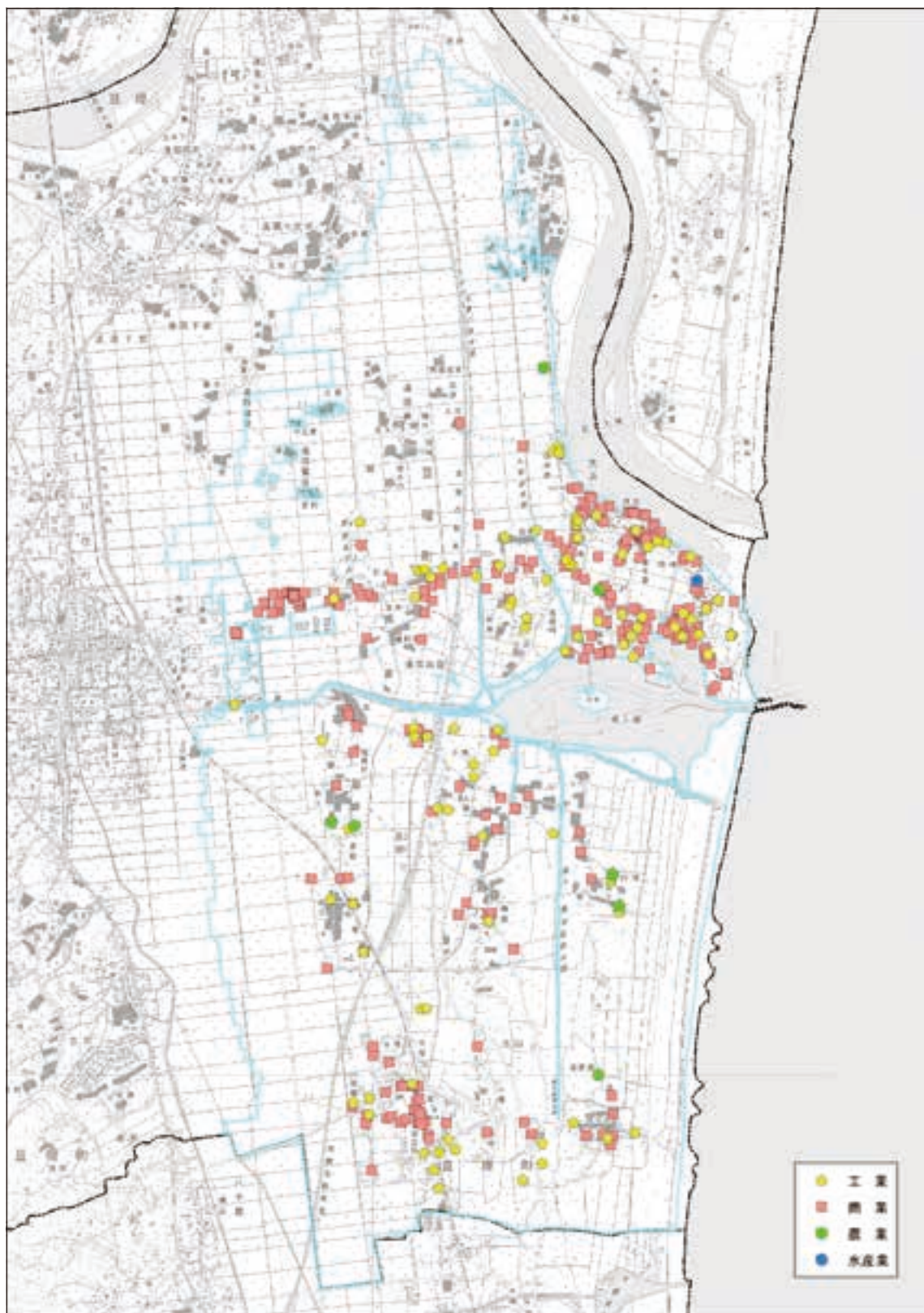
### ■公共施設・ライフラインの被害状況



## 12 産業関係施設の被害状況

荒浜地区の商業施設や工業施設を中心に、被害を受けている。特に鳥の海の北から西側にかけて、その被害が大きい。

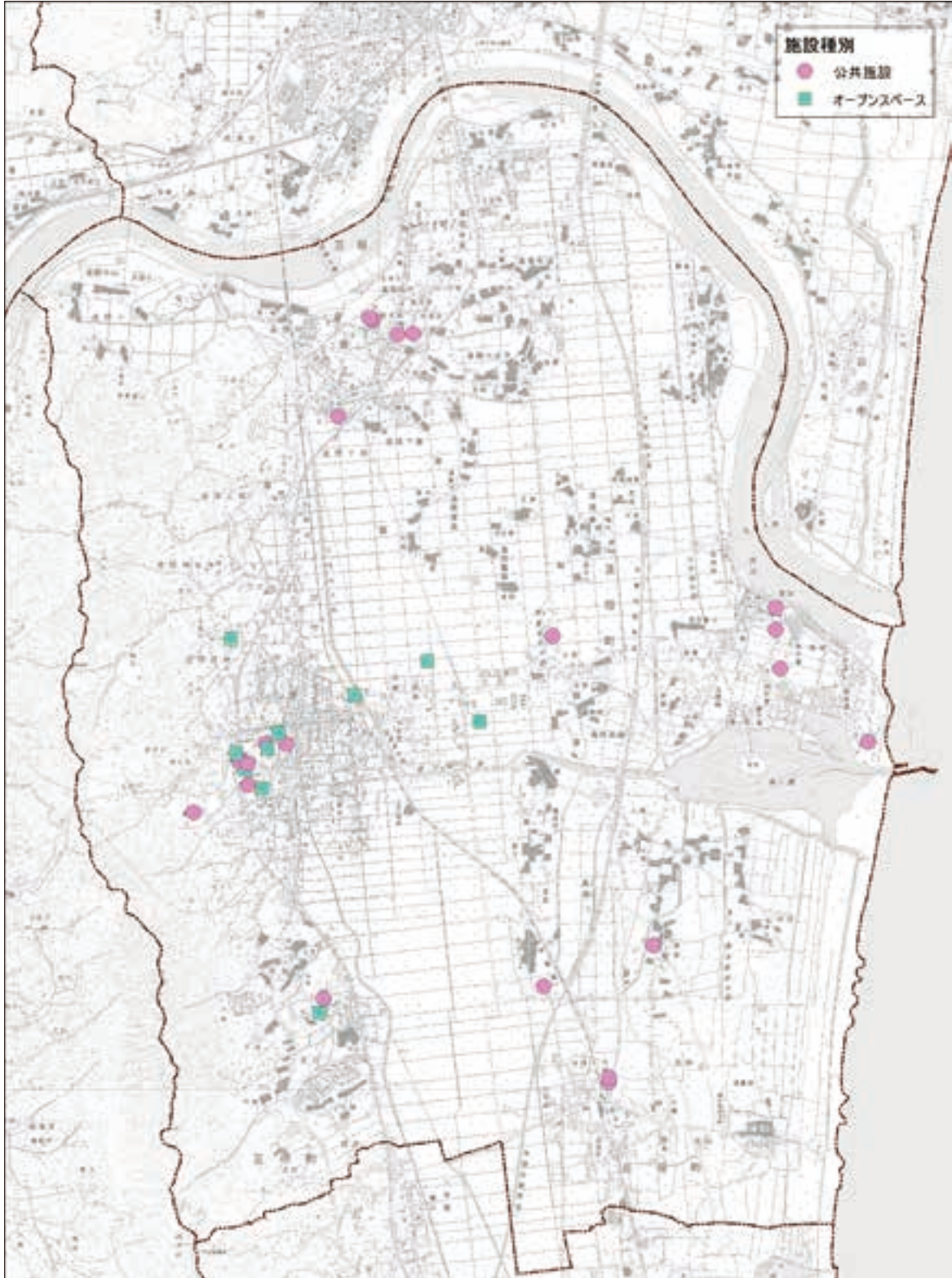
### ■産業関係施設の被害状況



### 13 避難地・防災活動拠点

小学校等の公共施設や公園などのオープンスペースで、避難地（2次避難所）として機能したもの、防災活動拠点として機能したものは、主に巨理町の西部の標高の高いところに集積しているが、津波被害の大きい荒浜地区・吉田東部地区でもいくつかの公共施設で確認できる。

#### ■避難地・防災活動拠点



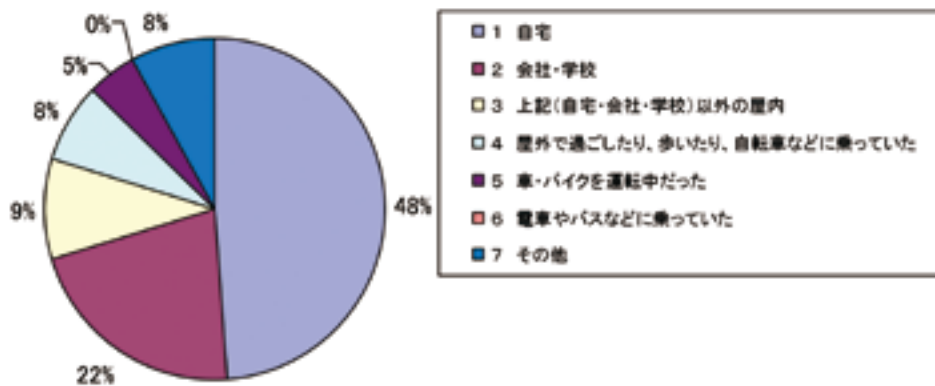
# 住民意見

## 1 避難行動に関する個人への聞き取り調査の主な結果

○対象者260人

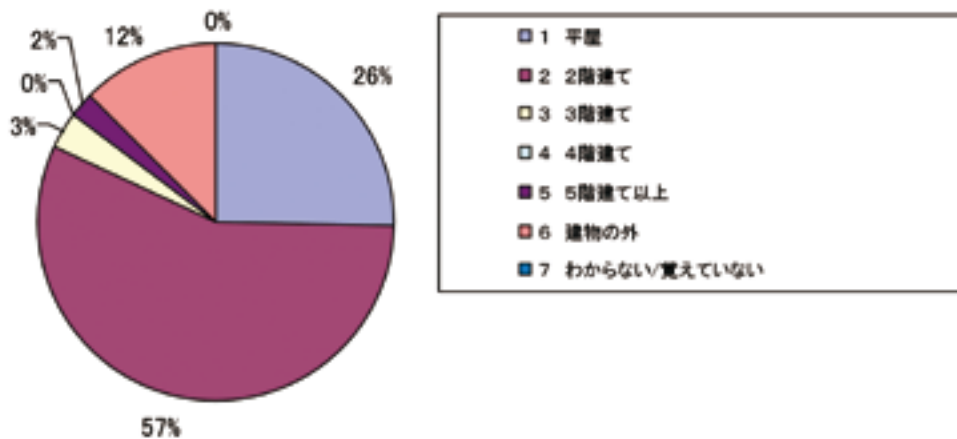
**問1 地震発生時（平成23年3月11日14時46分頃）は、あなたはどちらにいましたか。**

○地震発生時、7割の方が「自宅」もしくは、「会社・学校」にいた。



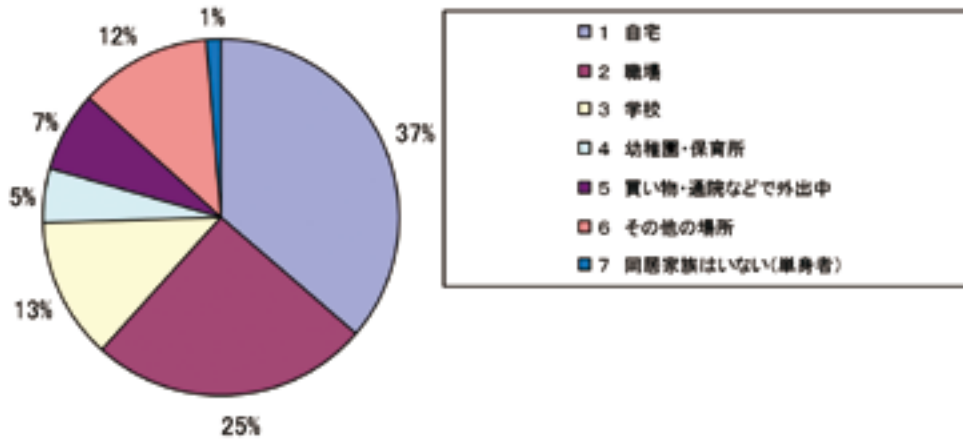
**問1-1 地震発生時にいた場所（施設）の建物は何階建てでしたか。（問1で1～3と答えた方）**

○地震発生時にいた場所（施設）の多くは、「2階建て」もしくは「平屋」であった。



**問2 地震発生時、同居のご家族はどこにいましたか。**

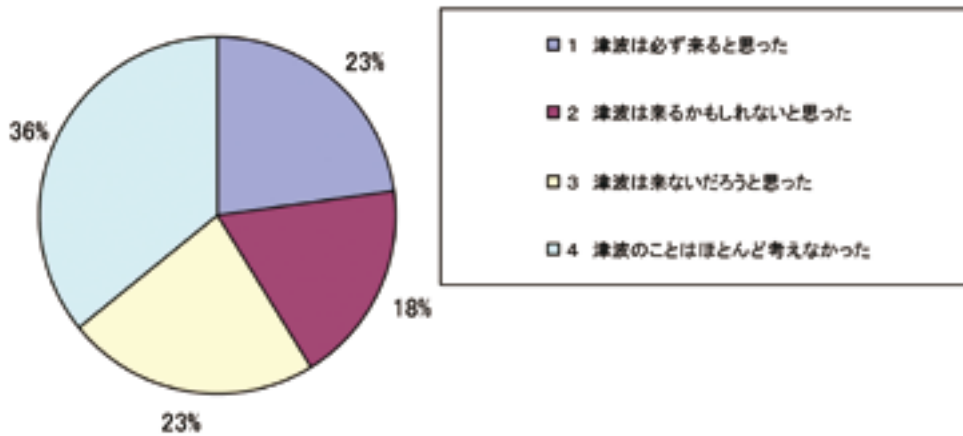
○地震発生時、同居の家族の多くは、「自宅」、「職場」、「学校」であった。



**問3 地震の揺れの直後、大津波警報を聞く前にあなたのいた場所に津波が来ると思いましたか。**

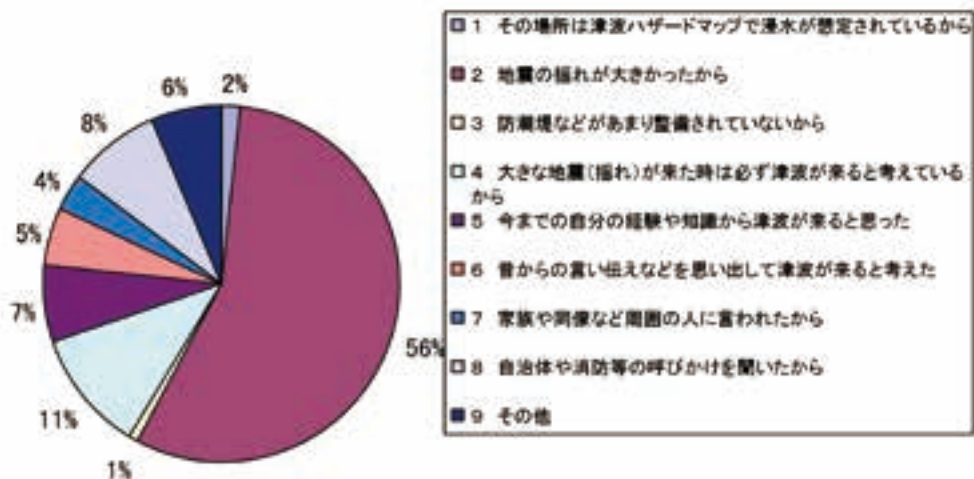
○6割の方が、「津波が来ないだろうと思った」もしくは「津波のことはほとんど考えなかった」と回答している。

○「津波は必ず来ると思った」方は、2割強であった。



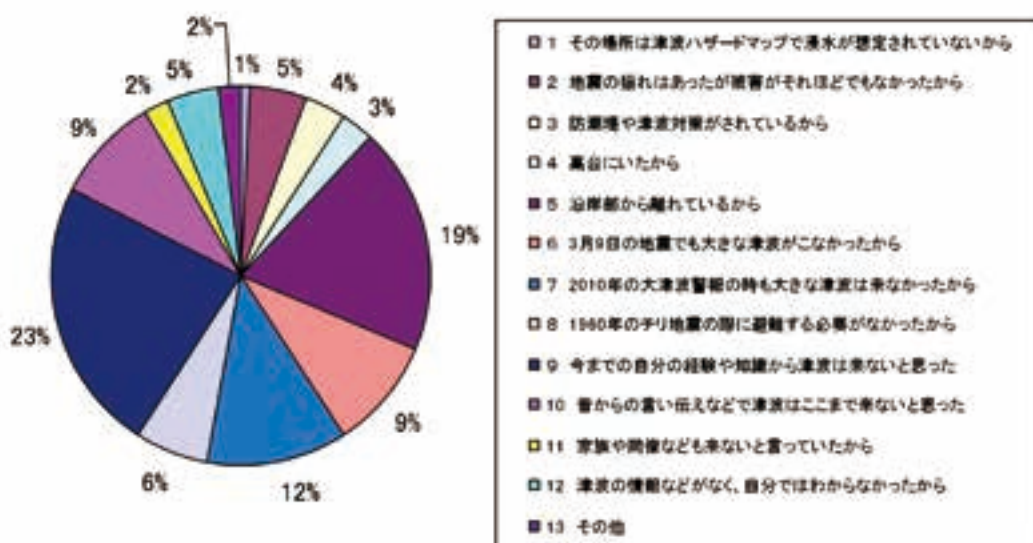
**問3-1 「津波が来る」と思ったのは、どのような理由からですか。(問3で1、2と答えた方)**

○約6割の方が、「地震の揺れが大きかったから」津波が来ると思ったと回答している。



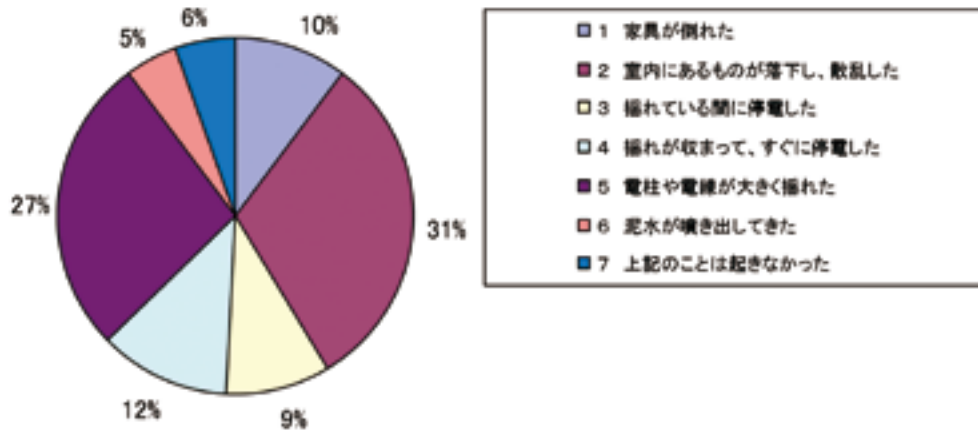
**問3-2 「津波は来ないだろう」と思ったのは、どのような理由からですか。(問3で3と答えた方)**

○「今までの自分の経験や知識から津波は来ないと思った」が23%、「沿岸部からはなれているから」が19%、「2010年の大津波警報の時も大きな津波は来なかったから」が12%であった。



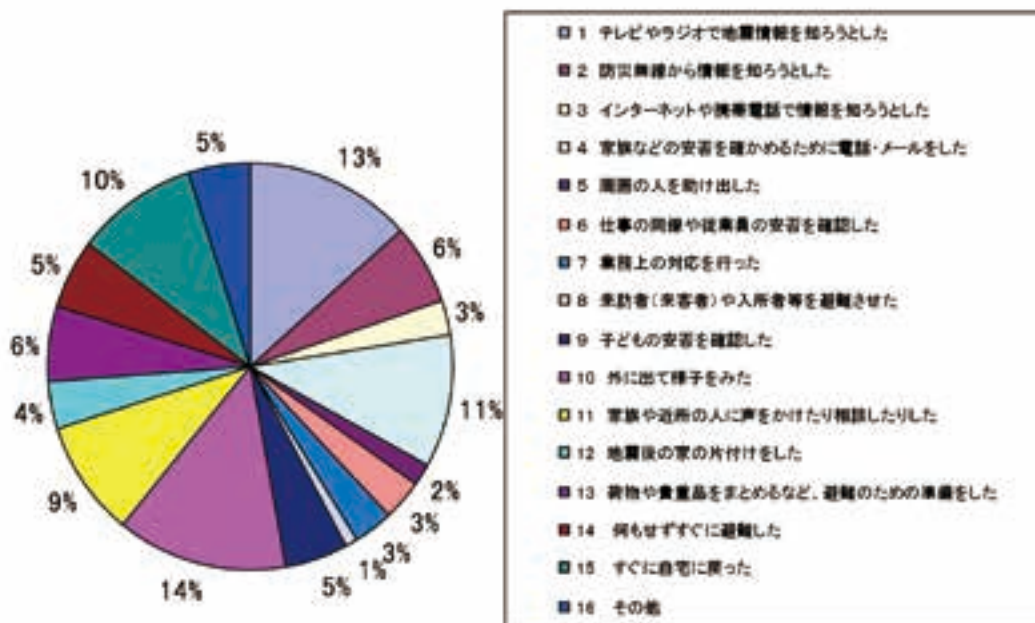
問4 あなたのいた場所では下記のようなことが起きましたか。

○物の落下、電柱や電線の大きな揺れ、停電などを体験したと答えた方が多い。



問5 揺れが収まってから、あなたは以下のようなことを行いましたか。

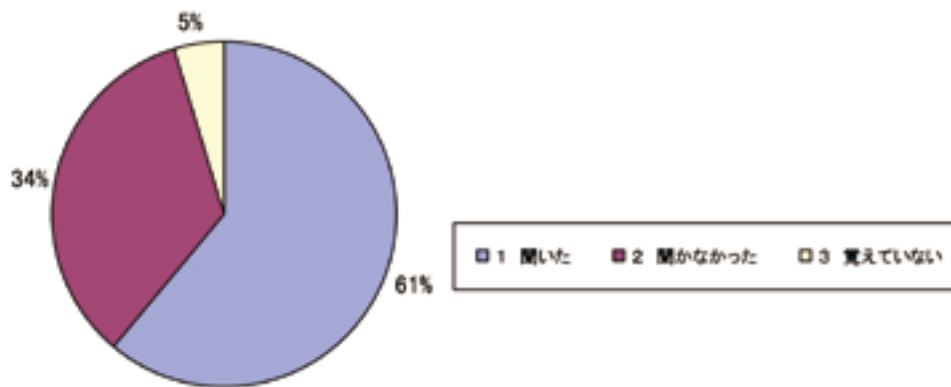
○「外に出て様子をみた」が14%、「テレビやラジオで地震情報を知ろうとした」が13%、「家族などの安否を確かめるために電話・メールをした」が11%であった。





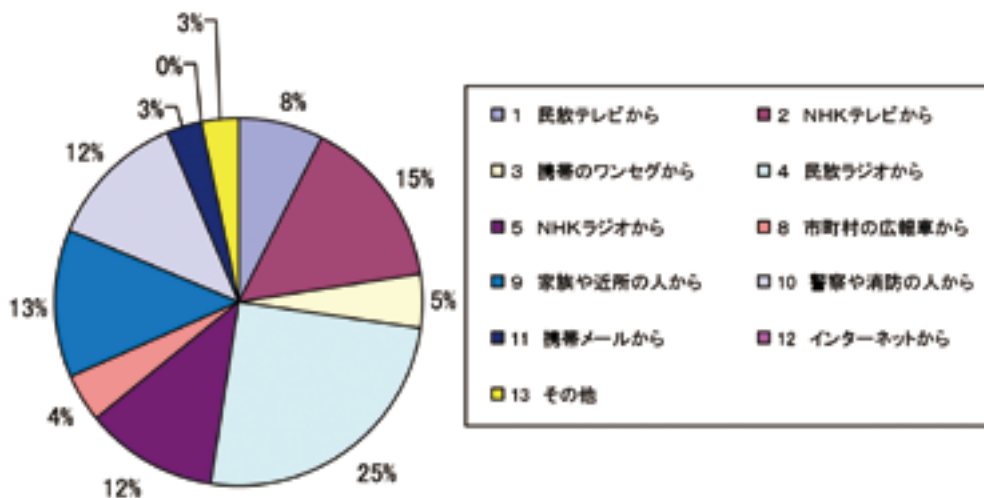
**問6** 地震の直後に、岩手県・宮城県・福島県には大津波警報が出され、青森県・茨城県には津波警報から大津波警報に途中から切り替えられました。あなたは、この大津波警報をお聞きになりましたか。

○約3割の方が、大津波警報について「聞かなかった」と回答している。



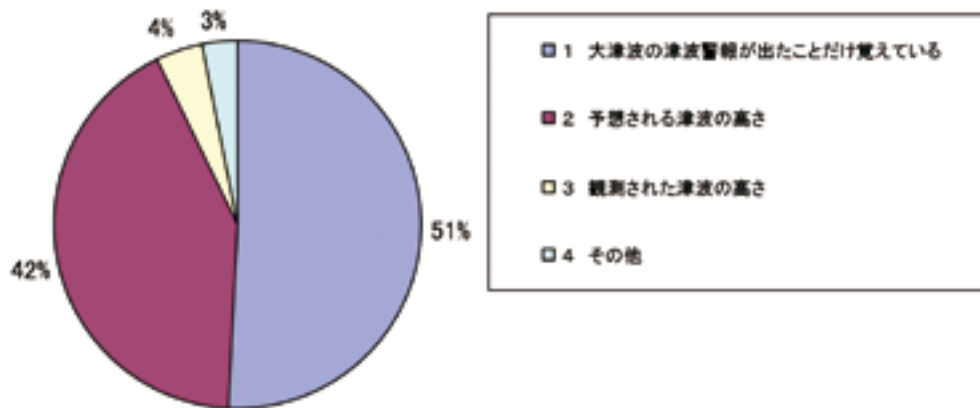
**問6-1** あなたは、その大津波の津波警報をどのようにして知りましたか。(問6で1と答えた方)

○25%の方が「民放ラジオから」、15%の方が「NHKテレビから」、13%の方が「家族や近所の人から」、12%の方が「NHKラジオから」「警察や消防の人から」大津波警報を聞いている。



**問6-2 あなたが聞いた大津波の津波警報は、どのような内容のものでしたか。(問6で1と答えた方)**

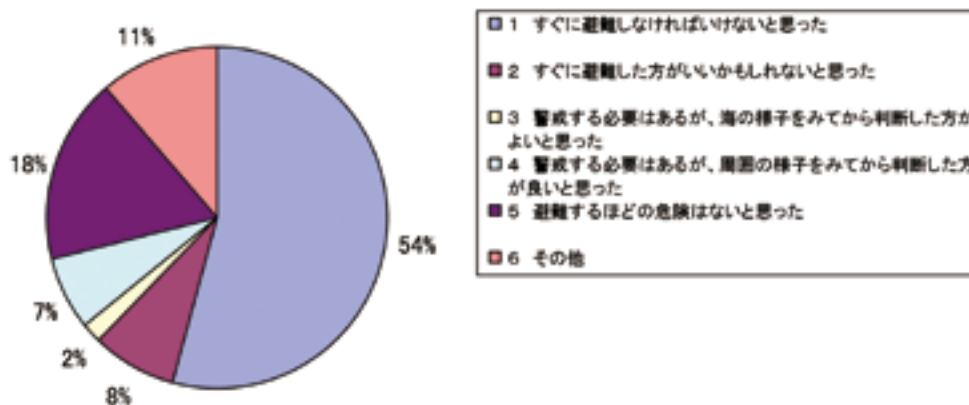
○約5割の方が「大津波の津波警報が出たことだけ覚えている」と回答し、「予想される津波の高さ」を聞いた方は約4割である。



**問6-3 あなたは、この大津波警報を聞いた時、どのように思いましたか。(問6で1と答えた方)**

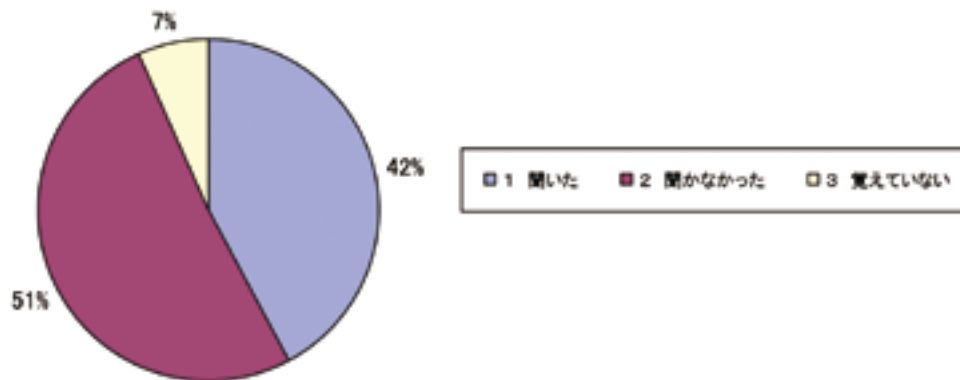
○5割を超える方が、「すぐ避難しなければいけないと思った」と回答している。

○一方で、1/4の方が、「避難するほどの危険はないと思った」「警戒する必要があるが、周囲の様子をみてから判断した方が良かった」と回答している。



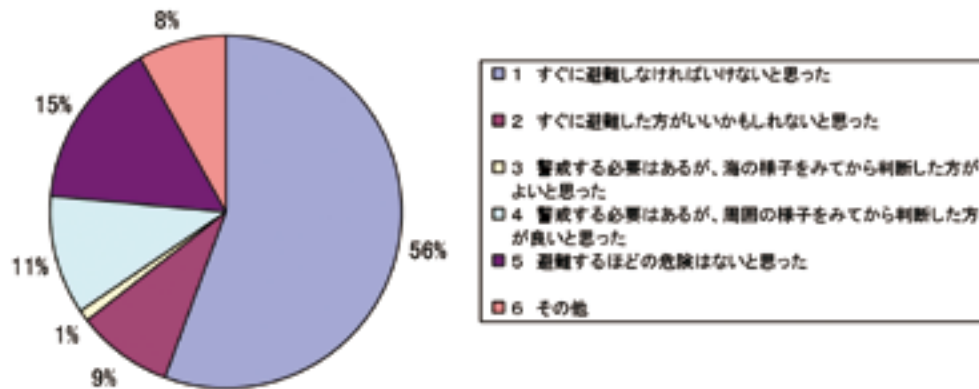
**問7 地震のあと、市町村から「大津波が来るので避難するように」といった呼びかけを聞きましたか。**

- 51%の方が避難の呼びかけを「聞かなかった」と回答している。
- 避難の呼びかけを「聞いた」方は42%であった。



**問7-1 あなたは、この呼びかけを聞いた時、どのように思いましたか。(問7で1と答えた方)**

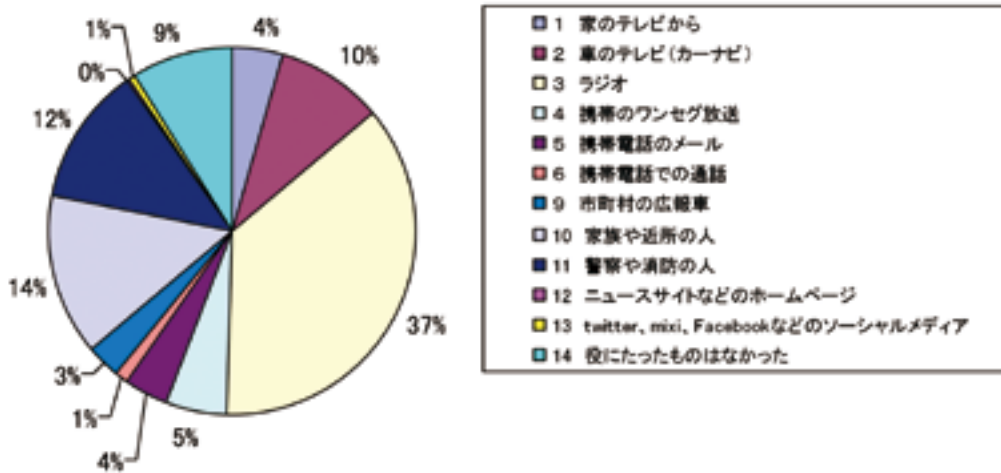
- 5割を超える方が、「すぐ避難しなければいけないと思った」と回答している。
- 一方で、約1/4の方が、「避難するほどの危険はないと思った」「警戒する必要があるが、周囲の様子をみてから判断した方が良かった」と回答している。



**問8 地震発生後から日没までの間、避難や津波に関する情報を得るのに、次にあげる情報源は、あなたにとって役にたったと思いますか。**

○37%の方が、役にたった情報源として「ラジオ」をあげている。

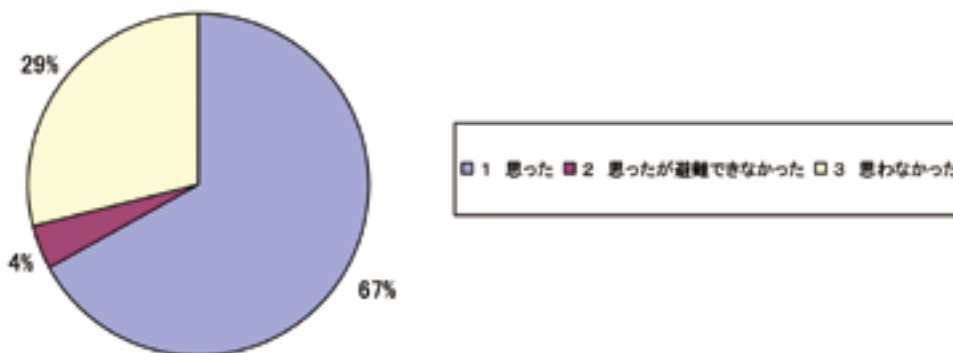
○次いで、「家族や近所の人」が14%、「警察や消防の人」が12%となっている。



**問9 地震の後、津波が実際に押し寄せてくるまでの間、津波を警戒し避難しようと思いましたが。**

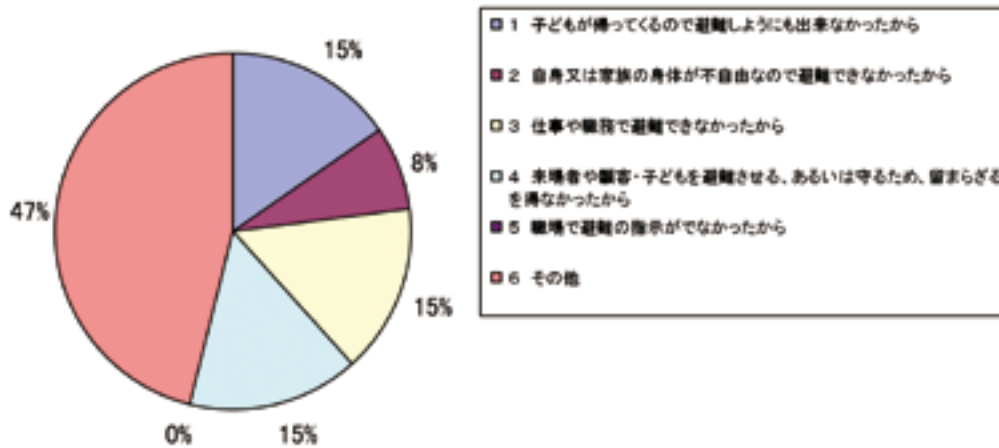
○約7割の方が「思った」と回答している。

○一方で、約3割の方は「思わなかった」と回答している。



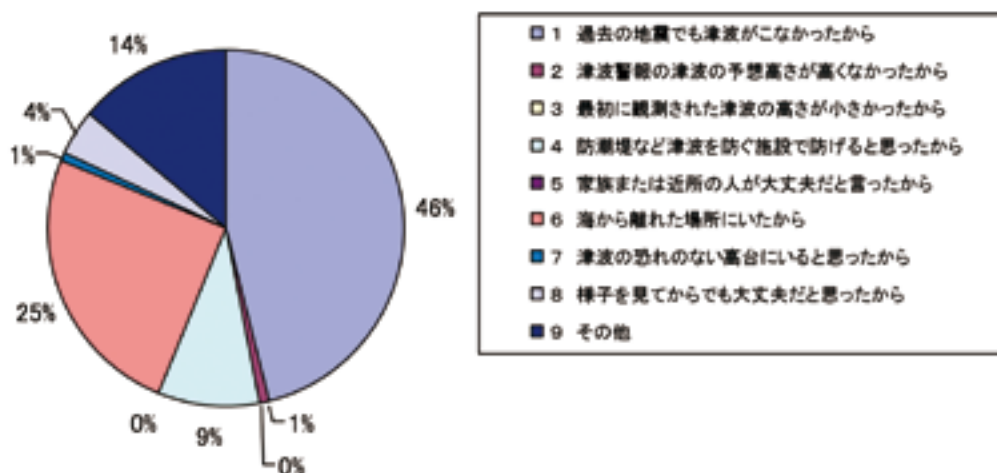
**問9-1 避難できなかった理由は何ですか。(問9で2と答えた方)**

○避難できなかった理由としては、「子どもが帰ってくるので避難しようにも出来なかったから」「仕事や職務で避難できなかったから」「来場者や顧客・子どもを避難させる、あるいは守るため、留まらざるを得なかったから」がそれぞれ15%であった。



**問9-2 避難をしようと思わなかった理由は何ですか。(問9で3と答えた方)**

○約5割の方が、「過去の地震でも津波がこなかったから」避難しようと思わなかったと回答している。  
○1/4の方は、「海から離れた場所にいたから」と回答している。

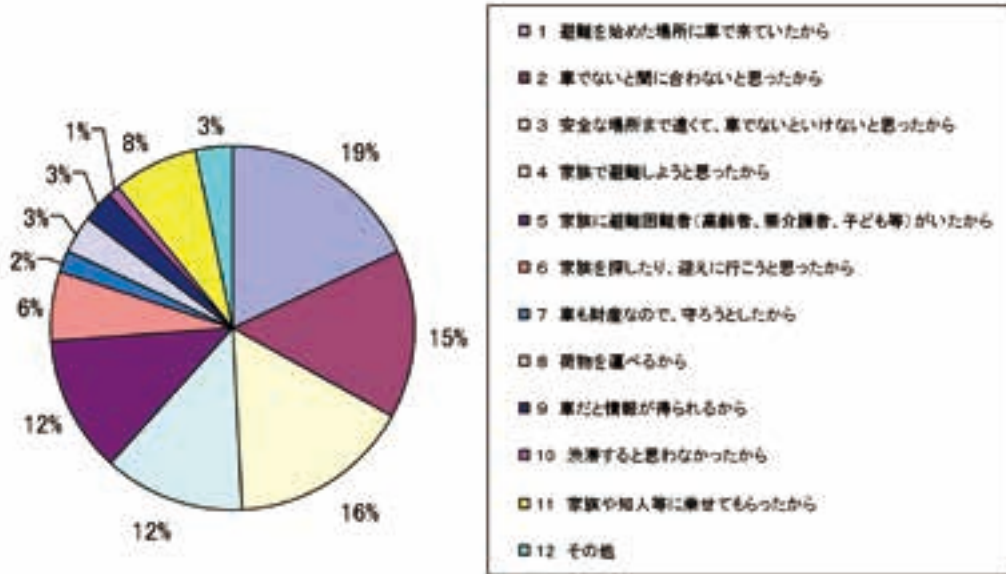


※問10については、「2. 避難者個人ごとの行動に関する集計」として集計している。

**問11 車を使用した理由は何ですか。**

○約2割の方が「避難を始めた場所に車で来ていたから」車を使用したと回答している。

○次いで、「安全な場所まで遠くて、車でないといけないと思ったから」「車でないと間に合わないと思ったから」と回答している。

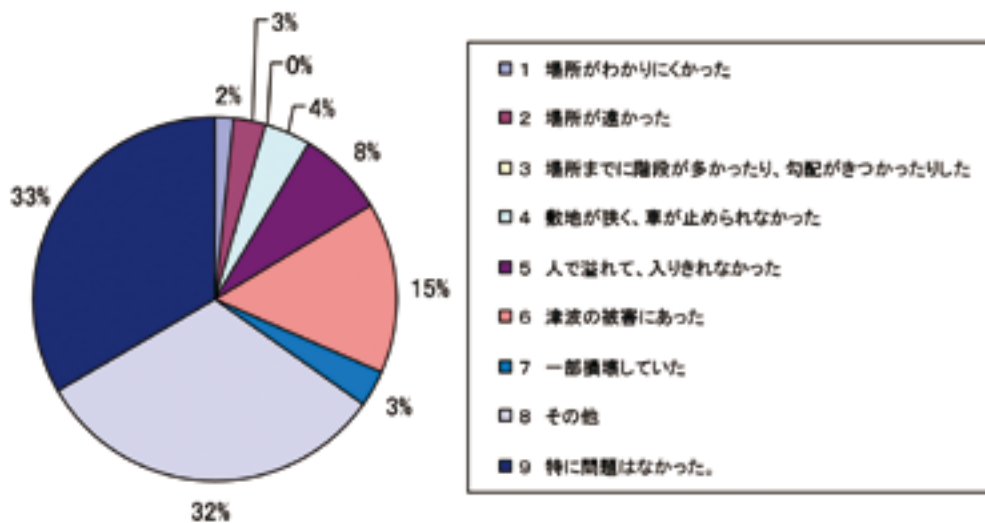


※問12は、「3. 避難路の問題点」として集計している。

**問13 当日、津波から最初に避難した場所の立地や設備面で問題と感じたことはありますか。**

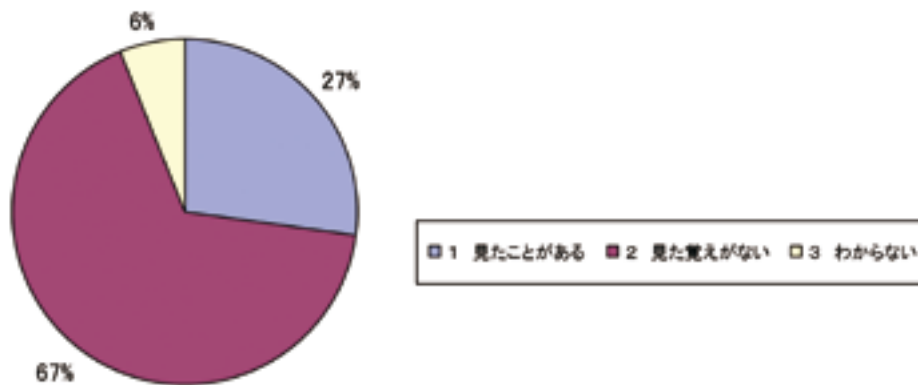
○最初に避難した場所の立地や設備面では「特に問題はなかった」と回答した方が3割を超えていた。

○15%の方は「津波の被害にあった」と回答している。



**問14 あなたご自身は、津波ハザードマップや津波防災マップを見たことがありますか。**

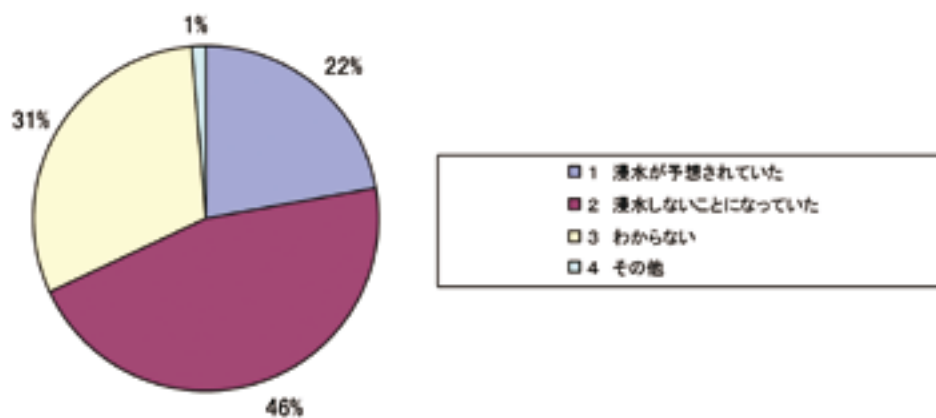
○7割近くの方が、津波ハザードマップや津波防災マップを「見た覚えがない」と回答している。



**問14-1 ご自宅は津波ハザードマップ上で浸水すると予想されていましたか。(問14で1と答えた方)**

○5割弱の方は「浸水しないことになっていた」と回答している。

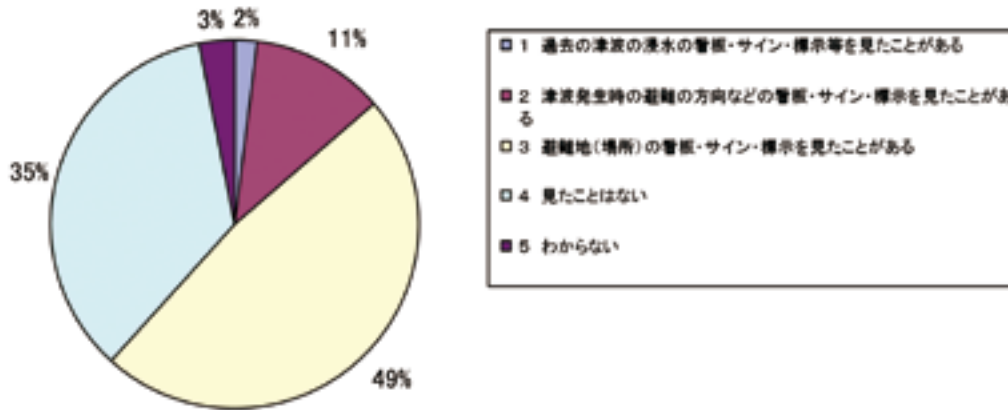
○3割の方は「わからない」と回答されている。



**問15** あなたは、あなたの地域で過去の津波や浸水や、津波発生時の避難方向、避難地などを示した「看板」「サイン」「標示」等を見たことがありますか。

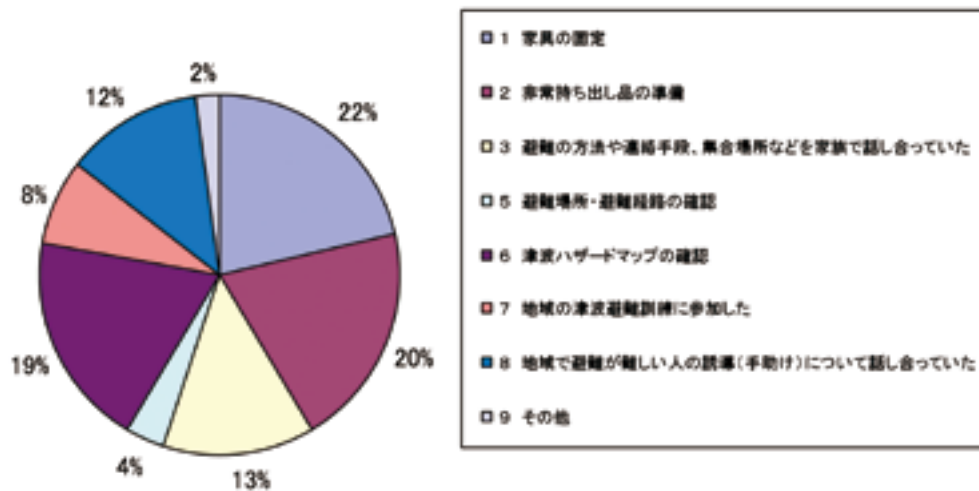
○35%の方が、「看板」「サイン」「標示」等を「見たことはない」と回答している。

○一方で、5割の方が「避難地（場所）の看板・サイン・標示を見たことがある」と回答している。



**問16** お宅では、今回の大震災が発生する前にどのような備えをしていましたか。

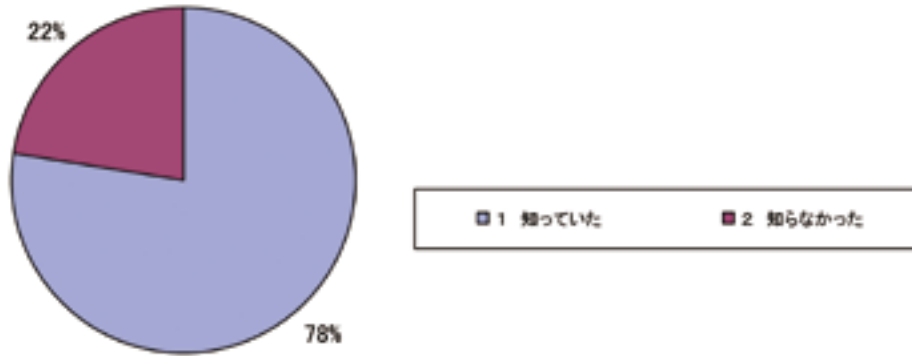
○「家具の固定」や「非常持ち出し品の準備」、「津波ハザードマップの確認」などがそれぞれ約2割を占めている。





**問17 あなたは、地震発生時にいた場所の指定避難場所や避難ビルを知っていましたか。**

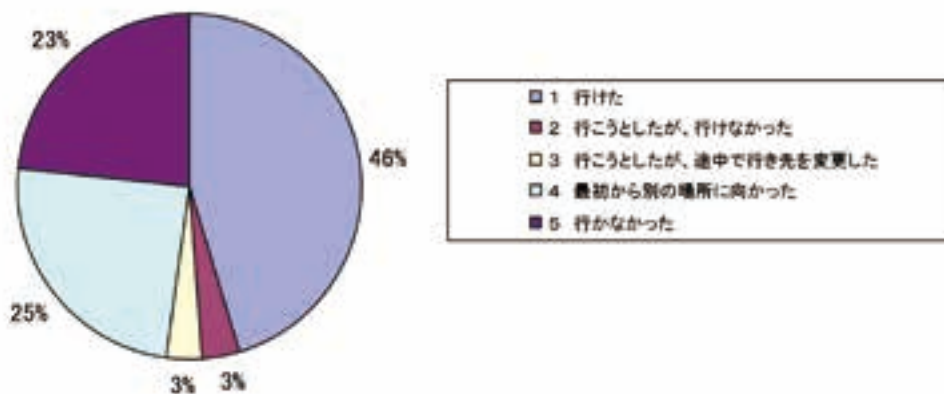
○約2割の方が、指定避難場所や避難ビルについて「知らなかった」と回答している。



**問17-1 あなたは、その指定避難場所や避難ビルに行けましたか。(問17で1と答えた方)**

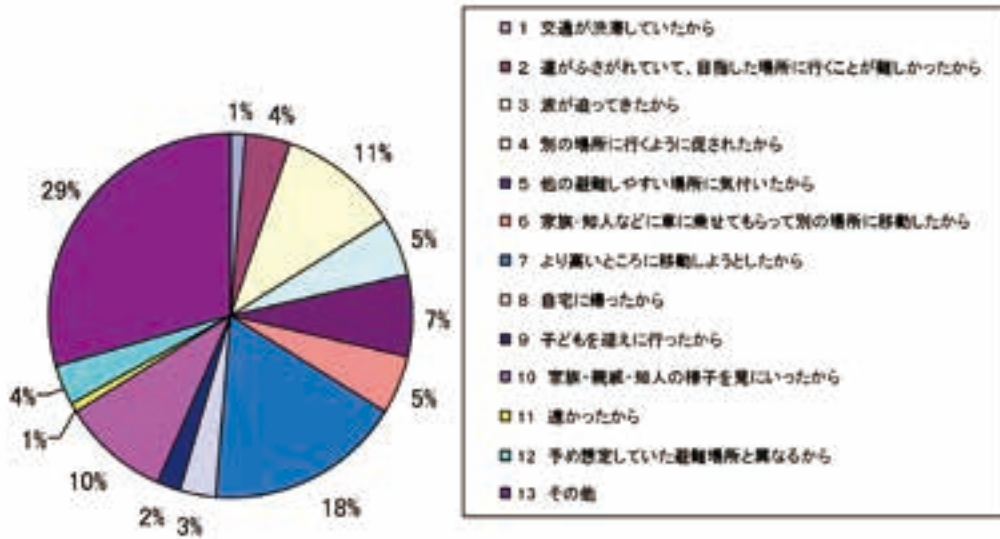
○5割弱の方が「行けた」と回答している。

○一方で、23%の方は「行けなかった」と、25%の方は「最初から別の場所に向かった」と回答している。



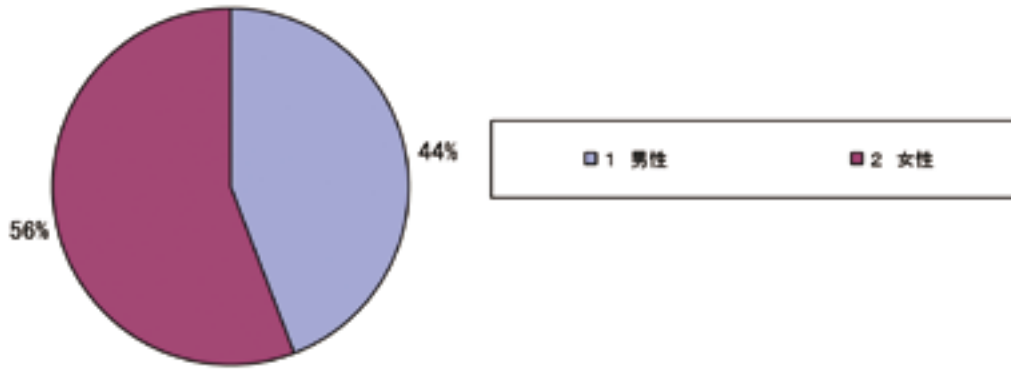
問17-1-1 あなたはその指定避難場所や避難ビルに行けなかった、行かなかった理由はなんですか。  
(問17-1で2~5と答えた方)

○2 割弱の方が「より高いところに移動しようとしたから」と回答している。



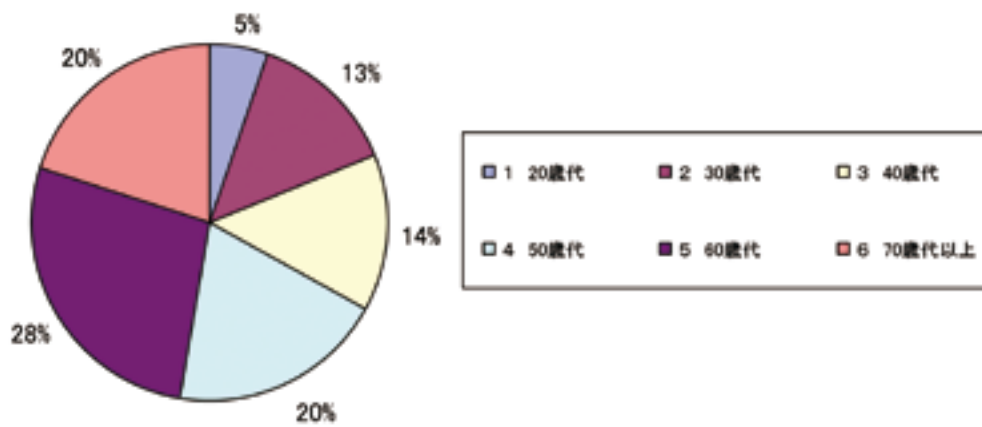
### F 1 性別は。

○「女性」が56%を占めている。



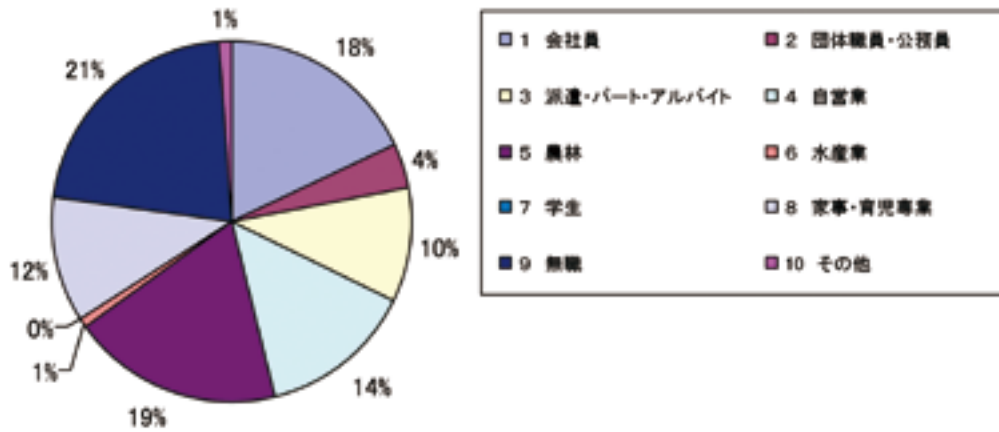
### F 2 年齢は。

○「60歳代」が多く、「20歳代」など若い年齢層が少ない。



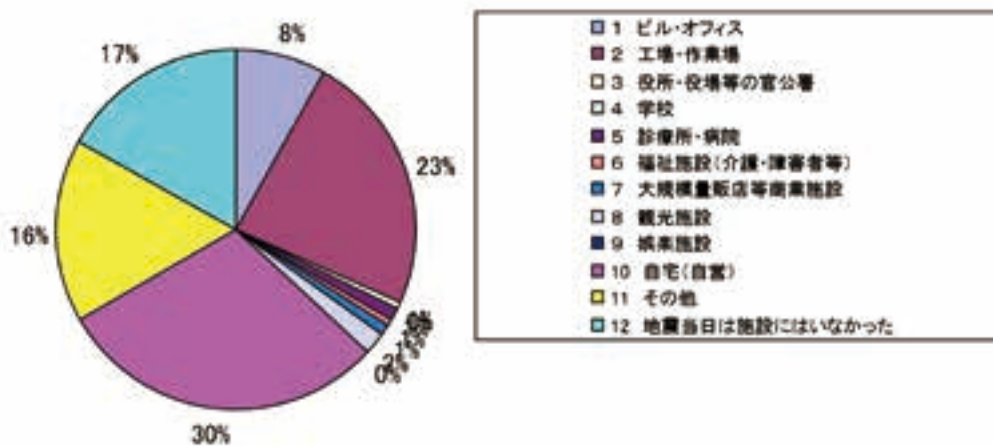
F3 震災発生時の職業は何でしたか。

○「無職」「農林業」「会社員」の方が約2割である。



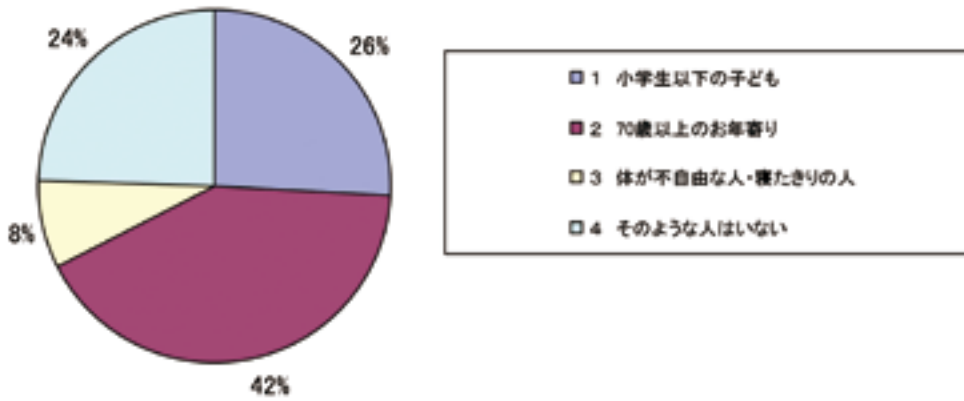
F3-1 地震当日、あなたが勤務していた施設は、どのような施設ですか。(F3で1～6と答えた方)

○「自宅(自営)」が30%を占め、「工場・作業場」が続く。



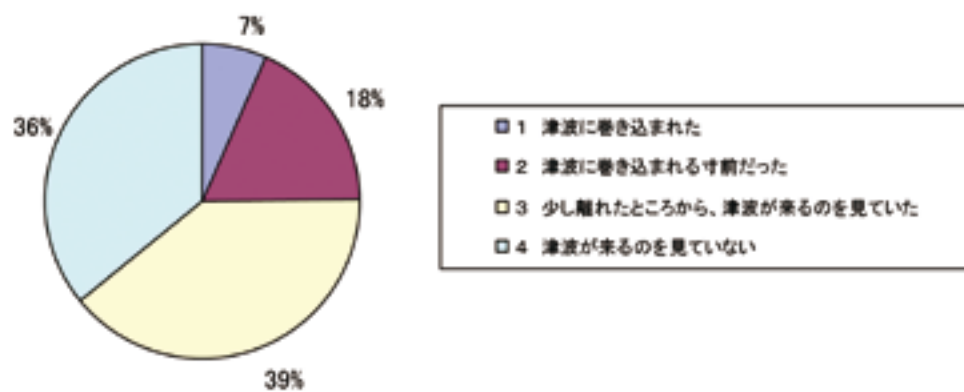
#### F4 同居する家族に、以下のような方がいましたか。

○4割を超える回答者に、「70歳以上のお年寄り」が同居されている。



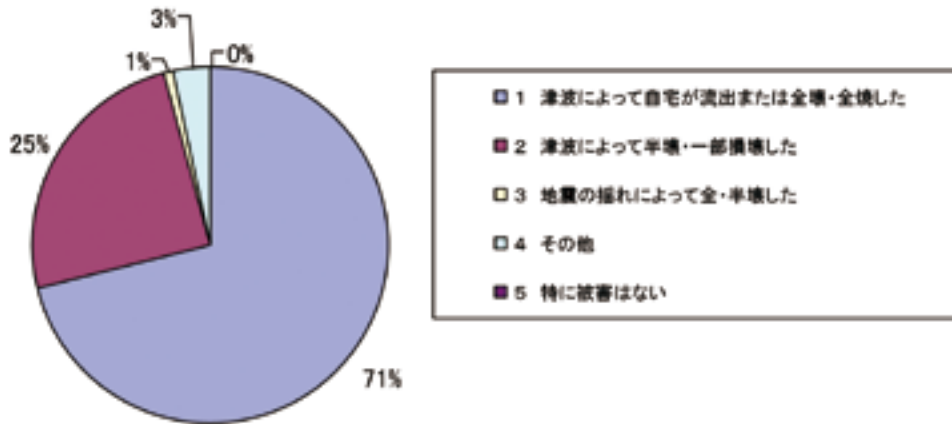
#### F5 あなたは今回の地震で直接、津波を見ましたか。

○4割の方が「少し離れたところから、津波が来るのを見ていた」と回答している。



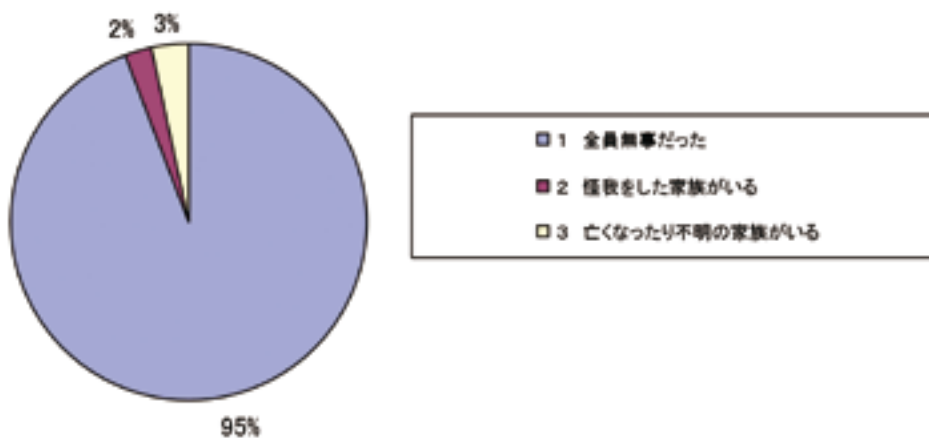
**F6 この度の地震や津波で、ご自宅はどのような被害を受けましたか。**

○7割を超える方が「津波によって自宅が流出または全壊・全焼した」と回答している。



**F7 この度の地震や津波で、ご家族はどのような被害を受けましたか。**

○95%の方が「全員無事だった」と回答している。



## 2 避難者個人ごとの行動に関する集計

○対象者260人（対象トリップ568トリップ）

○うち、津波到達直前の対象者228人（対象トリップ432トリップ）

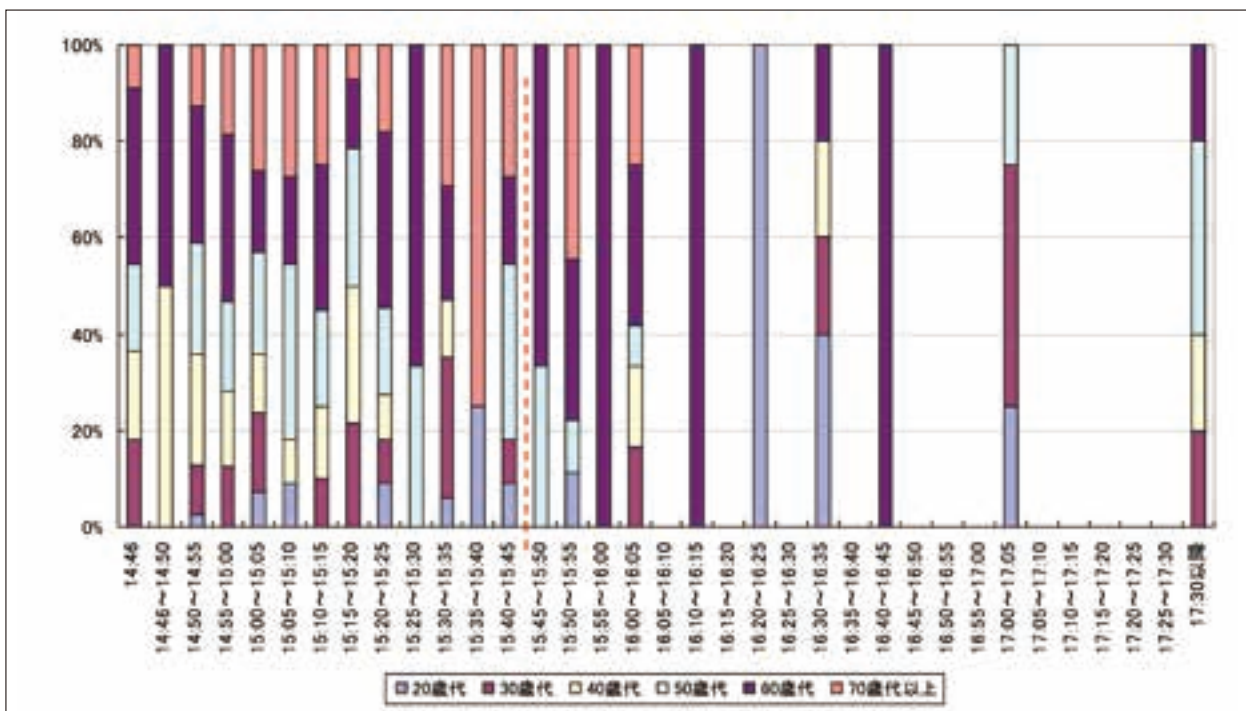
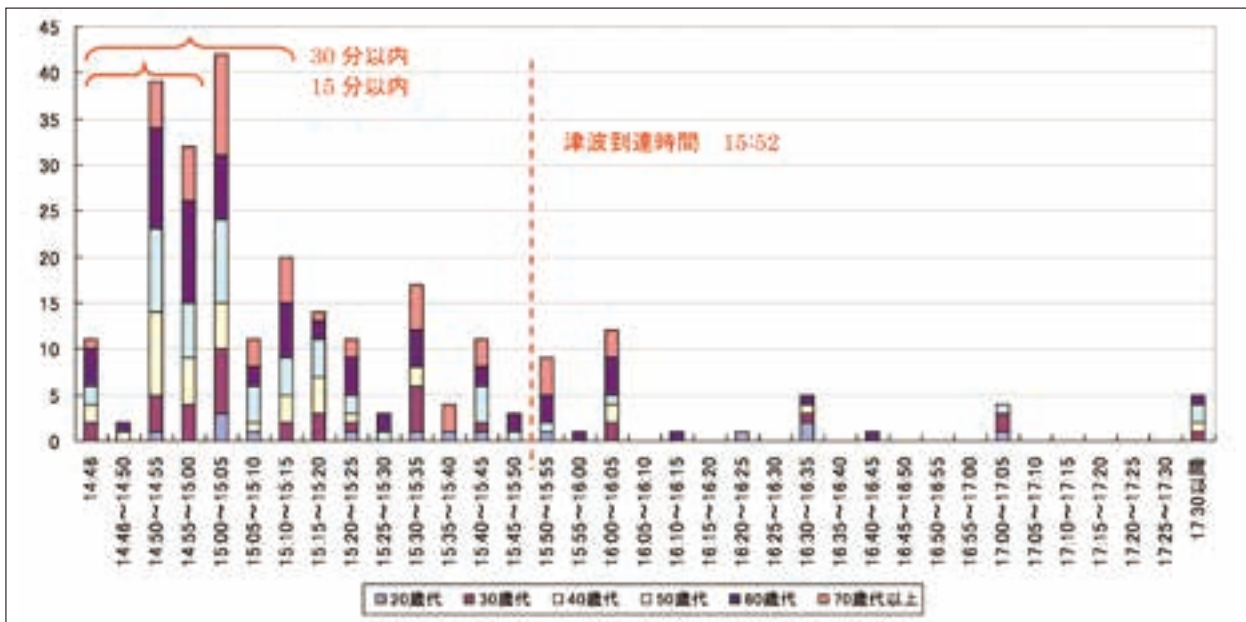
### ①-1 避難開始時間（年齢別）

○多くの方が地震発生後20分程度で避難を開始している。ただし、発生後30分以内に避難された方の割合は、約60%である。

○被災6県の集計より、地震発生後30分以内に避難された方の割合が20ポイント程度低い。

○地震発生後15分以内で避難を開始した方の割合は、約32%にとどまる。

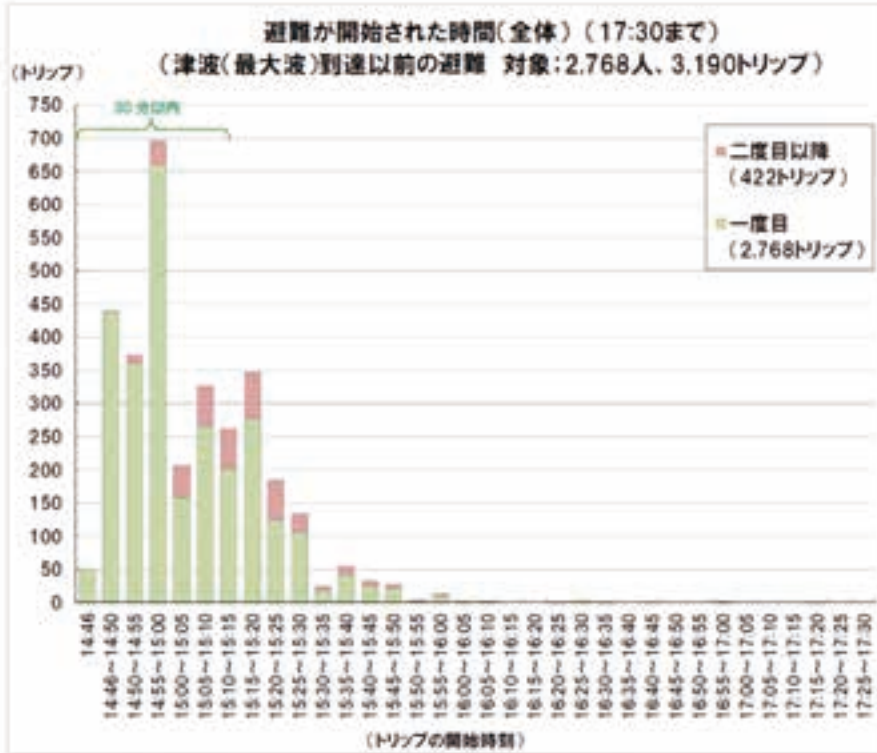
○若い年齢層は比較的早い時間に避難を開始している。一方で、地震発生後45分から1時間程度経過した時点で避難を開始するのは、高齢層の割合が多い。



■参考：東日本大震災の津波被災現況調査結果（第3次報告）

～津波からの避難実態調査結果（速報）～〔国土交通省：H23.12〕

- 地震が発生してから津波が来る前に避難行動を開始した人のうち、約80%の人は30分以内に避難を開始している。
- また、1度避難した後、2度目以降の避難をした人も地震発生後の10分経過後から増加している。



■参考：津波避難のための施設整備指針〔宮城県：H24.3〕

□避難開始時間

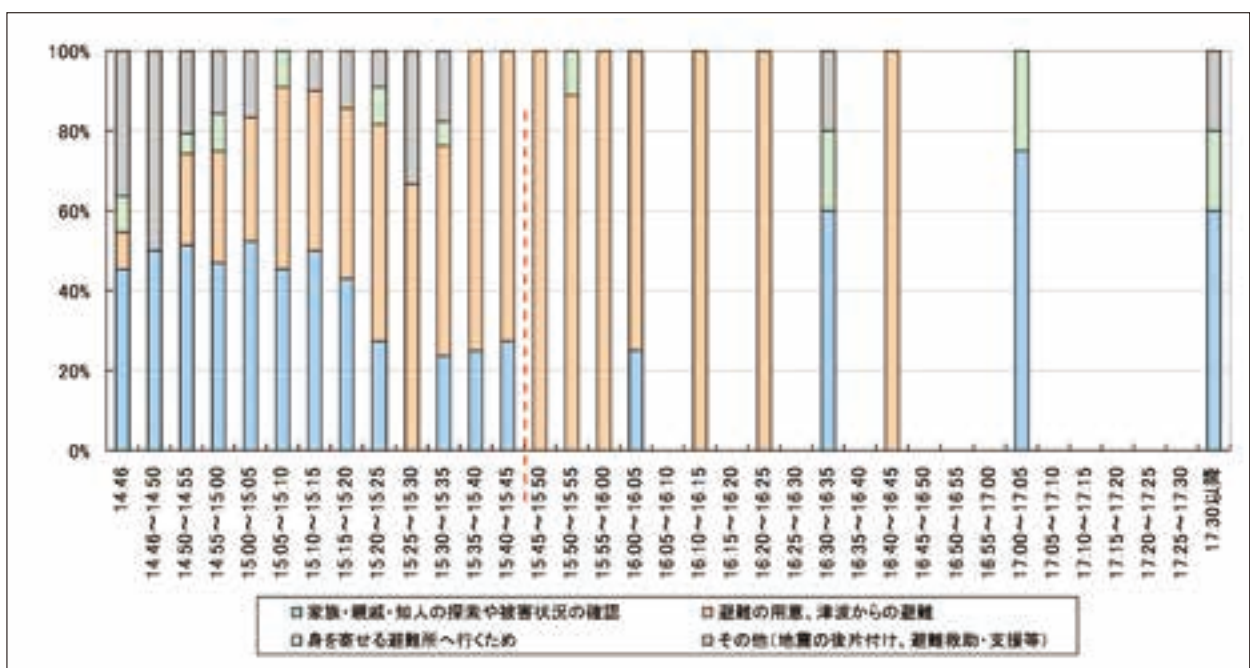
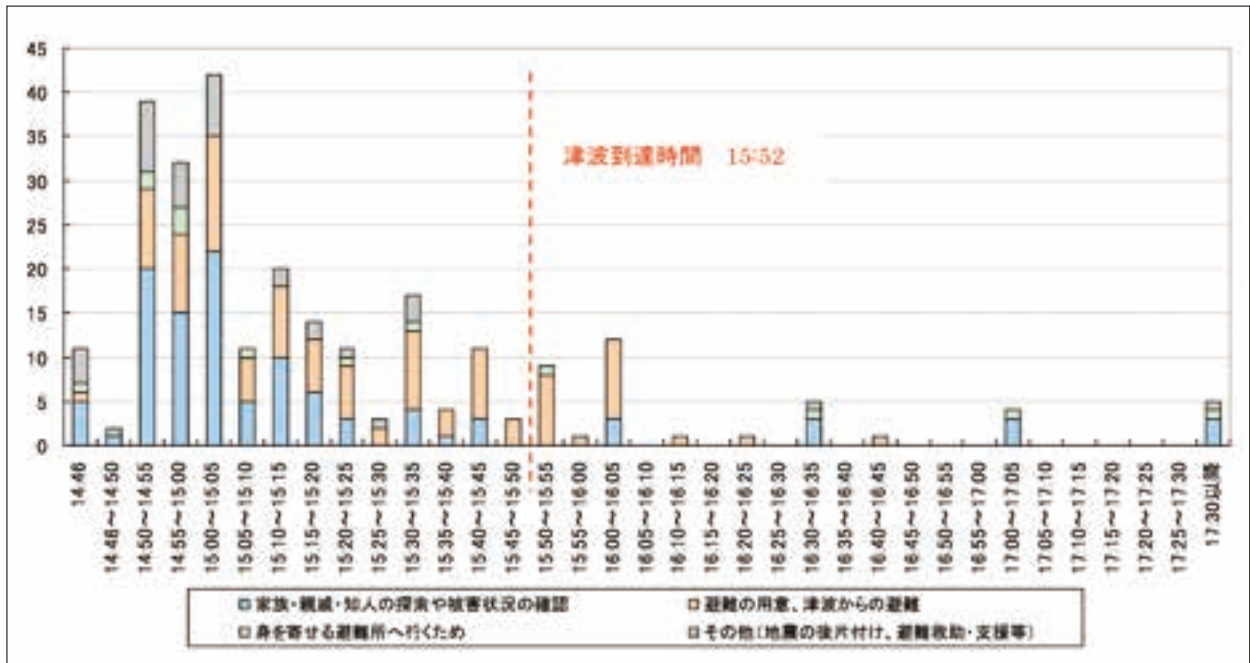
- 15分：“早く逃げる意識”の醸成を前提に必要な時間として



### ①-2 避難開始時間（移動の主な目的別）

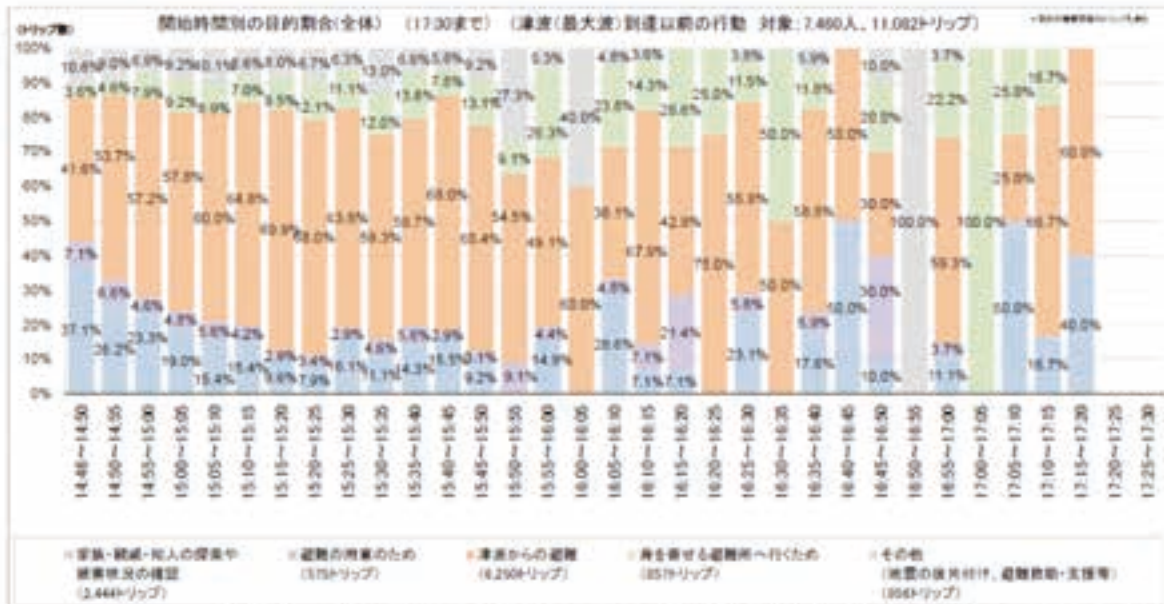
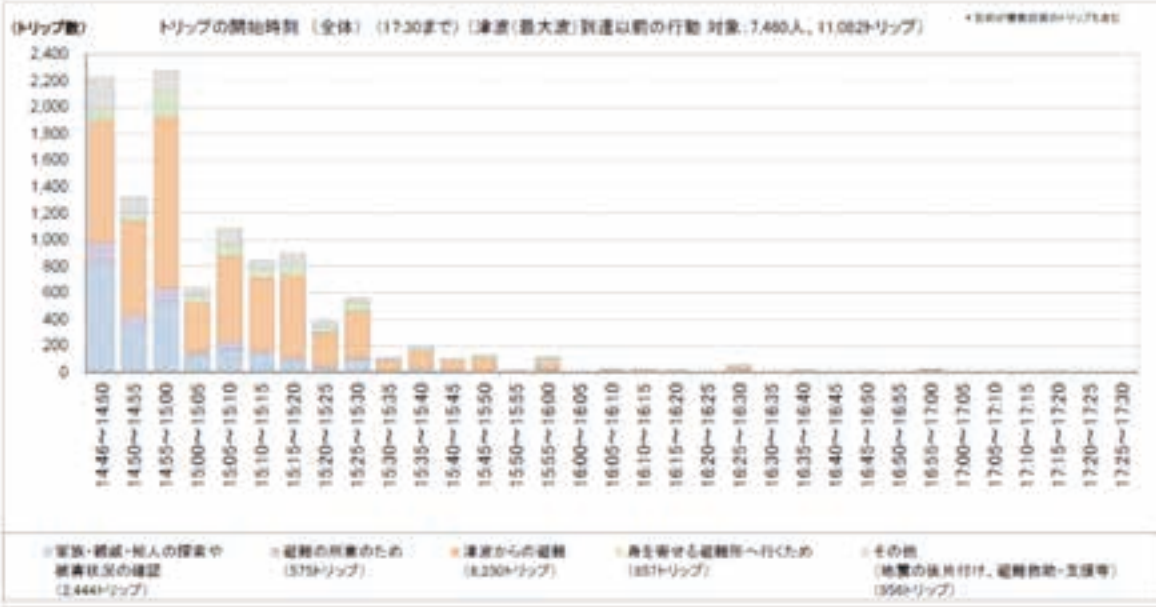
○地震発生後における移動の主な目的は、「家族・親戚・知人の探索や被害状況の確認」が多く、40分程度経過すると「避難の用意、津波からの避難」が多くなる。

○被災6県の集計よりは、「避難の用意、津波からの避難」の割合が低い。



■参考：津波避難実態調査「津波避難を想定した避難路、避難施設の配置及び避難誘導について（改訂版）」〔国土交通省：H24.12〕

- ・津波到達前に移動を開始した人（7,460人）の移動目的を見ると、地震発生直後から「津波からの避難」が、多かった。（14：46-14：50で発生した移動の42%は避難目的のトリップであった。）
- ・一方で、「家族・親戚・知人の探索や被害状況の確認のため」の行動も多く、14：46-14：50では、行動の37%、15：15-15：20においても10%を占めている。



\*分析対象：移動あり（C）：8,884人 の内、津波到達前に移動を開始した人（C-1、D-1、D-2）：7,460人

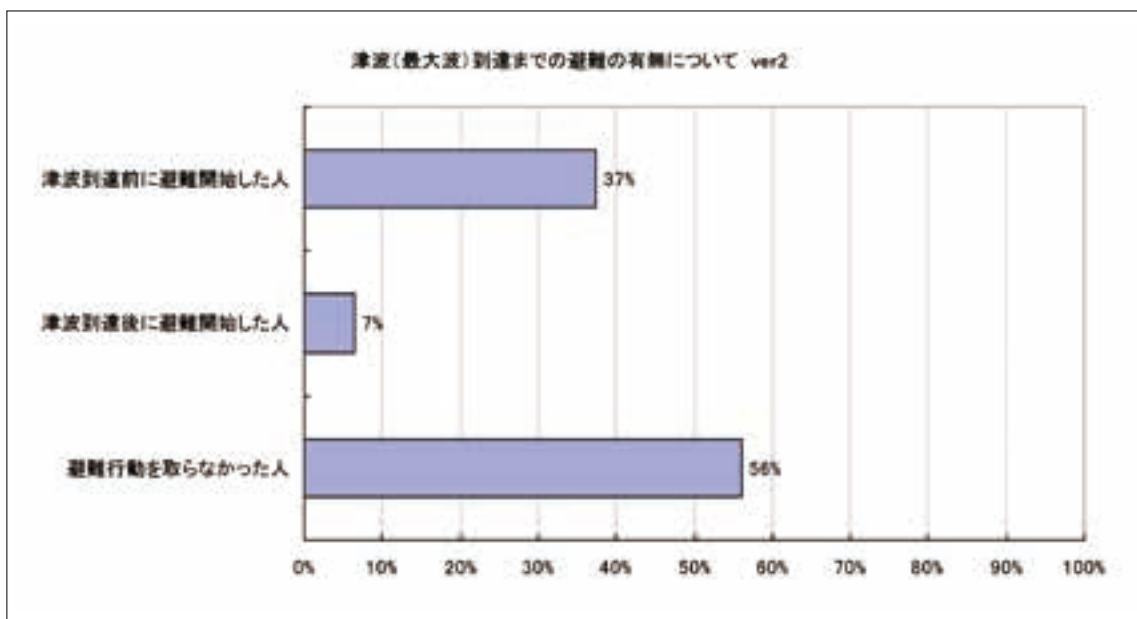
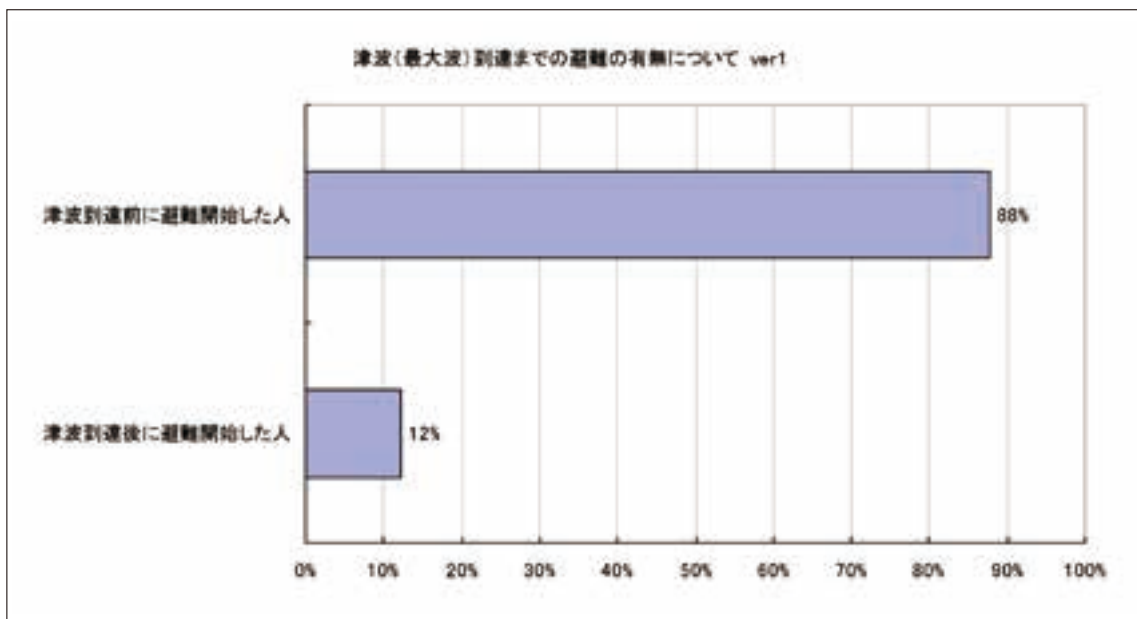
## ②津波到達までの避難行動の有無

○上図は、津波到達時間の15：52以前になんらかの行動を起こした人を避難開始とみなす場合の集計であり、約9割の方が津波到達前に避難を開始している。

○下図は、移動目的で、「津波からの避難のため」「身を寄せる避難所へ行くため」と回答した人を避難開始とみなす場合の集計であり、津波到達までに「避難行動を取らなかった人」が6割程度に達する。

	計	津波到達前に避難開始した人	津波到達後に避難開始した人	避難行動を取らなかった人	避難行動を取らなかった人	津波到達後に避難開始した人	津波到達前に避難開始した人
15時52分以前になんらかの行動を起こした人を避難開始とみなす場合(ver1)	260	228	32	-	-	12%	88%
移動目的で選択肢5,6※の回答をした人を避難開始とみなす場合(ver2)	260	97	17	146	56%	7%	37%

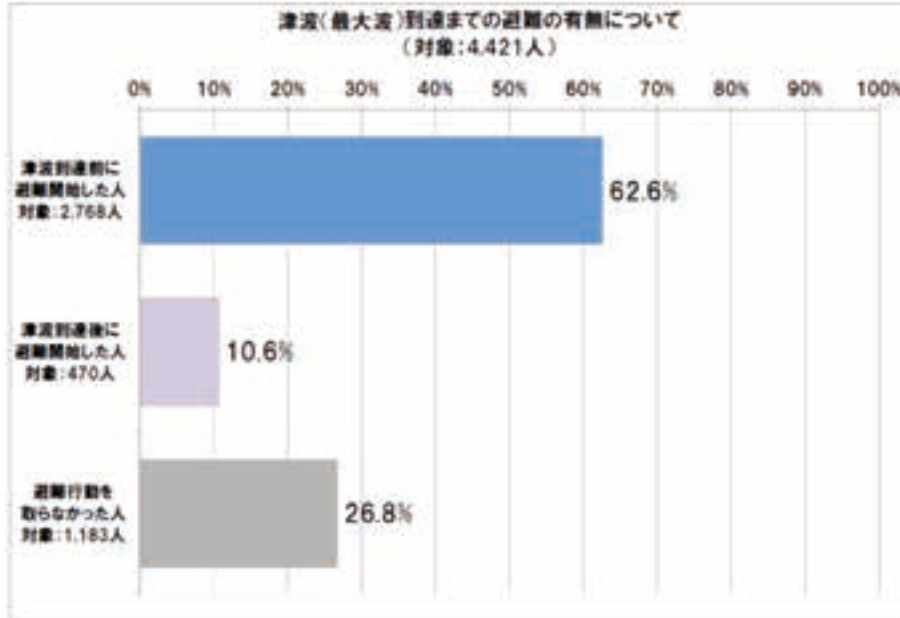
※選択肢5:津波からの避難のため、6:身を寄せる避難所へ行くため



■参考：東日本大震災の津波被災現況調査結果（第3次報告）

～津波からの避難実態調査結果（速報）～〔国土交通省：H23.12〕

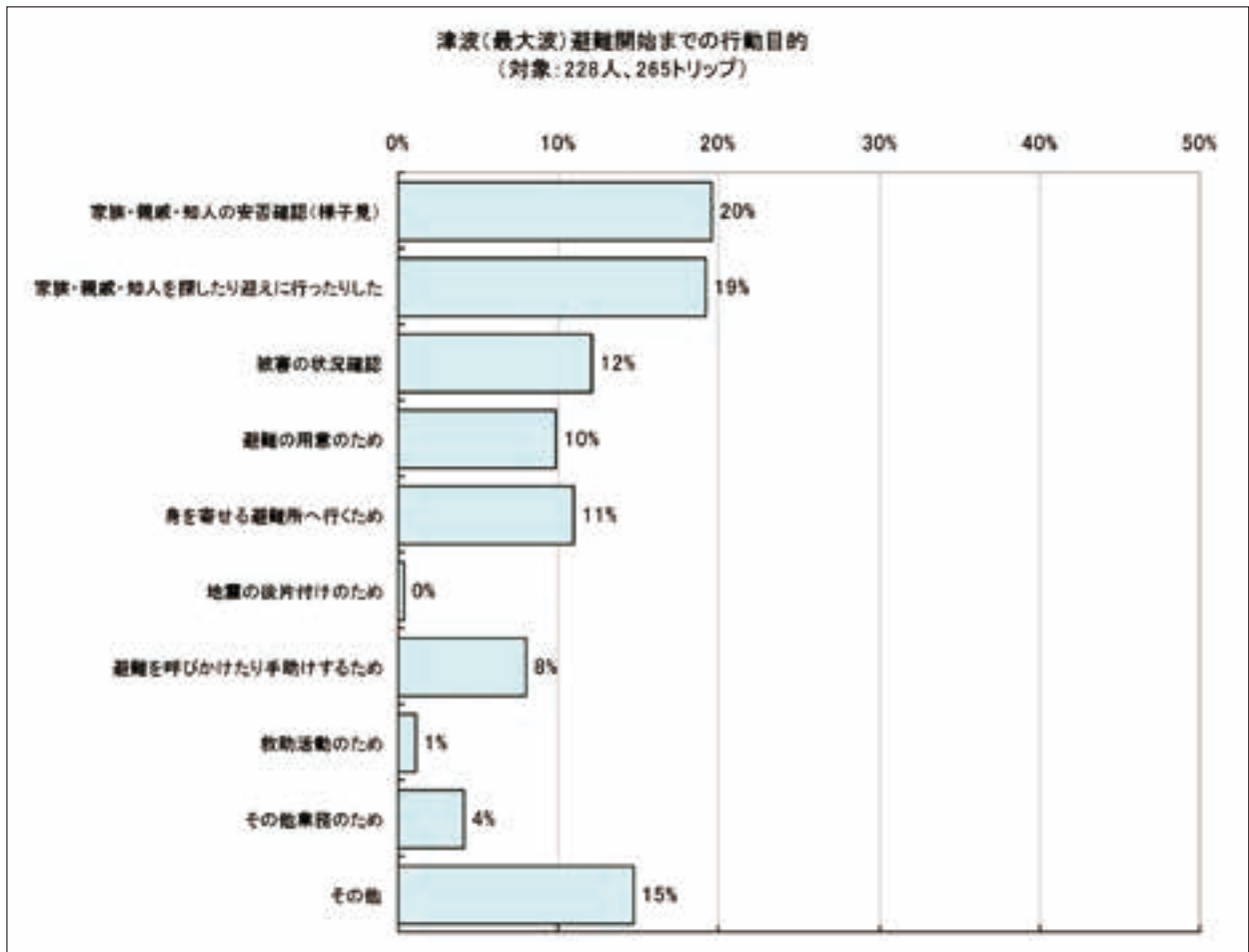
➤ 地震が発生してから津波が来る前に避難行動を開始した人は全体の約63%であった。



※3区分の詳細が不明なため、ここでは比較を示さない。

### ③津波到達までの行動分布（目的）

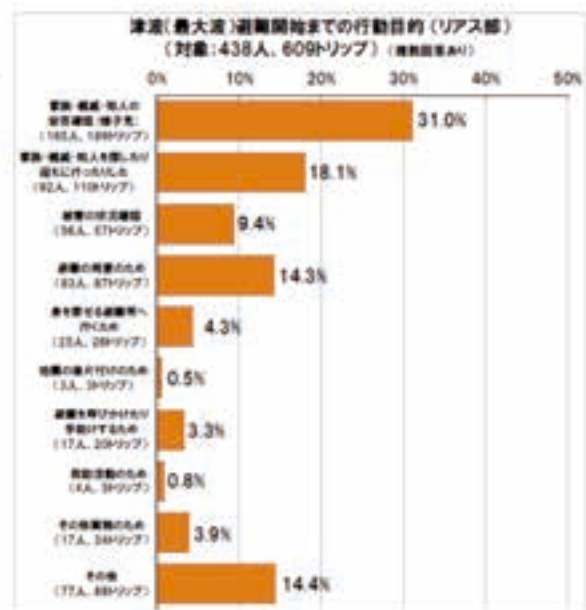
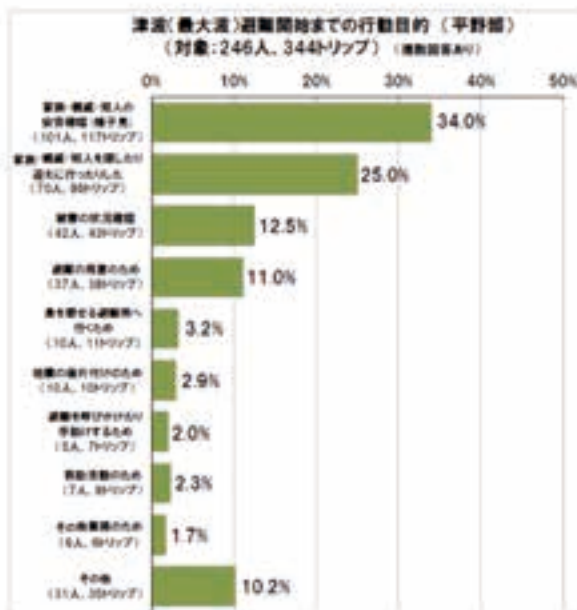
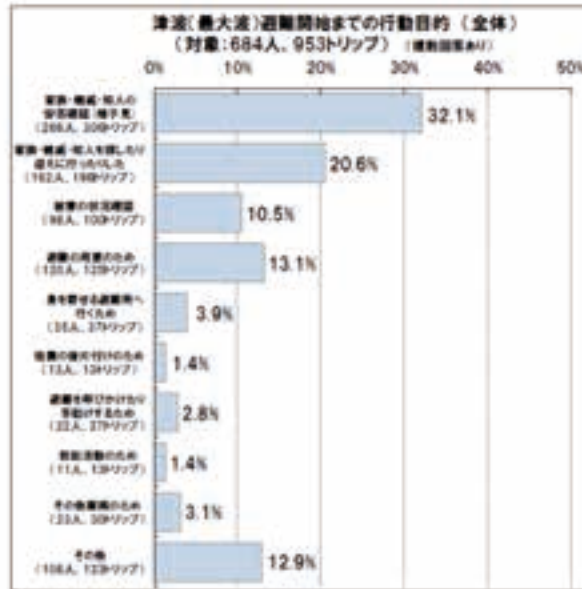
- 津波到達までの行動としては、「家族・親戚・知人の安否確認（様子見）」が20%、「家族・親戚・知人を探したり迎えに行ったりした」が19%と高い。
- 一方で、「身を寄せる避難所へ行くため」が11%、「避難の用意のため」が10%となっている。
- 被災6県の集計より、「身を寄せる避難所へ行くため」「避難を呼びかけたり手助けするため」の割合が高い一方で、「家族・親戚・知人の安否確認（様子見）」の割合は低い。



■参考：東日本大震災の津波被災現況調査結果（第3次報告）

～津波からの避難実態調査結果（速報）～〔国土交通省：H23.12〕

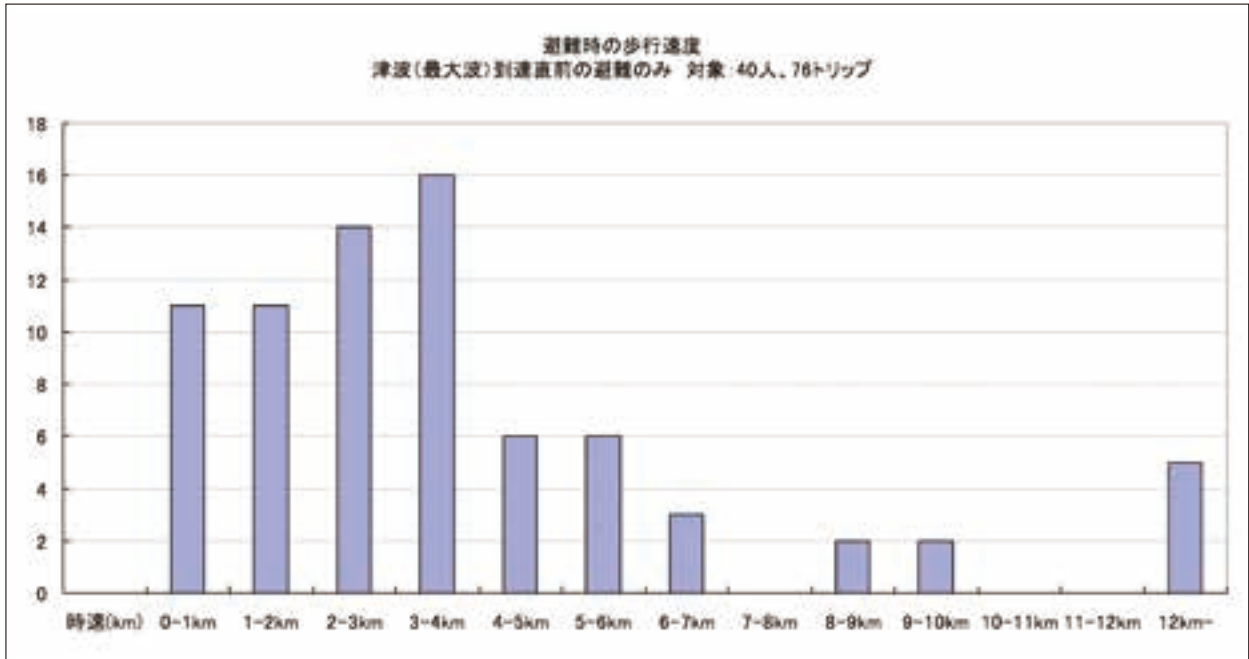
➤ 津波からの避難行動以前の行動目的は、家族・知人・友人等の安否確認のためが約32%で最も多い。



#### ④避難時の歩行速度

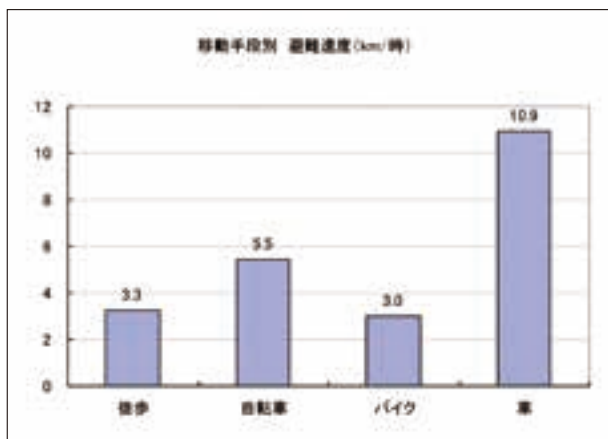
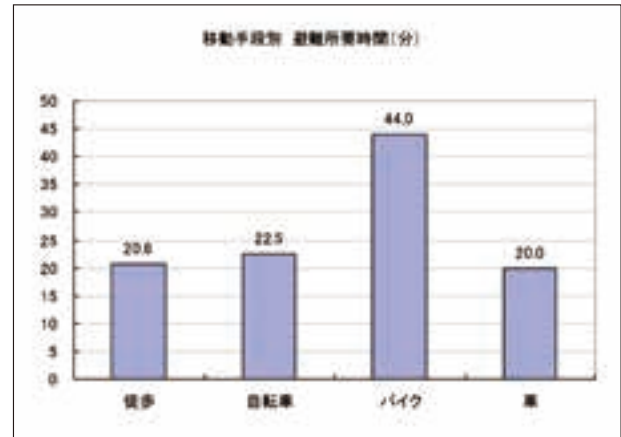
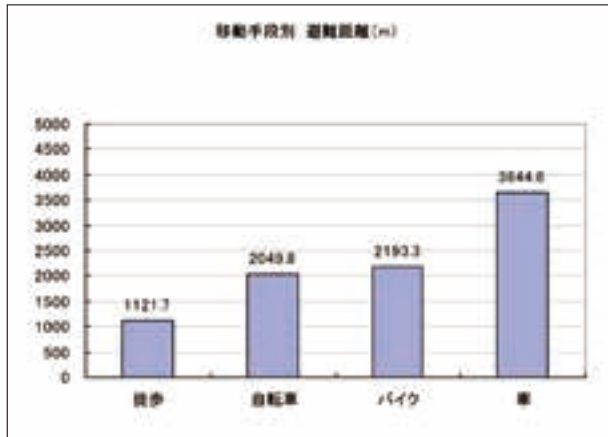
○津波到達直前の避難のみで避難時の歩行速度をみると、時速2～4km/h（0.55～1.11m/s）のトリップが多くなっている。

○なお、平均歩行速度は、後述の「⑤避難時の避難速度（交通手段別）」に示している。



⑤-1 避難時の避難速度（交通手段別：全数）

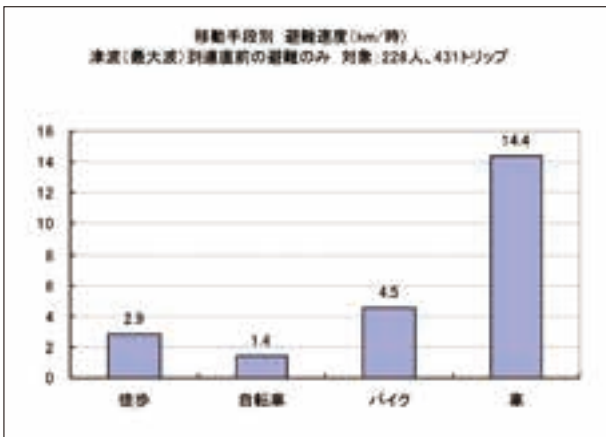
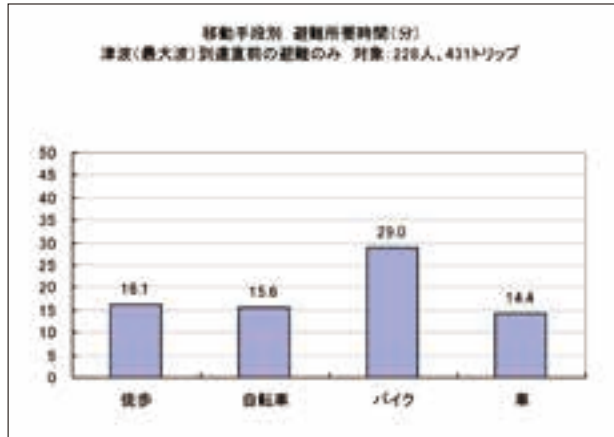
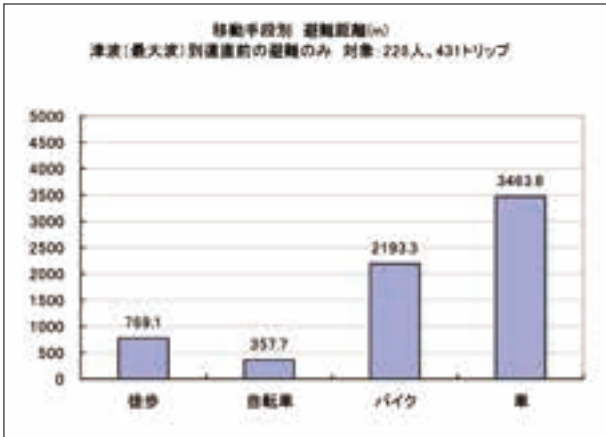
- 移動距離をみると、徒歩で約1.1km、自転車、バイクで約2km、自動車で約3.6kmとなっている。
- 所要時間をみると、徒歩、自転車、車で約20分となっており、バイクは、それらの倍の約40分となっている。
- 移動速度をみると、徒歩で約3.3km/h (0.9m/s)、自転車で約5.5km/h (1.5m/s)、車で約10.9km/h (3.0m/s) となっており、バイクは、約3.0km/h (0.8m/s) となっている。



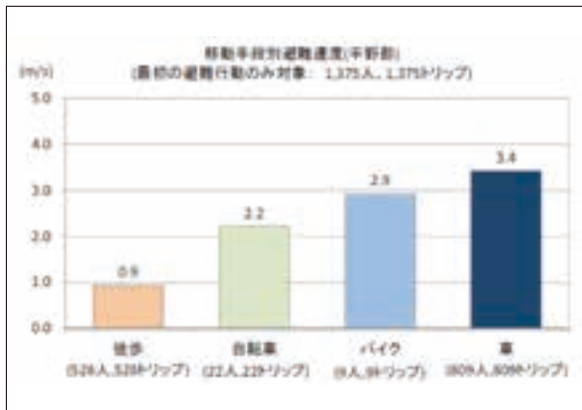


⑤-2 避難時の避難速度（交通手段別：津波到達直前の避難のみ）

- 津波到達直前の避難のみを対象に、移動距離をみると、徒歩で約0.77km、自転車約0.36km、バイクで約2.2km、自動車約3.5kmとなっている。
- 所要時間をみると、徒歩、自転車、車で約15分となっており、バイクは、それらの倍の約30分となっている。
- 移動速度をみると、徒歩で約2.9km/h (0.8m/s)、自転車約1.4km/h (0.4m/s)、車で約14.4km/h (4.0m/s) となっており、バイクは、約4.5km/h (1.3m/s) となっている。
- 徒歩について、被災6県の集計と比較すると、避難距離は250m程度、避難所要時間も5分程度長いものの、移動速度に差はない。



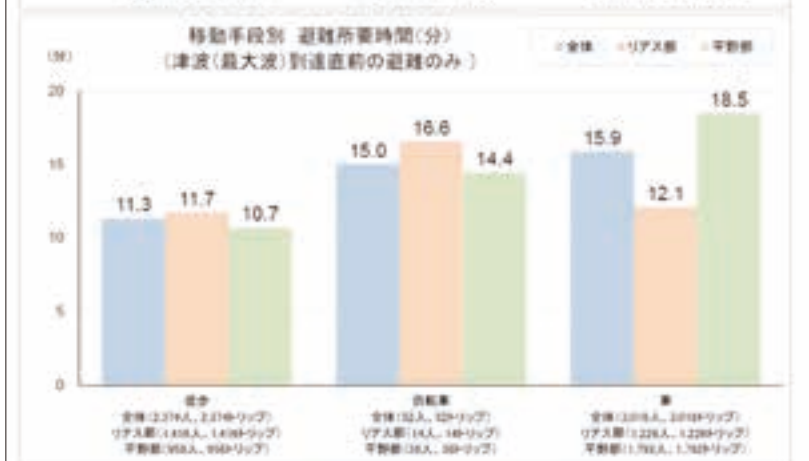
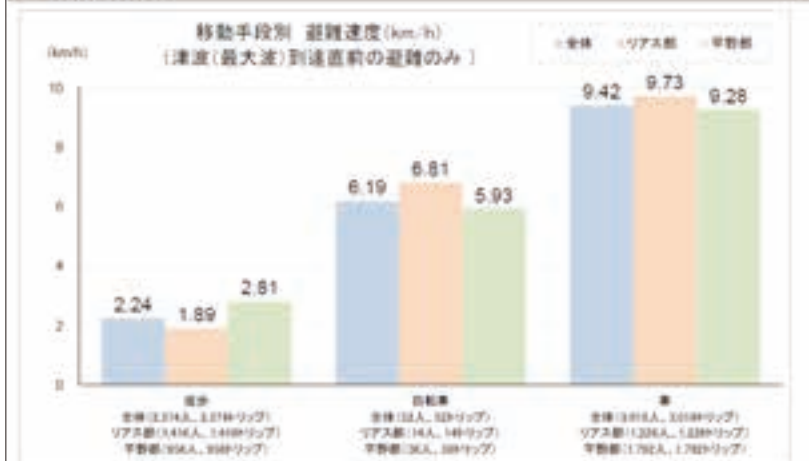
■参考：津波避難のための施設整備指針（宮城県：H24.3）



- 避難速度
  - 歩行速度：1.0m/s (≒3.6km/h)
  - 歩行速度が遅い方：0.5m/s (≒1.8km/h)
  - 自動車：3.0m/s (≒10.8km/h)
- 避難距離（徒歩）
  - 最長500m

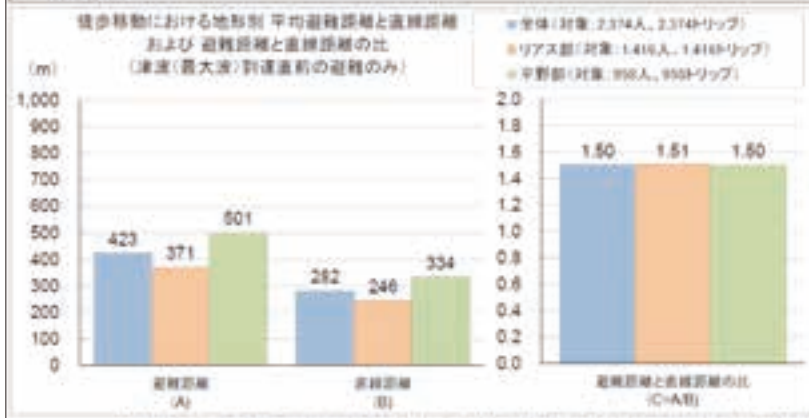
■津波避難実態調査「津波避難を想定した避難路、避難施設の配置及び避難誘導について（改訂版）」  
 （国土交通省：H24.12）

- 津波到達前に避難を開始した人（5,524人）の移動手段別の平均避難速度は「徒歩」2.24km/h、「自転車」6.19km/h、「車」9.42km/hであった。
- 「徒歩」の平均避難速度をみると、平野部が2.51km/hであったが、リアス部では1.89km/hであった。
- また、全体の平均避難所要時間をみると、「徒歩」11.3分、「自転車」15.0分、「車」15.9分であった。地形別にみると、「車」の平均避難所要時間は、リアス部では12.1分であり、平野部では、18.5分と6分の差があった。



※分析対象：津波到達前に避難を開始した人（①-1、②-2：5,524人）の内、徒歩、自転車、自動車で避難した人（5,444人）

※実際に歩いた「避難距離」と直線距離の比は、「全体」が1.50、「平野部」が1.50、「リアス部」が1.51であった。



※分析対象：津波到達前に避難を開始した人（①-1、②-2：5,524人）の内、徒歩で避難した人（2,374人）

※巨理町は平野部

### ⑥避難時の平均歩行距離

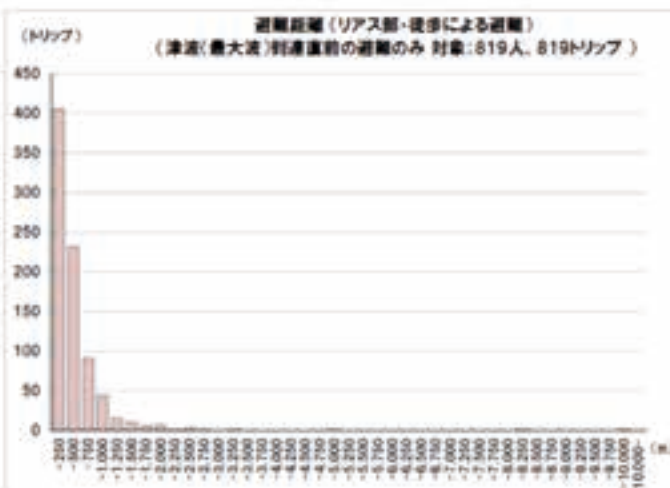
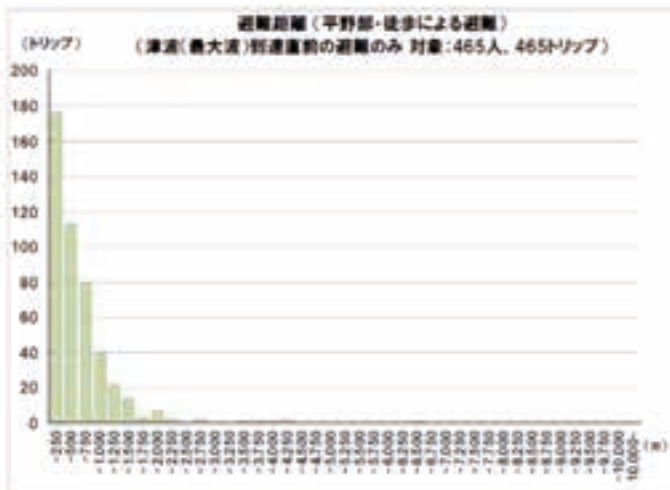
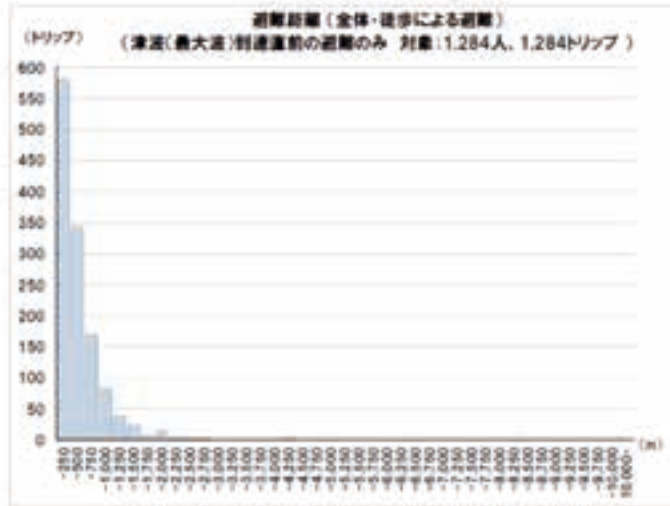
○津波到達直前の避難のみを対象に、徒歩による移動距離をみると、⑤の結果からは、徒歩で約0.77kmとなっているが、250m未満のトリップが大半を占めている。

○しかし、500m以内の移動者の割合は67%であり、被災6県の集計よりわずかに低い。



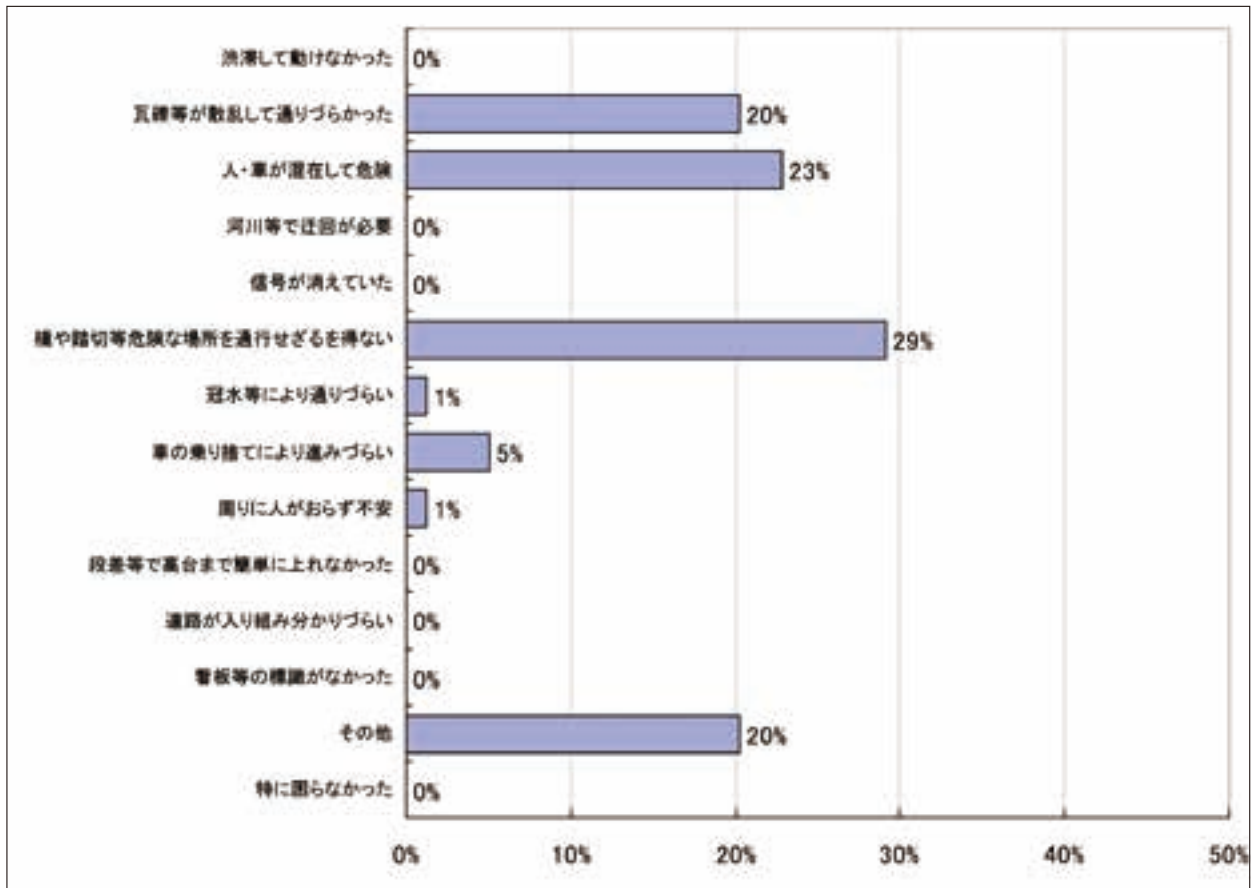
■参考：東日本大震災の津波被災現況調査結果（第3次報告）  
 ～津波からの避難実態調査結果（速報）～〔国土交通省：H23.12〕

➤ 避難距離分布に関して、徒歩による避難者の72%が500m以内の移動であった。

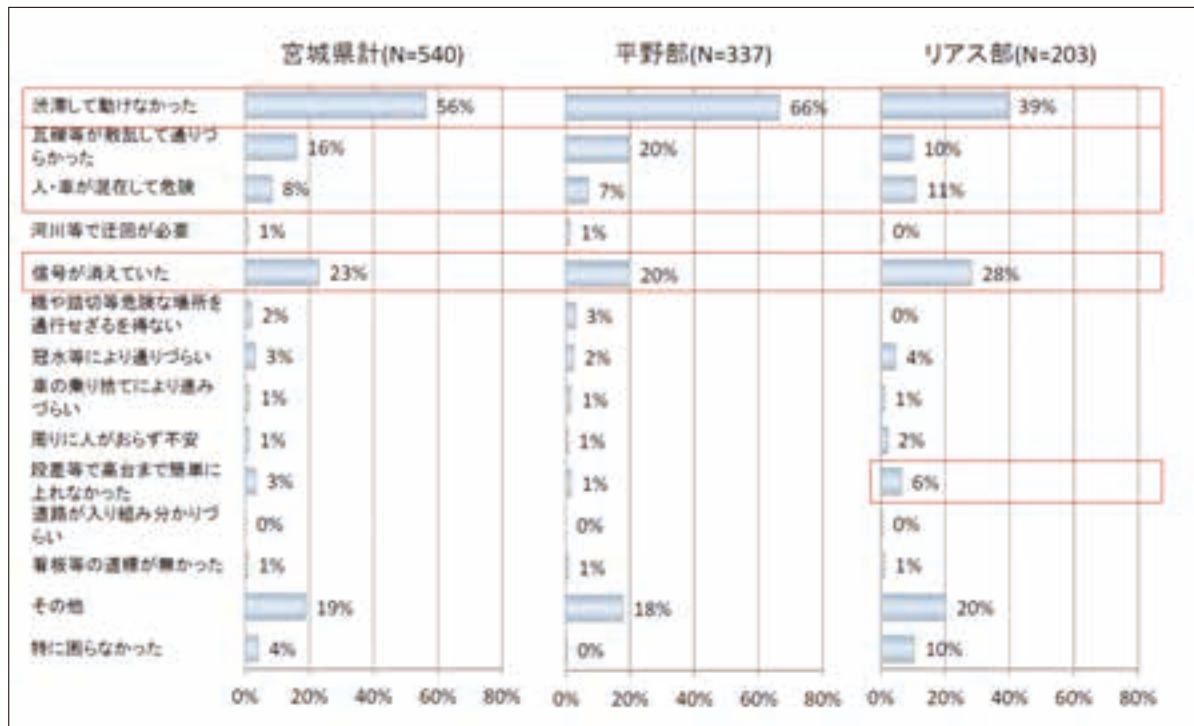


### 3 避難路の問題点

- 避難路の問題点として、ヒアリングで指摘されていることを集約すると、大きく3つに区分される。
- それぞれ、「橋や踏切等危険な場所を通行せざるを得なかった」が約29%、「人・車が混在して危険」が約23%、「がれき等が散乱して通りづらかった」が約20%を占めている。
- 宮城県の集計と比較すると、亶理町では「橋や踏切等危険な場所を通行せざるを得なかった」が非常に高い割合を示している。
- また、亶理町内で「渋滞して動けなかった」ことや「信号が消えたいた」ことがなかったため、宮城県の集計で第3位の「がれき等が散乱して通りづらかった」、第4位の「人・車が混在して危険」が高い割合になったと考えられる。

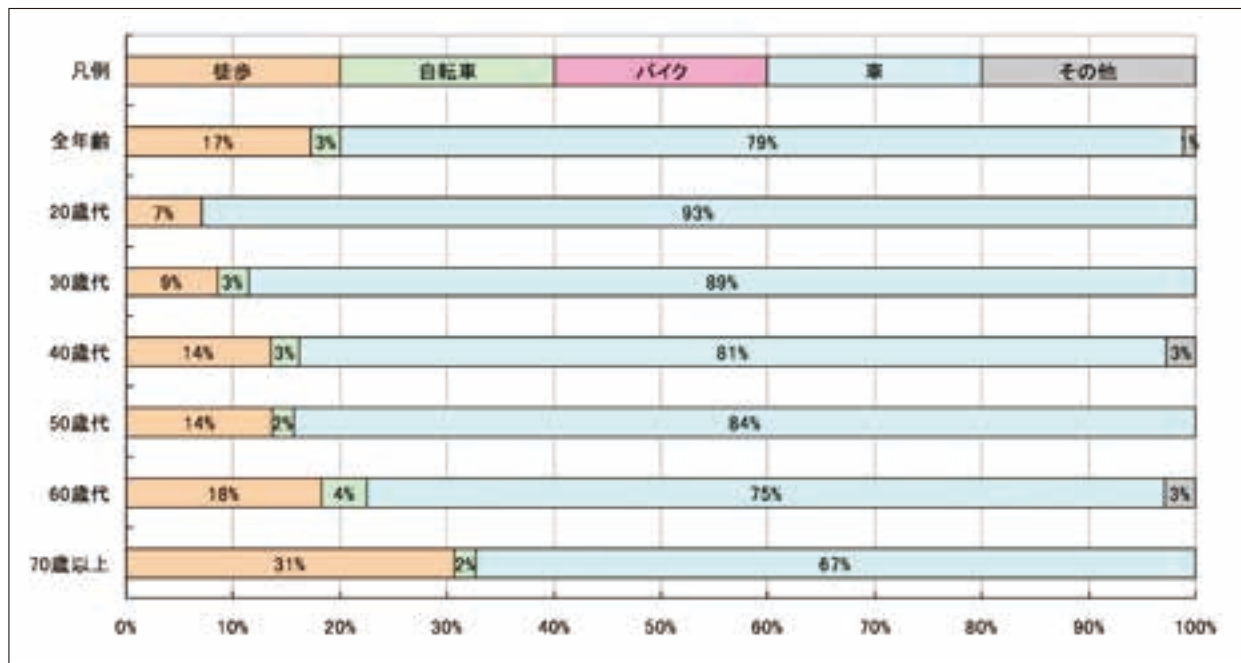


■参考：津波避難のための施設整備指針（宮城県：H24.3）

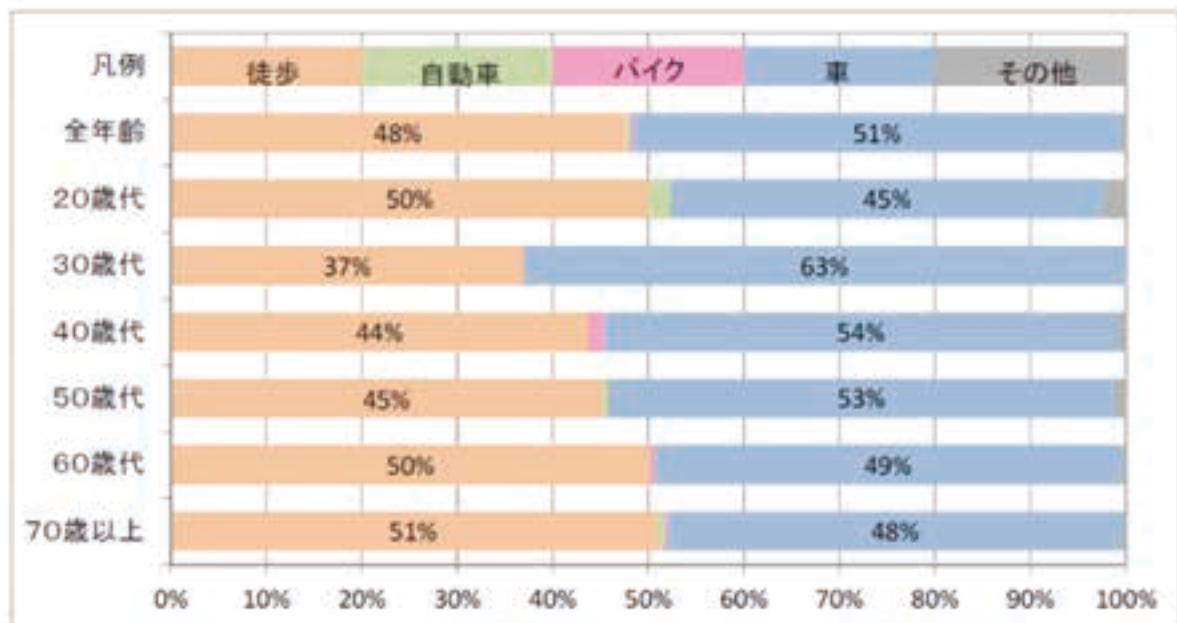
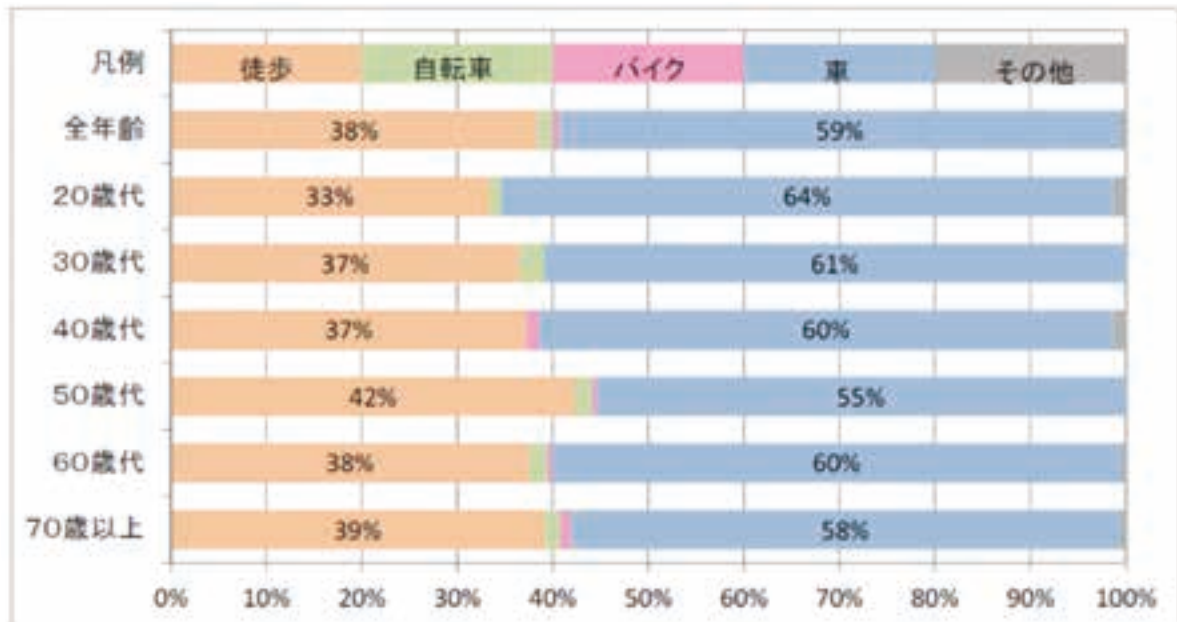


## 4 避難時の交通手段

- 避難時の交通手段としては、「車」が最も多く79%を占めており、次いで「徒歩」が17%を占めている。
- 年齢が上がるにつれて、「徒歩」での避難の割合が上昇する。
- 宮城県の集計と比較すると、「車」での避難が20ポイント以上多い。



■参考：津波避難のための施設整備指針（宮城県：H24.3）



※上：平野部 下：リアス部



## 5 渋滞指摘箇所

- ヒアリングにて、渋滞箇所として指摘された区間（青ライン）や交差点（赤丸）は下図のようである。
- 国道6号の亶理町役場周辺より以北（仙台市より）の区間と亶理町中泉の交差点、県道塩釜亶理線と荒浜地区内の町道の区間、亶理町中央工業団地付近の交差点などが指摘されている。

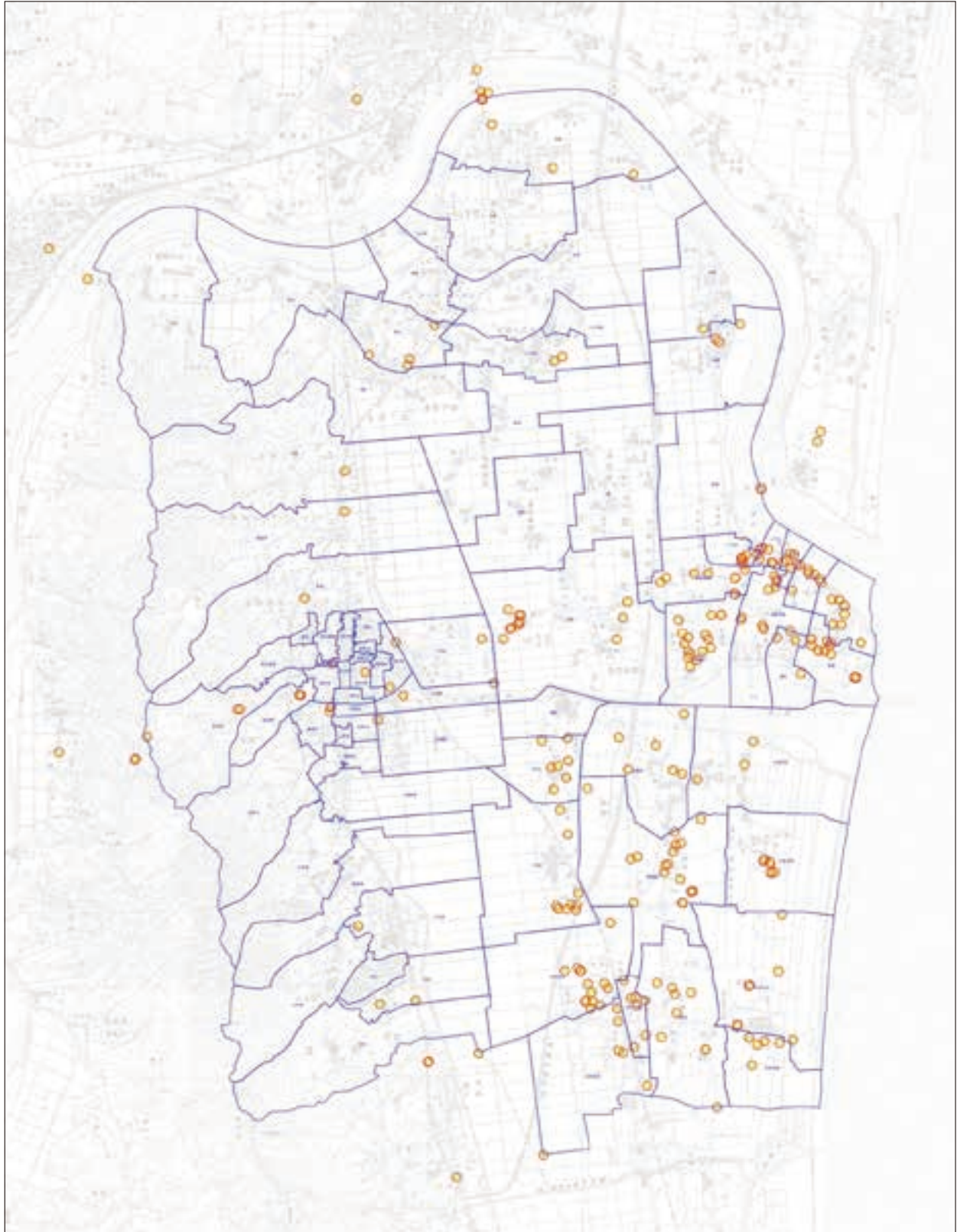
### ■渋滞指摘箇所位置図



## 6 震災時の居住地別集計

○ヒアリングにて、避難時に起点となった場所をプロットすると、荒浜地区や吉田東部地区から避難した方が多いことがわかる。

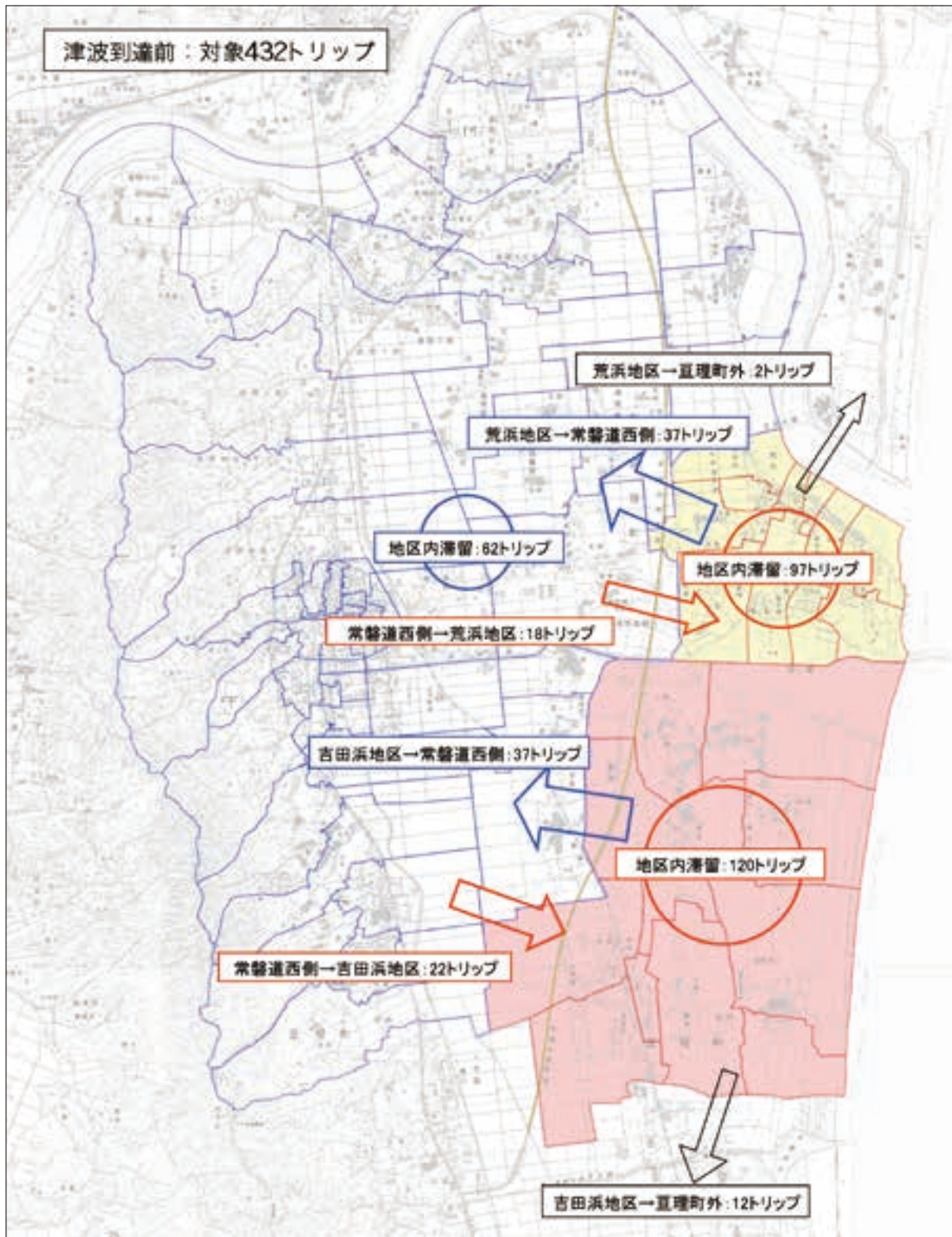
### ■避難者の避難時起点箇所位置図



## 7 避難に関する流動図

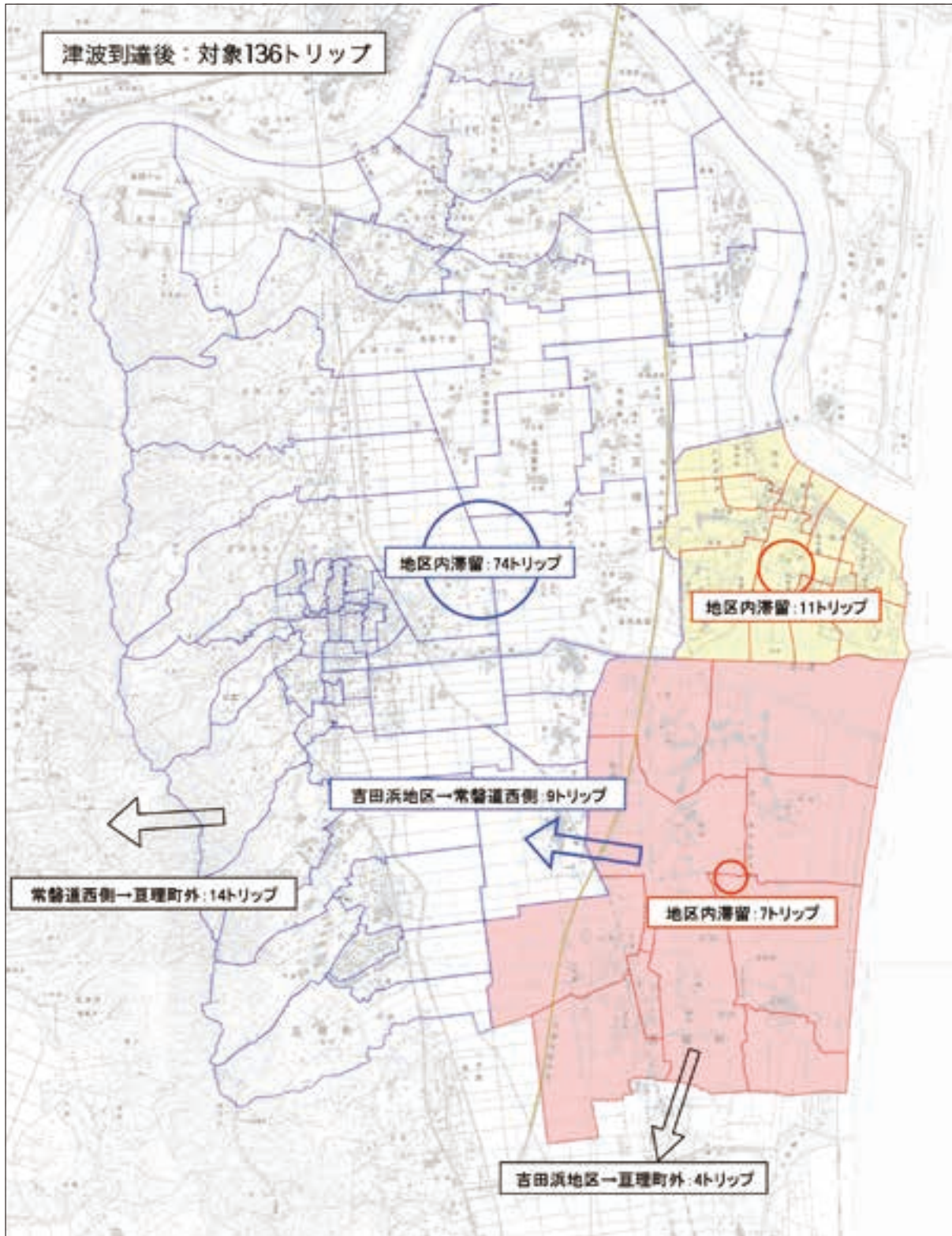
- 津波到達前の避難者の行動では、荒浜地区、吉田東部地区とも地区内滞留が最も多く、地区外、常磐道西側に移動したのは地区内滞留の1/3～1/4にとどまっている。
- わずかではあるが、常磐道西側から荒浜地区、吉田東部地区に移動した行動もみうけられる。

### ■避難者の流動（トリップ）図（津波到達前）



○津波到達後の避難者の行動では、常磐道西側における地区内滞留が最も多い。その一方で、荒浜地区や吉田東部地区では地区内滞留もみられる。

■避難者の流動（トリップ）図（津波到達後）





## 第5章

---

### 3.11から生き延びて ～あの日そして今、未来へ～





亘理町社会福祉協議会職員  
(災害ボランティアセンター長)  
佐藤 寛子さん

### 震災当日の夕方、はじめて 亘理に津波がきていたことを知った。

3月11日に緊急地震速報が鳴った時は、社会福祉協議会の事務所で職員と仕事をしていましたが、すぐに外に出ました。そしたらもうすごい揺れで、頭の中は真っ白。普通だったら車のエンジンをかけてラジオを付けるとかするんですが、誰もやりませんでしたね…。また「津波がくるかもしれない」という思いも全然なく…。防災無線から大津波警報が聞こえましたが、正直「そんなに?」と思っていました。

結局その後2回目の揺れがおさまった時に、一度みんな自宅に戻ろうということになり、私を含め、職場のみんなもそれぞれ家に戻りました。もちろん津波がくるなんて思っていないので、家が海の方にある職員も同様。結局職員はまたすぐ事務所に戻ってきたのでみんな無事でしたが、残念ながら家族が津波で亡くなったケースはありました。

我が家は事務所のすぐ近くなので、一度戻って家の前にいた当時中学2年生だった娘と友達を連れて戻り、その日は事務所の前にテントを張って泊まりました。結局亘理町に津波がきて大変なことになっていることが分かったのは夕方。テントを張り発電機を回して、アナログの小さいテレビをつないで初めて見たのが、閑上に津波がきている映像。荒浜の職員が多いので、その時はもうみんな無言でした。

### はじめはできることが少なすぎて 自分たちの活動に疑問を持ったことも。

社協としては、震災後すぐに公民館の車庫を利用して相談窓口のような形で、職員が交代で住民の方に対応していました。でも当時はガソリンもなく、住民の方もすぐにボランティアのことが頭に浮かぶはずもないので、できたことは給水所の場所を教えたり、家族の避難場所を一緒に探したり…。とにかくできることが少なすぎて、「いる意味」があるのかな…と思いながら過ごしていました。

その後、実際に災害ボランティアセンターを立ち上げたのは3月19日。最初は町にどんどん入ってくる物資の仕分けが主な仕事でした。あとはお店に並ぶことができない高齢者に下着やオムツを届ける仕事も。震災後、結局子供たちはそのまま春休みになってしまったので、町内の中学生、高校生、大学生など、かなりの人数の子供たちが手伝ってくれて。今まで社会福祉協議会なんて知らない子たちばかりだったと思いますが、それは本当に感動でした。

スタートはそんな感じで子供たちを含む町内、県内の方にボランティアをお願いしていましたが、3月24日からは県外募集をかけました。もちろん今までの例で言うと、ボランティアで色々な方が入ってきて問題が起きることも想定されましたが、今回は被害が広域で亘理町以外にもボランティアを必要としている地域が多く、県内だけでは十分ではなかったため、局長にお願いしての県外募集スタートとなりました。

### 大切にしたのは、コミュニケーションと 自分以外の人の意見に耳を傾けること。

初めての災害ボランティアセンターの運営でしたが、わりとうまく運営できた方なのかなと思います。それはもちろん私たちだけの力ではなく、町の力が一番大きいところだと思います。役場の方も思った以上に柔軟でした。もっ





と「これはダメ」「ルールに則って」と言われると思っていましたが、新人の役場の方をボランティアセンターに配置してくれたことは心強かったし、「ボランティアさんお願いしていい？」と気軽に言ってもらえたこともありがたかった。私たちとしては頼まれることはあてにされているということなので、ものすごくありがたいですね。

また浸水していないエリアの住民の方も、高齢の方は「自分は活動できないから…」とボランティアさんに差し入れを下さったり、町内の商店や病院の方はボランティアさんの宿泊所として一部を提供して下さったり。街全体がボランティアさんを受け入れる体制になっていたような気がします。

それでもやはり、災害ボランティアセンターはみんなの気持ちが一つになっていないとまとまりません。ボランティアさんも色々な方がいらっしゃるの、大事なのはコミュニケーションを取ること。もめてもいいからひたすら話し合っ決めて、決めた、「黙っていても分かるでしょ」ではなく互いにコミュニケーションを取ることによってチームワークを良くしていきました。私自身震災前までは一人で仕事を担当することが多く、震災後にはじめてチームで仕事をするようになりました。そうすると私の思いだけが正しいわけではありません。ボランティアに関わる人の数だけ仕事の考え方があるので、みんなで話し合っ一つの目標に向かっていくということは、難しいことですがやりがいにつながるし、これからもつながります。

もちろん、のべ3万2千人弱のボランティアを受け入れたので、運営がうまくいかず注意されたこともありました。運営の中心にいると見えないこともあるし、外部から来た方の方が見える部分もある。ボランティアさんからの指摘をすぐに生かすようになってからは、ボランティアさんとの関係も良くなり、ボランティアセンターの運営もスムーズになりました。

### 「亘理に住んでいて良かった」 「亘理に戻りたい」と思われる支援を。

災害ボランティアセンターの活動は2011年8月13日で終了。その後は仮設住宅ができてきたので生活支援活動に移行し、9月からは生活支援員を雇用して仮設住宅の個別訪問などを始めました。

最初は色々な団体の方が仮設住宅の支援に出入りされていたので、住民のみなさんも気丈に振る舞っていて、表面上のお付き合いという感じでしたが信頼関係ができていくにつれ、話していただく内容も仮設住宅への不満から、震災当時の状況や気持ち、家庭内の状況や悩み、辛いこと、これからの生活のことなどに変化。もちろん聞いたからと言って解決できるとは限らないし、力になれているのかは分かりませんが、言ってくれるようになったことは大きな成果だと思います。とにかく聞くことでそこから何かにつなげていければ…と思い、常にアンテナを張って回っていますね。また今は仮設住宅の個別訪問がメインですが、今年からはみなし仮設の方を中心に日帰りのバスツアーを企画したり、福島から避難してきている方が集まれる場所の提供にも取り組んでいく予定です。

支援活動を進める中で分かってきたのは、震災前は当たり前できていた「人と会う」「お茶飲みをする」など、それができただけでもすごく喜ばれること。今はバラバラになってしまっている荒浜や吉田の

方は特に結びつきが強いので、そういう方々がまた集まれる場を作っていくにはいけないな、とも思っています。

当面の目標は「やっぱり亘理に住んでいて良かった」、「また亘理に戻りたい」と思ってもらえるように、町と一緒に地域を作っていくこと。たくさんの方が亡くなられた中でも、お年寄りだから仕方ないではなく、少しでも長く、元気に、この地で生きていけるような支援をしていきたいと思っています。





ボランティア参加者  
塚 邊 綾 子 さん

### 「津波は来ない」という認識で まず荒浜の家に戻ってしまった。

震災当時は、4月から介護の仕事をしようと思っていたので、前職を2月いっぱい辞めて無職の状態でした。地震が起きた時は、ちょうど下の子供を連れて街中の病院に行っていて…。余震もあって子供も泣いてしまったので、すぐに自宅に戻ってしまったんです。防災無線の大津波警報は聞こえていましたが、宮城県沖地震が起きた時に津波が来なかったので、ちょっと高を括ってしまいましたね。

家に戻った時には庭先まで津波が来ていましたが、家屋までは来ませんでした。でも周りは壊滅状態。小学生の子供は荒浜小学校にいたので迎えにも行けず、一晩別々に過ごすことになりました。津波が到達するまでは1時間近くあったので、まっすぐ小学校に迎えに行けば、上の子も地震当日から一緒に過ごせたんですけどね…。

翌日、水は引いていませんでしたが、土手が歩けたので荒浜小学校に子供を迎えに行き、逢隈小学校までバスで避難をして、そこから1週間ぐらい避難生活を送りました。

### 〴〵できること、〴〵できないこと、 その境目が難しいボランティアの仕事。

自宅が津波被害を受けなかったとは言え、二十歳まで過ごした地区は全然違う風景になっていたの、やはりショックが大きかったです。当然親戚の家屋も被害を受けていて…。まずはその片付けに追われました。その後御舅さんも、田んぼが被災して仕事がなくなってしまって家にいたので、子供はいたけど私はボランティアに参加し始めました。それが4月の中旬頃からです。

担当したのは電話対応のお手伝い。ボランティアに来たいという方の受付や、ボランティアさんを派遣して欲しいという方への対応が主な仕事。最初はがれきの撤去など力仕事をする予定で参加したので「これでボランティアになっているのだろうか?」と思いながら業務にあたっていました。

業務の中ですごく困ったのが、ボランティアさんを派遣できる仕事とできない仕事があったこと。自分ではやってあげたい気持ちがあるけど、ボランティアさんの安全も守らなくてはいけない…。いちご農家のハウスや畑は、ボランティアセンターでは対応できなかったし、下水を流すための側溝掃除も限界があって。その辺りの気持ちのコントロールがうまくいきませんでした。知り合いからの電話だとなおさらですよ。

それでもだんだんボランティアさんでもできることが増えてきて。例えば最初は建築診断で危険・注意と診断された家屋の片付けはできませんでしたが、徐々にまわりの大きながれきが撤去された6・7月あたりからは、現地を見て判断した上で、危険・注意の家屋でも中に入っての片付けができるようになりました。

また、電話受付をしていると本当にありがたい言葉もいただいて…。「私、ボランティアに参加しても大丈夫かしら? 手伝えるかしら?」と言われると、できることと



できないことがあるかもしれないけど、その気持ちだけでも本当に嬉しかったです。

## 同じ経験をしていても どう声を掛けたら良いか分からない。

ボランティアセンター自体は2011年8月の中旬で閉鎖。短いと言えば短かったかもしれませんが、そこですべてが終わったわけではありません。9月からは仮設住宅を訪問する支援員として活動してきました。私は担当の仮設住宅の一人暮らしや高齢者の二人暮らし、日中お一人の方を中心に毎日訪問してお声掛けをして、少し心配だなと思ったら役場の福祉課やケアマネージャーさんに連絡をしています。

でも最初は震災で親戚をたくさん亡くされて笑顔もなくしている方々に、どうやって踏み込んで行ったら良いか悩む時も…。私も親戚を亡くしていて気持ちは分かるんですが、やはりどう声を掛けて良いのか分からないんですね。

また、仮設住宅の中には荒浜地区と吉田地区の方が混合して入居しているところもあるので、隣近所が分からない人も多くいました。そうすると、集会所にもなかなか出てこなかったり、支援物資をめぐって少しギスギスすることもあったんです。でも震災から1年たって、感情的にはみなさん温和になりましたね。

ただ、その頃から別な心配事が出てきました。歩くスペースが少なくて、歩けなくなる方が多くなったんです。もちろん震災当時も具合が悪い方は多かったんですが、問題視されている生活不活発病、エコノミー症候群や頭痛を訴える人など、また違う症状が出始めたような気がします。

## どうなるかは分からないけど いつまでも荒浜に携わっていききたい。

仮設住宅をまわっていると、最近聞かれるのは「楽しみたい」という声。例え短い時間でも、その場だけ、その時だけでも笑いたいと思っている方がいるんです。ただ、それは集会所などに出てくる方の要望。仮設住宅にもいろいろな方がいるので、無理に誘ってもなかなか出てきてくれない方もいます。その方とどうお付き合いをしていけば良いか、というのが今の課題ですね。だんだんと一人暮らしに慣れてきても、内に秘めているものまでは分からないので…。

実はお年寄りに限らず、若い方も眠れなくて安定剤を飲んでいらっしゃる方が多いんです。それを知ってからは、訪問はしなくても、お会いしたらみなさんに声を掛けるようにしていますね。

この先、正直この町がどうなっていくのかは分かりません。ただ、まだ仮設住宅があるので、今は私にできる支援員を続けていきたいですね。また荒浜小学校も前のところに戻るので、いつまでも荒浜に携わっていききたいなと思います。





前長瀨小学校校長  
武藤育子さん

### 宮城県沖地震に備えた引き渡し訓練を生かし すぐに保護者への引き渡しを開始。

3月11日は卒業式の一週間前で全校一斉15時下校の予定だったので、地震が発生した時はちょうど下校直前の時間帯でした。欠席した児童1名を除いた全校児童が学校にいる状態。私はいつもと違う、激しく長い揺れに心配になり、全部の教室をダァッとまわりました。先生がついている教室はみんな机の下にもぐってしっかり避難、教室に残っていた数人の子供たちには「大丈夫だからもう少ししゃがんで！」と声をかけ、2階に上がって校庭を確認すると、子供たちは校木のミマツの下あたりにしゃがんでいました。揺れは相当なものでしたが、地震自体の被害はほとんどなし。倒れた物もありませんでした。でもその後、海岸から2km離れた長瀨小学校にも津波が到達したのです。

大津波警報が発令されたことは防災無線で聞いていましたが、ちょうど1年前のチリ地震津波で長瀨小学校が避難所になった時、大津波警報が発令されたのにも関わらずまったく津波がこなくて…。だから今回も避難所に指定されたこの小学校まで津波がくるとは思いませんでした。

ただ、長瀨小学校では宮城県沖地震に備えて毎年保護者への引き渡し訓練を行っていたので、その訓練通り、15時の下校時間を待たずに迎えに来た保護者への引き渡しを開始。207名の子供を引き渡し、保護者が来られなかった残りの56名と先生たちで、体育館の方に移動しました。そしておそらく16時頃だったと思いますが、消防団の方がずぶ濡れでやってきたと思ったら、体育館のまわりに津波がバーッときて、避難してきた方の車も流され、一面海のようになってしまったんです。幸い、体育館は扉のところから水が染み出る程度で、浸水は免れました。

その後一晩はなんとか体育館で過ごし、翌日は内陸の亘理高等学校へ移動。車が通れるところは軽トラックの荷台に乗り、あとは少し高くなっている線路の上を歩いて、最後に町のバスに乗って移動しました。ただ、お年寄りや体が不自由な方、おなか大きい方もいたので、町に交渉してボートを出してもらい途中歩かなくて済むようにしてもらったり…。そうして夕方までには無事全員亘理高等学校に避難が完了しました。

### 自宅を職員室にして、 子供たちの安否確認をした一週間。

亘理高等学校に避難してからは、すぐに長瀨小学校の職員室が必要だったので、体育館の真ん中をお借りして打ち合わせなどを行っていました。その後だんだんと避難してくる方が増えてきたので、高台にある我が家を職員室にできるよう町教委に交渉し、緊急時ということで配慮していただきました。

津波がくる前に保護者に引き渡した207



名の子供たちの安否が分からず、始めは各避難所に行き、その名簿を見ながら確認していましたが、最後は電話での安否確認が必要だったので、電話が自由に使える我が家がちょうど良かったんです。ほとんど全員の自宅が津波の被害に遭っている状態だったので、もう心配で。ちょうど一週間目に子供全員の無事が確認できたんですが、お母さんが亡くなった子やおじいちゃんおばあちゃんが亡くなった子もいて…。

その後3月いっぱい自宅を職員室にして、4月からは学校再開の場所が吉田中学校に決まっていたので、そちらの保健室を職員室として使わせていただきました。

3月31日には卒業式を挙行。全校児童や保護者のほとんどが集まり、最初に卒業式、次に修了式、最後に離任式を行いました。いつもは厳粛な雰囲気の中での卒業式も、卒業証書を渡すと拍手が起きたりして、とても温かい雰囲気でした。なんだか子供たちも少し大人っぽくなっていましたね。実は卒業証書を入れていた金庫は津波で流されて扉が下になって倒れていたんですが、バーナーで焼き切って中身を取り出したら不思議なことに卒業証書だけはきれいで！ これは本当に先生たちも大喜びでした。

### 退職後は、緊急学校支援員や 支援物資のコーディネーターとして活動。

校長としての任期は2011年の3月31日まで。その後は緊急学校支援員として7月いっぱいお手伝いをしていました。でもやるのがものすごくいっぱいあったので、本当は1年間でも良かったかもしれません。

まず第一に公簿やスポーツテストの記録、歯科検診の記録の汚れを取ったり、書き直して新しくしたり、という大事な書類を復元する仕事がありました。また、子供たちの多くが住んでいる吉田小学校近くの仮設住宅から、学校が間借りしている吉田中学校までの引率も担当しました。2.5kmぐらいの道を1日2～3往復することもあり、健康には良かったです。その後6月頃にスクールバスを手配していただいてからは、バス停までの短い距離を送り迎えしていましたね。

さらに大きな仕事としては、支援物資のコーディネーターを担当しました。たとえば、スクール水着のサイズなどの希望を取って発注。その後品物をいただいて仕分けをして渡すところまでが仕事でした。こちらが必要としている物を、全国や海外からもたくさん支援していただき、大変ありがたかったです。子供たちもご家庭もすごく助かったと思います。子供たちはお礼の手紙をたくさん送ったようで。感謝の気持ちを育てるという意味で、いつもとは違う勉強になったと思います。

今は体調を崩して少しのんびりしていましたが、これからも子供たちに何らかの形で関わっていきたくです。登下校の時の見守り隊や、夏休みなどに子供たちの勉強のお世話とかができればいいなと考えています。

### 「自分の判断で高い所へ逃げる」という 津波に対しての防災教育が必要。

この震災を振り返ってみると、地域の方々がみなさん協力的だったなと思います。震災当日の日が暮れてきた頃、長瀬小学校の後ろの家におばあちゃんを取り残されていた時は、消防団の方が命がけで救助したり。後から聞いた話だと、消防団の方も始めは、統制が取れた活動ができなくて、各自で判断して行動してくれたようですね。本当に頭が下がります。

また長瀬小学校の体育館で一晩過ごしている時、真夜中にもう一度仙台港に10mの大津波が来たという

情報があって、念のためにギャラリーに避難してもらったんです。もう寝ている方々を起こしたのに、みなさん文句も言わず冷静に対応してくれました。子供たちも、こういう時は泣いたり騒いだりしちゃいけないという思いがあったのか、落ち着いていました。

さらに震災翌日、食べ物も何もない長瀬小学校に、おにぎりやバナナを町の方まで歩いて受け取りに行ってくださったのも地域の方々。本当に協力的で感心しました。

ただ、私たち自身は反省すべきこともあります。それは、子供たちの引き渡しをしたことが本当に正しかったのかということ。これまで、宮城県沖地震に対しての訓練はいろいろ行ってきましたが、津波に対しての避難訓練は行ってきませんでした。一番の反省点はそこです。

昨年、その反省を生かして長瀬小学校でも初めて津波に対する避難訓練を行いました。長瀬小学校の近くには高台がないので、津波警報が出た時は屋上に避難するという訓練。これまでは大地震があったら保護者が迎えに来ることになっていましたが、これからは、「迎えに来なくて良いのでそれぞれが安全な場所に避難する」ということを地域全体で徹底していく必要があります。私も後から知ったのですが、釜石



市の防災教育というものがあったんですね。それにならって、子供たちも津波がきた時、放課後や休みの日など、学校にいなかったとしても「それぞれ自分で判断して高い所へ逃げる」という防災教育を地域全体でやらなくてはいけないと感じています。



児童センター  
菊地由香さん

## 家族全員がばらばらの状態。 長女とは、連絡が取れなかった。

地震が起きた時私は、鳥屋崎にあるアセロラ園のハウスで農作業のお手伝いをしていました。

これまで経験したことのない揺れに、アセロラ園のご主人から「すぐに自宅に戻ったほうがいい。」と言って頂き、急いで荒浜漁港近くの自宅へと向かいました。あと少しで自宅というところまで来たとき、駆け寄って来た近所の方に「何で戻ってきた？家に誰がいるのか？津波が来るからすぐ逃げろ！」と言われました。その言葉に、自宅手前の道路に車を止め自宅まで走りました。道路には瓦が散乱していて玄関は激しい揺れのせいか全開になっていました。自宅にいるはずの次女と義母を大声で呼びながら家の中へ。家具や食器で足の踏み場の無い居間にいた次女と「おばあちゃんは？」「生協に買い物に行った」そんなやり取りをし、今度は義母を探す為生協に向かうことにしました。車に乗り、漁港を右に見ながら進む間も、ひび割れた道路から水が噴出しているのを見て、明らかに去年のチリ地震のときとは違うと感じました。「義母を早く見つけなければ…」とカーラジオに耳を傾けながら生協に向け車を走らせました。中島のガソリンスタンド辺りは、亘理方向に向かう車で渋滞が始まっていました。その時ラジオから「津波の高さは10メートル。すぐに避難してください」と流れてきました。「家を出るときは6メートルだった。」とっさにその高さがどれくらいなのか想像することが出来ませんでした。荒浜小学校からまだ帰宅していない息子の事が心配になりハンドルを握る手が震え始めたのを今でも鮮明に憶えています。次女に「おばあちゃんは生協だから津波の心配はないからUターンして小学校に行くから！」頭の中で「落ち着け！落ち着け！」と繰り返しながら小学校に向け運転をしました。亘理方面に向かう道路とは対照的に荒浜に向かう道路はとてもスムーズで、息子を連れて亘理に向かうとき渋滞だと津波に巻き込まれないだろうか考えると不安が増し、かなりのスピードで走ったように思います。小学校に着き先生に息子の引渡しをと話したところ、津波が来るので引渡しは出来ないとのこと。私と次女も校庭に車を置き小学校の3階へ。そこには、すでにたくさんの地域の人々が避難してきていました。体育館にいた人達も、津波が来るから校舎に上がるようにと言われたようで、あっという間に校舎の2階、3階は人で溢れました。3階の教室にいた私達に今度は「屋上に上がって下さい。」と指示がありました。廊下を見ると防災頭巾をかぶった子供達が先生に引率されながら階段を上るのが見えました。不安からか泣き声をあげる子の姿もありました。地域の人達も足早に階段を上ります。窓から見える阿武隈川の底が見えたのはこの時です。冷たい風の吹く屋上に上がり、次女も私も上着を持っておらず、いかに自分達が慌てて家を出てきたかを実感し体を寄せていました。どれほどの時間がたったのでしょうか？屋上東側にいる人達から声が上がり見るとはるか遠くから水しぶきを上げながら津波が近づいてくのが見えました。そのうち、遠くの家々が、鈍い音を立ててぶつかり、どんどん道路や田んぼに押し流されていきました。校庭もあっという間に海のようになっていて避難して来た人達の車は浮いたり、ひっくり



返って重なり、学校の西側のフェンスに引っかかっていました。これだけの津波が来るとは全く予想できませんでした。去年のチリ地震の時も避難勧告があり私達は10時間余り自宅を離れ名取方面に避難しましたが、多少の潮位の変化はあったものの、大事には至りませんでした。「今度も津波など来るはずはない。」と思ったのは、私だけではなかったと思います。津波の第1波・第2波を目の当たりにし、辺りが暗くなる頃私達は津波と余震の恐怖に不安を感じながら2・3階の教室に分かれて入りました。なかなか連絡がとれなかった主人と義母には、程なくお互いの安否確認が出来、主人にはメールで荒浜の状況と自宅はたぶん流されたと伝えましたが、長女からのメールは届くのにこちらからのメールは届いていないようで、「今から先生に荒浜に送ってもらうから」とメールが届きました。「荒浜は、津波に襲われ、ボートでもない限り来られない！仙台の安全な所にいなさい。いつかきっと会えるから、頑張りなさい。」とメールしました。結局3月11日の夜、私たち3人は荒浜小学校、義母と主人は亙理小学校、長女は先生に亙理に送ってもらい荒浜に向かったが浸水して先に進めず亙理中学校で1人一晩を過ごしました。

### 長期化を予測していなかったため 荒浜小学校は衛生的に危険な状況だった。

津波、余震、寒さ、停電、真っ暗な校舎内で様々な不安を抱え一晩を過ごし、翌朝教室から変わり果てた荒浜の町を見ました。小学校の周りには家の残骸が重なり、それとは対照的に荒浜海水浴場まで家や松林などの視界を遮るものは何もなく海が見えていました。私たちが避難した荒浜小学校には、約800人の人が避難していました。この状況に、ここでの避難生活が長期化するかもしれないということで、避難した人を行政区ごとに教室を分け責任者が決められ、名簿を作り、体調の悪い方、妊娠している方、薬が必要な方などの確認がされました。炊き出しのおにぎりやパンが届けられるまでの数時間、校長先生を中心に避難者の人数、状況の把握などスムーズに進められました。

ただ、誰もが「長期化」を予測していなかったため、避難者800人、断水の中、トイレをはじめ廊下も衛生的に危険な状況となっていました。乳児、幼児、高齢の方、妊婦さんも大勢いました。もし長期化していたらと思うとぞっとします。

その後、水が引き始めたということで昼前に阿武隈川の堤防に沿って陸路で逢隈小学校へ移動することが決定。

「次の津波が来るかもしれない…」という不安がある中での決定にパニックになる人がいることも想定し、いかに短時間に全員を無事避難させるかが話し合われました。子ども、高齢の方、体調の悪い方妊婦さんは、亙理大橋を超えた所まで歩き、そこからはバスによるピストン輸送。その他の健康な方は、歩いて逢隈小学校へ移動することになりました。

まずは、小学生、小さい子供たちが移動。体調の悪い方などは、消防団の方がおんぶをし、板を担架代わりにして移動。最後に健康な方が徒歩で逢隈小学校に向け出発しました。私は、自分達がいた教室の責任者となっていて、臨月を迎える妊婦さんがご家族を待って最後に出ることになり、私と次女は、ご家族と妊婦さんを送り出した後、校長先生、教頭先生、役場の方と一緒に学校内に残っている人がいないか確認をして荒浜小学校を出ました。倒れた本棚、散乱した本、水浸しの図書室をぬけ、泥だらけの体育館の中を通り加藤屋さんの前から堤防へ上がり逢隈小学校へ。試算では、全員が脱出するには8時間以上かかるのでは？と考えられていましたが、4時間後には、全員の脱出が無事完了していました。その日の夕方、主人が逢隈小学校まで迎えに来てくれて、長女も合流。バラバラだった家族がそろい、私達は、2ヶ月間



亘理小学校と逢隈小学校の避難所で過ごし、仮設住宅に入居しました。

## 心ケアを受け、心の中がすっきりした気がした。

主人は平日柴田町の会社で働き、週末刺し網漁に出る兼業でしたが、津波で船が陸に打ち上げられ修理の必要があったことに加え、東電の放射能問題もあり漁には出ていません。果たして海水に溶け込んだ放射能が人体にどれほどの影響を与えるのか分かりません。主人が漁に出て、魚を獲ることには大きな不安があります。放射能問題が人体に与える影響などが明確になり安全が確認され、また主人が荒浜沖で獲った魚を多くの方の食卓にあがる日がくれば…と願っています。

私が勤めていたアセロラ農園は、津波で大きな被害を受けた為、私は、職を失いました。避難所生活を送る中で、以前学童クラブに勤務していた時にお世話になった館長先生にお声を掛けて頂き、児童センターの臨時職員として働くことになりました。現在は、未就学の児童とお母さんに遊びの場を提供する子育て支援の仕事を通して自分の子育ての経験が少しでも育児に悩むお母さん達の助けになればと思っています。

震災後、我が家の子供達は、表面上はとても元気でした。長女は、昨年大学受験の年で、避難所での集団生活の中、受験勉強の時間がとれず不安な気持ちとあせりがあったはずでしたがマイペースに過ごし、次女は、中学生という一番難しい時期、家族のムードメーカーとして常に明るく、避難所の掃除ボランティアを進んで取り組んでいました。長男は、大好きなサッカーのユニフォームやボール、スパイクが流され、がれき置き場になってしまったグラウンドを見て沈んだのも束の間、避難所の友達と元気に遊んでいました。避難所生活の間、子供達の泣いている顔は一度も見たことはありません。震災当日のこともあまり口にしませんでした。私はと言うと、日々たくさん不安に押しつぶされそうでした。でも、「家族の前では泣いてはいけない」という気持ちが強かったと思います。消灯時間になり体育館が暗くなると「これからどうしよう…」といろんな思いが頭の中に浮かび涙が溢れ、眠れない、そんな不安定な状態でした。そんな中、児童センターの職員向けにイスラエルの支援団体の方による震災後の心ケアのワークショップが行われました。絵を描いたり、気持ちを開放しコントロールするワークショップなど1週間に渡り体験するうちに、涙を流すこと、不安や苦しい気持ちを話すこと、誰かとそれをシェアすることで気持ちがすっきりし、軽くなった気がしました。避難所に帰り、家族にワークショップの話をしました。そして「苦しい気持ちは出していいんだよ。泣いてもいいんだよ。」と伝えました。その後も子供達が泣くことはありませんでしたが、時折震災のことを話すようになり、表情も明るくなったような気がしました。子供達は、言いようの無い不安や悲しみ、悔しさ、辛さを抱え、どうすることも出来ずにただ家族に心配を掛けないようにと明るく笑顔で過ごしていたのだと感じました。震災以降おそらくこんな生活をしてきた家庭は多かったのではないのでしょうか？

今思えばもっと早く子供達の気持ちに気付き寄り添ってあげればよかったと思います。心ケアについて何の知識もありませんでした。大人も子供も震災で心に傷を受け、傷の深さ、大きさはひとそれぞれ、でも、それを吐き出し、整理する、そして自分で理解してはじめて前を向けるのかなと感じました。街の復興は、目に見えて進行状況が明らかで、遅れていればそこに力を入れ、人員を増やすことも出来ます。でも、心の復興は、目に見えない分、復興の進行状況が分かりにくい。真っ先に取り掛かるべき復興は、心ケアだと感じました。

心、精神的な復興が出来て初めて、そこに住んでいた人々が街の復興に向き合えるのではないでしょう

か。

この震災を機に心ケアの必要性と同じくらい大切だと感じたのは、「一人でも生きていくという強い気持ち」です。「離れ離れでも、生きていればきっと会える」今は、家族一人ひとりがこの気持ちを常に持ち続けることを言い聞かせています。普段から家族で避難経路を確認し共通理解することはもちろん大切ですが、誰もが死を覚悟したあの状況で被災した場合、自分の命は自分で守ることを最優先に考える。最悪の状況に諦めずどうすれば生きられるのかを考えられる人間に育てなくてはいけないと強く感じました。

### たくさんの地域の方の目がある安心安全な場所に 子供たちを戻すスタンスで再校を

子供達は現在逢隈小学校・中学校に間借りをして生活しています。仮設住宅から距離もありスクールバスの運行をして頂いての登下校です。来年度には小学校が、2年後には中学校が元の場所に再校されると聞いています。震災前荒浜は、地域の子供達は地域全体で育てるそんな「地域育」に根ざした街だったと思います。だから復興途中の荒浜に子どもたちを戻すことに大きな不安があります。「学校がそこにあるから地域の人に戻る」のではなく「たくさんの地域の方の目がある安心安全な場所に子どもたちを戻す」というスタンスで再校を進めて欲しいと、二人の子どもを中学校に通わせる保護者として、これまで荒浜という街に子どもを育ててもらったものとして強く願っています。

仮設住宅に住む私たちも今後の居住地をどうするか考え始めています。主人は漁師なので海の近くに住むことを望んでいますが、大津波を目の当たりにした私達は、恐怖心があり少しでも海から遠いところに住居を構えたいと思っています。でも、亘理町を出ることは考えてはいません。14年前荒浜に引越し親戚も知り合いもない私達家族が、何の不安も無く過ごすことができたのは、地域の方々、ご近所の方に温



かく接して頂いたお陰だと思っています。私達も、荒浜の復興のために何か出来ればと思っています。

今後、スピーディーな復興が望まれているようですが、目に見えにくい心の復興が置いてきぼりにならないように願っています。



いちご農家  
浅川 一雄 さん

## 目の前ががれきの山が押し寄せ あつという間に首まで水に浸かった。

逢隈にある農協で理事会中に地震が発生。会議は中断され、私はすぐに浜吉田駅から徒歩3分のところにある自宅といちごのハウスに戻りました。逢隈から車で戻ったので、地震発生から15～20分くらいで自宅に到着。すぐに隣近所の無事と、自宅や倉庫の被害状況を確認しました。近所でも岩積みの塀や屋根が崩れているところがあり、私の家の屋根も少し崩れていました。

庭で隣近所の人と被害状況と話していると、家のすぐ近くにあるハウスの前方に、瓦屋根の家がまるで船のように流れてきたのが見えて、初めて津波に気付いたんです。それから何十秒かで目の前のところまでがれきが迫ってきたので、庭石にポンと飛び乗りました。恥ずかしい話ですが、とっさのことだったので家の2階に逃げることもできず、たったそれだけの行動しかできなかったんです。

津波は、映像で見ると強烈な波がストレートに向かってくるように見えますが、海から2kmの距離で津波を受ける側から見ると、海の水が迫ってくるのではなく、がれきの山がワーンと目の前にくる感じ。私の場合にはたまたま家の前で大きながれきが引っ掛かったので、体で水を受ける形になりました。庭が道路より約1m高くて、私が乗った庭石の高さが70～80cm。それでも首まで水に浸かるぐらいの津波でした。

もちろん恐怖感がなかったわけではありませんが、あつという間に津波がきて逃げ遅れてしまった…。大津波警報を知らせる防災無線も聞いていましたが、避難を呼びかけられていたのが自分の地区ではなかったのと、自分がいる場所は海から2kmほど距離があるので「津波はここまでこない」と高を括っていたんだと思います。

## 震災からしばらくは、 いちごのことなんて全然頭になかった。

首まで水に浸かってから30分以上かかったでしょうか。いつの間にか水が引いていましたが、車は流されてしまったし、エンジンがかかるものは何もない。家の前ががれきの山で歩けない状態だったので、身動きしようがなくなっていました。

しかも季節は3月。ずぶ濡れの状態では寒くて、偶然見つけた中が濡れていないティッシュとライターで火を点け、がれきを燃やしながら過ごしていました。そうしたら、その火を頼って残っていた近所の人が集まってきたんです。だからなおさら離れるわけにもいかず、朝まで過ごすことに。翌朝あたりを2、30m歩いてみましたが「あー…何も残ってないんだ…」と啞然とするばかり。さらに、ごはんがないこと



に気付いたんです。自分だけだったら我慢できますが、みんな集まっているのでそうもいかない。そこで、吉田小学校まで避難しようということになりました。

吉田小学校には1週間から10日程度お世話になりましたが、息子が消防団のため、家を拠点にしないと動けないということで戻ることに。流れずに残っていた石油ストーブを利用したり、いただいたカセットコンロと水で鍋を使ってごはんを炊いたり

しながら、自宅の2階部分で過ごす生活が何日か続きました。

しばらくしてがれきの片付けなどが始まりましたが、その時はいちごのことは全然頭になかったですね。おかしい話ですが、流れてきたハウスの資材なんかを確保しておけば良かったかもしれませんが、そういう物を探す気力もなかった…。半月から1ヵ月はボーっとしていました。

### 新たなハウス建設地を見た時は 「ここでやれるのか…」と不安だった。

またいちご農家を再開する話が出たのは、がれきの片付けをしている最中のこと。「孫に食べさせたい」「一株でも苗を育てたい」と仲間間で少しずつ話が出てきて、再開することになりました。

元のハウスは流されてしまったので、逢隈小山地区の耕作放棄地に新たなハウスを建設することに。最終的には亘理町から4戸、山元町から4戸のいちご農家が参加し、スタートしました。

はじめてハウスを建てる場所を見に行ったのは震災から約3ヵ月後の7月頭。正直、道路を入れてきて荒地を見た時は「ここでやれるのか…」と不安でした。その後、開墾地のゴミ拾いなどを手伝いながら、ハウスの建設が始まったのが8月。国の支援をいただいていることも自覚していたし、全国からボランティアの方にも来ていただいた。そういう方々と「12月のクリスマスには亘理のいちごを出荷するから」と約束していたので、私のハウスではなんとか泥だらけになりながらも、12月19日に震災後初の出荷ができました。

### 一日も早くいちご団地の仲間も一緒に 亘理のいちごが出荷できるように…。

新たなハウスでのいちご栽培が始まってから約1年が過ぎ、一度は収穫ができました。でも手放しでは喜べないのが本音です。約100人の残された仲間たちは、いちご団地で栽培に取り組む予定になっていますが、国や町のさまざまな事情があり、スタートが約1年遅れることに…。本来ならばいちご団地で栽培する仲間も今年の12月を目標に収穫したいと思っていたし、我々も同じ。お互いにそう考えていたんです。でも1年遅れてしまう…。それは我々にとっては2年遅れるということ。だから一度目の収穫ができ、亘理のいちごが復活して喜んでいただけているのも事実で達成感もありますが、なんとも言えない気持ちで心が悩まされているんです。そういう意味ではうんと辛い…。

ただ、ここで我々が一生懸命やっていることは町にも見てもらっているので、それをいちご団地にも反映していただけたらと思います。元に戻ることができないことは、みんな十分分かっている。だからまずいちご団地をつくっていただき、一日も早く仲間みんなでいちごの出荷ができるようになればいいなと思っています。





海苔養殖業  
菊地 幹彦さん

## ヘリコプターからの「逃げろ！」の声で 急いで荒浜小学校へ避難した。

震災当日は船の調子が悪くて、それを海の所で修理していました。その後、船の部品を取りに塩竈に出掛けなくてはいけなくなったので、その用意をして出かけようとしていた矢先に地震が起きたんです。

津波のことは頭にありませんでしたが、海から100~200mの所にある我が家は液状化になりやすい土地。揺れている最中にも車がどんどん埋まっていったので「これはまずい！」と思い、四輪駆動の車2台を無理矢理出して、家族と近所の人を乗せて荒浜小学校まで避難しました。車はほとんど走れない状況でしたが、四駆は走れたんです。

私たちは荒浜小学校に避難しましたが、子供たちは荒浜中学校にいて別々だったので妻が車で迎えに行き、その後荒浜小学校で合流。ただ、近所の人の子供が見つからなかったので今度は私が荒浜中学校まで行きました。そして学校を見て回って外に出た時、ヘリコプターがホバリングをされていて「逃げろ！」と言われたんです。もうその時は阿武隈川が溢れそうな状態で。急いで土手に上がって津波の様子を見ていた男性たちを下ろして荒浜小学校に逃げさせようとしてしました。結果的には、小学校に入るところで2、3人流されてしまったんですが…。

その後は1階が浸水した荒浜小学校で一晩過ごし、次の日の夕方に土手を歩いて逢隈小学校まで避難。そこでまた一晩過ごして、その後は名取にある妻の実家に身を寄せました。

## 半年は九州で別な仕事をして やっと、海苔養殖を再開することに。

見ていた人の話によると、家自体は津波の第2波ですっかりなくなったようです。家も流され元の場所には住宅が建てられないので、5月か6月には仮設住宅に入居しました。

正直その頃、海苔養殖のことは頭にありませんでした。津波が来たとき、私は荒浜小学校の屋上に上がって家々が流されるのをみていました。荒浜の町がなくなっていく様子にぼうぜんとしました。その後、同業者の仲間や働きにきてもらっていた人の娘さん、手伝いにきてもらっていた親せきの人が亡くなったことを次々と耳にすると、それどころではなくて…。

ただ、一緒に海苔養殖をやっていた仲間、すぐに仕事を見つけなくてはいけない状況の人がいたんです。それですぐに知り合いに話をつけて海苔関係の機械の組み立ての仕事を見つけて、一緒に行くことになりました。場所は遠く九州での仕事。こっちでは仕事が全然なくて…。結局半年は九州で仕事をして、

養殖業を再開するために戻ってきました。

でも自分としては、もう海苔養殖はいいかな…と思っていたんです。設備投資にお金がかかるし、朝は早いし休みもない、本当に大変ですから…。うちは娘だけで跡取りもいないので、今からやる仕事じゃないかなって思ったんです、でも「やりたい」って仲間がいたから、再開することにしました。



## 1年半越しの、海苔養殖業の再開。

でもどうなっていくかは分からない…。

現在は海苔養殖業再開の準備をしている段階です。とりあえず海の状況がどうなるか分からなかったし、再建するにも設備投資にかなりかかることと、土地の問題やライフラインの問題もあって、1年間は何もできない状況で…。やっと今年1年かけてなんとか県から土地を借りることができて、工場再建の目処がつかしました。

海苔の養殖は、水温や光などいろいろな条件を満たした環境を人工的につくって胞子を網に定着させて、海の水温が下がった段階で海に出して1ヵ月程度で収穫。その後塩水が入ったタンクに入れて機械で自動的に裁断。みなさんがよく見る一枚の海苔の状態にして乾燥させ、製品にして出荷するところまでの全部をやります。だからけっこう設備が必要なんです。今は、やっとこの設備を再建できる段階までできたところ。

でも地震や津波だけでなく、放射能の問題もあって…。セシウムは海藻類からはでないけど、風評被害が心配ですね。やっとこれから再開できて、やれるつもりではいるけどどうなるか分からない。いろいろな余裕がない状態で進んでいる状況です。

## 海苔養殖業という仕事を

若い世代に残していきたい。

正直、1年を振り返ってどうだったって考える余裕はないと言うか…何も思いつかないんです。家を建てる土地も探していて、私としては仕事もあるので本当はなるべく海に近いところが良いんですが、妻と祖母は海のそばに住むのはもうダメですね。ばーちゃんが土地をあちこち探してくるけど、いつの間にか海から離れたところになっているし。子供は友達と離れたくないとか、転校したくないとかいろいろあるから海からの距離は意外と気にしてないようです…。

海苔養殖業については、再開に向けてありがたいことに助成も受けていますが手続きが大変で…。最初は「良いよ」と言われていたことも、例えば「3人以上の組織じゃないとその事業の補助は受けられない」と言われたり、工場にソーラーパネルを乗せることになっていて、その売電の話になったら「法人ではダメ」と言われたり…。仕事が終わってからそういう話がどんどん来るんです。

こちらとしては都合の良い話ですが「これでなんとかしてください」と助成金をいただければ、それで海苔を生産してできるだけ早く恩返しをしていきたいわけです。復興するのが一番最初。でもその手前でそういうことが足枷になってしまって…。それが今大変ですね。いろいろな手続きを取るのに1日つぶれてしまったりして。今はとにかく養殖業の仕事がしたいのに、どんどん遅れてしまうんです。

宮城の海苔は商品加工がし易く、海苔を育てる養殖技術、生産加工する際の異物除去等の機械設備全てにおいて注目を集めています。しかも今までは個人個人でやっていた海苔養殖業が、震災復興をきっかけに協業するということでも同業者からは注目されていて、全国から視察に来るほど。だからこそ、早く再開のお知らせをしたいですね。

将来的には法人化も考えています。自分のことだけではなく、海苔養殖業という仕事を次の世代に残していきたいですね。





鮎店経営（浜寿し）  
太田政志さん

## 荒浜を巡回していたら 鳥の海の水が全然ないことに気付いた。

地震が起きた時は私たちの昼休み時間だったので、荒浜にあった店を閉めて昼ごはんの準備をしていました。当時はほっき飯の季節だったので、私は店の裏でほっきを選別していたところ。地震が起きてすぐには逃げなかったんですが、親父が出てきて「揺れ方おかしい」と言ったんです。そこで私も店の隣の自宅に行ってみると、地面に大きな穴が空いてそこからバツと水が湧いてきていて、液状化していました。物が落ちたりした様子はあまりなくて、瓦がちょっとずれた程度だったんですが、下から水が湧いてくると怖いですね…。すぐに「ちょっと今までの地震とは違うな」と思いました。そして親父が従業員みんなに「車で分散して荒浜小学校に逃げろ」と言ったんです。今考えれば、荒浜小学校ではなく亘理の方に逃げればよかったんですけどね…。

下の子は小学生でまだ学校にいたので、私はとにかくすぐ女房と家にいた上の娘を荒浜小学校に置いて、自分は消防団だったので詰め所に行きました。そこからはすぐに消防団としての活動がスタート。荒浜の中をまずは一周しました。二周目に魚市場の方に行きましたが、そこで鳥の海を見たら水が全然なくて…。先輩に「ここまで引いたのは見たことがない。津波が来るからもう戻ろう」と言われたので、荒浜小学校のすぐそばにある詰め所に戻りました。その瞬間に津波がダーッときて、2階近くまで浸水。すぐに屋上に上がり下を見ていたら、人が流れてくるんです…。正直、ここまでの津波が来ることは予想していませんでした。津波がきても膝下でチョロチョロ程度かなと。荒浜は防災無線も聞こえにくかったので、誰に聞いてもそう言うと思います。

その後私は荒浜支所で2晩過ごしました。自衛隊の方が来ましたが、水が引かずがれきだらけでそばに行けないということで、急病人だけ1日目にヘリで搬送されました。私たちはたまたま魚市場で使っていた生簀が流れ着いていたので、それをボートにして何度も人を運んで脱出しました。

## 店の前に残っていた暖簾に 「店をやれ」と言われている気がした。

そこからはすぐに消防団として捜索活動に参加。自衛隊や消防の方に同行して、今現在どの場所にいるか案内したり、一緒に探したりしました。顔を知っている方のご遺体を見ることも…。でも自衛隊の方はすごいですね。人のことなのによくあそこまでできるなど。今回ほど自衛隊がありがたいと感じたことはありませんでした。

消防団の隊から一人だけ外れることはできないので、結局自分の店や家を見に行くことができたのは地震後一



週間以上過ぎてから。諦めていたとは言え、何もない跡地を見た時はがっかりしてしまって…。その後も消防団の活動をしながら片付けに行きましたが、その時はまだ自分のお店を今後どうしていくかというところまでは頭が回りませんでした。

でも、店の前にたまたま暖簾だけが残っていたんです。それを見た瞬間「店をやれ」ということなのかなと思いました。また店の中の物は何もなかったんですが、自宅の2階部分だけが見つかり、納戸に入れていた包丁は無事だったんです。

とは言ってもまだどうしようかなという状態だった時、たまたま消防団に店舗デザイナーをやっている方がいて「また店をやるんだったら手を貸すよ」と言ってくれたんです。女房も「もう一回店をやろう。私も一緒にやるから」と言ってくれました。そんな言葉のおかげで再建を決め、土地探しを始めたのが震災の年の9月頃。なかなか見つからなかった大工も、店舗デザイナーの方が探してくれてようやく工事が始まりました。

それまでは仕事をしていなかったので「どこか別な店に行ったら」と言う人もいましたが、職人としてはそういうのは勘弁でした。また「仙台でやらないか」という話もありましたが、うちは寿司のほかにはらこ飯やほつき飯もやっていたので「亘理でやりたい」という強い気持ちがあつて、それもお断りしました。従業員たちも休んでいる間は全然違う仕事をして待っていてくれて。戻ってきてくれたメンバーとともに、震災から1年1ヵ月過ぎた4月19日に、逢隈で再スタートを切りました。

### さまざまな方からの支援。

#### 人のありがたみを身に染みて感じた。

もちろん、再建したらどうなるか不安はいっぱいでした。今もそうですが、このあたりの魚は手に入らない状況。でもたまたま親戚に活魚屋さんがいて、青森や山形の魚を使わせてもらえたんです。

また、亘理の「みやぎのあられ」の石田さんには、自分も被災しているのに力を貸してくれてインターネットで支援を呼びかけてくれました。そのおかげで、かなり遠方の方からも支援していただいて。人のありがたみを身に染みて感じましたね。

ただ、こうやって手を差し伸べてくれたのは一般の方々なんです。もちろん助成金はいただきましたが、そのほかのサポートはまったくない状態。いちご農家や漁業者に対しては手厚いサポートがあるのに、私たち飲食業には何もないんです。我々が亘理町に留まって事業をやっている事に対して、もう少し何らかの手助けをしていただければと思いますね。そうしないと、人はどんどん亘理から出て行ってしまうと思うんです。

ほかにも家の問題もあります。今は借り上げアパートに住んでいるので、店の再建の次は自宅ですが、これがなかなか難しくて…。二重ローンになるのは苦しいので無料相談に行きましたが「土地もあるし預貯金も多少あるから難しいでしょう」と言われました。何かおかしいですよ…。

### 「亘理の浜寿し」として

#### いつか地元の素材を使いたい。

でもやはり、店を再建して良かったと思います。場所的にはもう少し海寄りに店を建てたかったというのが本音ですが…。今まで海を見て生活してきたので、ちょっと落ち着かなくて。荒浜の時は市場が目の前で直接魚を買えたので、最高の立地条件でした。だから今の店が軌道に乗ったら、元のところとまではいなくても、少しでも海に近い所に行きたいなと思っています。

今後もとにかく亘理町からは出ないで店を続け、いつかみなさんに「亘理の浜寿し」って言ってもらえれば嬉しいです。なかなか亘理の魚を使えないのが少し苦しいところですが、港や海の状態が落ち着いてきたら、いつかこの素材をまた使いたいですね。







巨理町荒浜  
～東日本大震災一ヶ月の記録～  
撮影者

森 健 輔 さん

## 家族と離れ離れの中 荒浜中学校で2晩を過ごした。

3月11日は大学が春休みだったので、海が目の前に見える荒浜の自宅にいました。両親と妹は妹の高校の卒業式で仙台にいたので、自宅にいたのは私一人。揺れでCDラックや食器棚が倒れすぐに停電してしまったので、カメラだけを持って荒浜中学校に自転車で向かいました。

その時はまだ津波が来るかどうかも分からなかったのですが、中学校で親戚がいるかどうかを確認して、そこから一度土手の方へ。その時、消防団の人の拡声器の声で津波がくることを知りました。でも誰もがこんなに大きい津波がくるとは思っていなかったと思います。そこからまた荒浜中学校へ戻った時、2階の窓から沖の方を指差して「津波が来てるぞ!」と言っている人がいたので振り返ったら、もう津波が…。幸いけっこう遠かったので巻き込まれることなく、3階まで避難することができましたが、荒浜中学校は1階天井までが浸水。周囲は当然水浸しでした。

家族と連絡がついたのは、ちょうど津波がきた時。みんなはまだ仙台にいて帰ってこようとしていたようなので、父に「津波がきているから帰ってこないで」と伝えました。

結局2晩荒浜中学校で過ごし、3日目にヘリコプターで岩沼の町民会館まで避難。そこでやっと両親が迎えに来て、家族と合流。その後は山元町の山の方にある母の実家に居候していました。

## 地震発生から4日目。 別世界になった荒浜を撮影した。

高校生の頃から趣味で撮り始めた写真。その後大学では写真部に所属。震災の写真は、地震が起きたときから撮っていました。ただ、その時は地震の被害を記録していただけで、写真集のことはまったく頭にありませんでした。津波がくることが分かっていたら、流されてしまう前の状態をもっと撮影していたと思います。

結局津波の後、荒浜の自宅を見に行けたのは、震災から4日目の3月15日。家は完全になくなっていました。完全に別世界。自分の育った町ではありませんでした。この時もカメラは持参。当時まだ一般の人は入れなかったし、捜索活動をしている人たちは写真を撮っている暇もなかったので、あの頃の荒浜を撮影できたのは自分だけだったと思います。



## 亘理町民に向けた写真集なので 町の被害を伝えることが目的。

大量に撮った震災後の写真ですが、最初は写真集にまとめるつもりはありませんでした。でも撮った写真を自分でL版に焼いてまとめたものを、母が働くコパン亘理店に展示してもらったところ、「欲しい」という人がけっこういらっしたんです。理由は津波が来る前の写真に流されてしまった自分の家が写っていたり、立ち入りが禁止されて見るができなかった、津波直後の家のまわりの惨状が写っていたりしたから。その声がきっかけで、より多くの人が見られるように写真集にまとめることにしました。

まずは印刷会社に勤める親戚に相談。構成などは自分で行い、データを渡して印刷してもらい、販売にこぎつけました。現在はコパン亘理店や、FMあおぞらさんにも置いていただいています。

実際販売してみると「荒浜の津波後の状態をはじめて見られた」という声をけっこういただいたので、写真集をつくって良かったなと思います。今思えば、人をもっと撮っておけば変化が分かりやすくて良かったかなとも思いますが、当時それはできなかったな…とも思います。写真集も、あまり人の写真は載せず町の被害だけを伝えることをコンセプトとしていました。もともと亘理町民に向けた写真集のつもりだったので、被災者である自分たちの写真を載せる意味があまりないんですよね。だからこそ、津波が来る前の写真の方が重要だったかもしれません。

## 今、自分にできることは 亘理の写真を撮り続けること。

現在は仮設住宅から仙台の大学に通っています。大学4年生なので就活中。カメラ関係の仕事を希望しているので、スタジオなどを中心に探しています。仕事を始めたら一時的に亘理を離れることになるかと思いますが、頻繁に帰ってきたいと思います。

私が住んでいた場所はもう家が建てられませんが、自分の家から見えた景色が懐かしい…。でもまた津波が来てしまったら結局同じことなので、今後住む場所はもう少し内陸でもいいかなと思っています。

今自分にできることは、たぶんなるべく長く荒浜、亘理の写真を撮り続けること。第二弾の写真集を出すかは分かりませんが、これからも写真を撮り続けたいと思います。





巨理町消防団吉田分団  
副分団長  
平間 勝彦さん

## 選果場に運ばれるはずだったいちごを みんなに配ってその日をやり過ごした。

私はいちご農家なので、地震が起こった時はちょうどいちごのパック詰め作業を終えて選果場に搬入する時間帯でした。揺れは宮城県沖地震に比べて3倍くらいの長さがあったので、何かあるんじゃないかと感じました。だからすぐに海岸から400mほどの家に帰宅。すぐに父親と家内を避難させました。

私は消防団員でもあるので、その後吉田分団の集合場所になっているポンプ小屋に向かいました。その後、本来は津波警報が出た時は海のそばの消防団の詰め所に集合することになっていましたが、団員の安全を考え今回は私の判断でそこに行くことは中止。また水門を閉じる任務もありますが、それも中止させて「一度集落を見て回ってくれ」と頼みました。まずは寝たきりの方などがある家庭を優先的に車に乗せて避難させ、見回りを終えてから浜吉田駅のそばの改善センターに向かいました。

改善センターには360名ぐらいの方が避難。でも、誰かがラジオで「仙台空港に10mの津波がきた」と聞いてから、5分もかからず津波が来てしまいました。波に追いかけられながら逃げてきた団員によれば、津波の速度はだいたい時速40kmぐらいだったそうです。

私は改善センターの2階から津波を見ていましたが、家が飲みこまれ、水しぶきと真っ白な煙が立ち上がるんです。そして黒い波が2mぐらいの壁になって迫ってくる…。その瞬間は「どこかで止まってくれ」と祈りながら見ていました。結局改善センターにも津波が到達。波が建物にぶつかった瞬間はものすごいもので、1階の窓がバリーンと割れました。

その後に今度は吉田浜で火災が発生。その時私たちは、家は浜の方にあるのに家が流されているという感覚がなかったんです。でも消火活動に行きたくても、津波が来てるからポンプ車で出動できない。ましてや停めていたポンプ車は全部流されてしまっていたので、身動きが取れませんでした。

結局3日ぐらいそこから動けない状態でした。でもちょうどいちごの最盛期だったので多くのいちご農家がパック詰めをして選果場に持っていくところで、車に積みっぱなしの状態のいちごが流されていたんです。車は浮くのでいちごは無事。そのいちごをみんなに配って、次の朝までつなぎました。いちごに助けられましたね。



## 次々と発見されるご遺体に 夢でも見ているのか…という感じだった。

改善センターの周りの水が引き始めたのが3日目。それまでは移動もできないので、その時避難していた消防団員5、60名が水に浸かりながら避難住民のためのパンと水を取りに行きました。震災翌日の朝昼晩と、3日目の朝昼の計5回、夜は寒くて足の感覚が麻痺していましたね。その後3日目の午後には逢隈中学校に移動することになりましたが、まだあたり一面水浸しだったので消防団員が会議用の長テーブルを並べて両脇から支え、歩けるように道をつくって避難。360名全員が移動するのに半日かかりました。

翌日4日目からは消防団として搜索活動を開始。滋賀県や船岡の自衛隊さんや愛知の消防署の方にも来ていただきました。搜索活動は、あそこでもここでもご遺体が見つかったという報告に、夢でも見ているのか…という感じ…。子供のご遺体は特にかわいそうでしたね。でも亡くなった方の家族からすれば、いち早く見つけてもらって葬ってやればという気持ちのはずなので…。

もちろん搜索活動は自衛隊さんの方が我々より広範囲にやっていたんですが、ご遺体を見付けると消防団の方なら身元が分かるんじゃないかということで、すぐに遺体安置所には運ばず、確認するまで待っていてくれたんです。我々消防団は近所の方はみんな分かる上に、行方不明者のリストももらっていました。だからご遺体を見たらすぐに家族に連絡して確認してもらえたんです。身元不明のまま遺体安置所に運ばれてしまうと、まずご遺体の写真を見せられて、例えば50番が自分の母親かもしれないとなると50番のご遺体しか見られないとのこと。その点、消防団が確認してすぐに身元確認できたことは良かったと、感謝の言葉をいただいたこともありました。

この搜索活動を通して、改めて自衛隊の方はすごいなと思いました。我々の息子のような年齢の方々がご遺体に直面しても顔をそむけることもなく、線香を供えて合掌していたんです。また吉田分団も半数以上が20代~30代の団員ですが、みんな嫌がらず搜索活動をやってくれました。自分の親が行方不明だったり、家族が亡くなっていたり、風邪が流行って熱が出ている中、消防団の活動をやっていただいた…。本当に頭の下がる思いでしたね。

懸命の搜索活動のおかげで、巨理町では4月末時点で行方不明者が22名。これだけ探しても見つからないということで、町長と団長の判断で消防団としての搜索活動は4月いっぱい切り上げました。

## 例えバラバラになろうとも 吉田分団は吉田分団で活動していく。

いちごのハウスも全部流されてしまったので、今は草を刈ったり、がれきを片付けたりという仕事をしています。それと並行して農協さんのハウスをお借りしていちごの苗作りもスタート。来年からはいちご団地ができるので、そこで前のようにいちごが作れると思います。

今回の場合は家もない、いちごハウスも流されてしまった状態。震災後半年ぐらいまでは「どうなっぺな…」と先行き不安で、些細なことでもケンカになったりしましたが、ここにきてぐっと落ち着いてきました。惨状の場所もきれいになってくると、なんぼか落ち着いてきたんですかね。今はみんな前向きに、前と同じような笑いも出てきた気がします。

家の方も、もともと家が建っていたところは災害危険区域なので、おのずと集団移転に。私たちは50数年育ったところだからそこが一番良いと思うこともありますが、妻や子供たちの将来的なことを考えるとね…。どうせ家を建てるなら、我々が亡くなった後も津波の心配がない所の方が良いんじゃないかということで、高台の方に決めました。

また消防団の活動としては、今までだと分団ごとにやっていた演習に団員が出てこれないんじゃない

か、活動自体も難しくなるんじゃないかという心配がありました。みんな亘理町内だけでなく、角田や大河原、岩沼、名取、遠い人は仙台まで散らばってしまっているし、仕事もそれらの地域に行っている人が多いので集まるのもなかなか難しいんです。でも結果的には町長さんや団長さん幹部の方々と話し合い、団員はどこにしようとも今までの所属の分団で活動していただくということになりました。もちろん、団員の方々もそういう気持ちでいてくれると思います。

### 大切なのは、伝達網、個人で情報をつかむ努力、 地震が起きたら高台に逃げるということ。

今後は、消防団の仕事も見直さなくてはという声もあがっています。例えば水門を締めるという消防団の仕事ですね。もちろん「じゃー誰が水門を締めるんだ」ということにもなりますが、あのような津波では水門を締めたらどうってレベルではないんです。ただ、地域によってはそれが必要な所もあるので、考えなくてはいけないのは「どこで引くか」ということですね。

今回の震災を機に、亘理町消防団には各分団各班に一つずつ無線機を買っていただきました。無線機で「津波が来るから行くな！」と幹部から指示があれば、団員はそれ以上海に近づきません。的確な指示ができるんです。やはり伝達網が完全だったかと言われると…。消防団の伝達はすべて口頭だったので、口頭ということは誰かが伝えに行かなくてはいけない。今後はそういう伝達網が重要になってくると思います。

あとは個人で情報をつかむ努力ですね。一番感じたのは、携帯ラジオを常日頃聞くクセをつけること。私なんかはいちごの作業をしながら常にラジオを聞いていますが、震災の時に限って携帯ラジオも不携帯、車のラジオもつけなかったので情報源が全然なかったんです。それだけパニックだったんでしょうね…。

それから孫の代に残していくのは「地震が起きたら一度は高台に逃げる」という教訓。あと50年もすればこの意識は薄れてくるはず…。また同じことを繰り返しては意味がないので、どんな時代になっても最低限命だけは助かるようにしなくてははいけません。物や家は再生できますが、命はできませんからね。学校でも防災教育という時間があってもいいかもしれません。

我々が今望むのは、自分の家をもって当たり前前に仕事ができ、子供たちが当たり前前に学校に行って、当たり前の生活ができること。これがいち早くやることであって、別に堤防を最初につくって欲しいわけではないんです。がれきを片付けたから、道路をつくったから、堤防をつくったから「もういいべ」というわけではありません。町にも県にも国にも、生活第一のきめ細かな支援制度をお願いしたいですね。





亘理町臨時災害ラジオFMあおぞら  
放送総合担当チーフ

吉田 圭さん

### 防災無線で大津波警報を聞くも 「まさか…」と思い、自宅に留まった。

震災当時は主婦だったので、浜吉田駅の西側の家にいました。あれだけの揺れだったので物が落ちたりはしましたが、それでも被害は少ない方だったと思います。

うちの地区は、最初の防災無線では避難の対象に入っていなかったのも、大丈夫だと思っていました。その後「大津波警報が出ているのでみなさん避難してください」という防災無線が入ったんですが、その対象エリアに果たしてうちの地区が入っているのかは分からない。絶対津波がこないと言われていたので「まさか…」と思い、私は避難しませんでした。

でも実際には自宅まで津波が到達。まわりは1mを越えたところもありましたが、我が家はたまたま床下浸水で済んだので、そのまま自宅に留まりました。避難所にも一度寄ってみたんですが、どこもいっぱい。小学生の娘はなんとか頑張れても、目が不自由な母親は無理かなと思い、自宅の2階で3日間過ごしました。

その間、何度も消防団の方が来て「ここは危険だから避難した方がいいですよ」と言われたんですが、その時点で車も浸水して使えない状態で…。結局はその後山元町に住んでいる知り合いの方のお宅に避難をして、そこで生活させていただきました。

### さまざまな偶然が重なり、震災後2週間で 臨時災害放送局を立ち上げられた。

私がお世話になった山元町の方は、実は放送経験者。その方に聞いて初めて、大きい災害が起こった時は、ラジオの臨時災害放送局の免許が下りるということを知りました。その方が中心となって山元町役場に臨時災害放送局が開設されたのが3月21日。新潟のFM長岡の方が支援に来てくださっていました。開設すると役場に死亡届を出しに来た方、行方不明の方を探しに来た方、情報を求めに来た方がみなさん集まってきて「これでうちの町の情報が分かるね!」と言って帰られるんです。それを見て、これはひょっとして亘理町にもこういうラジオ放送があったら、あの3日間の不安、家に戻りたいけど戻れない不安は解消できるんじゃないかと思い「亘理町でもやってみたい」と申し出ました。

そしてさっそく翌日、FM長岡の方に亘理町役場まで乗せていただき、亘理町長に直談判。すると「やってみようか」とおっしゃっていただき、FMあおぞらの立ち上げが決まりました。

震災時に情報がなくて非常に困ったという自分の経験。隣町で臨時災害放送局を目の当たりにして、こうやって情報が得られるんだというツールを得たこと。そしてFM長岡の方がアンテナの調整などの技術支援を申し出てくださったこと。この3つの大きな要因が重なり、亘理町では震災から



わずか2週間の3月24日に、臨時災害放送局を立ち上げることができました。もしこの3つが重ならなかったら、また私の家が全壊していたら、放送局は立ち上げられなかったと思います。主人や上の娘など、震災後しばらく会えなかった家族もいましたが、家族の無事は分かっていたし、家も床下浸水で済んだので立ち上げることができたんです。

### 放送経験者ゼロからの出発。

#### 生活に必要なことを放送し続けた。

浸水しなかったであろう友人に「ラジオ局をやるから手伝って欲しい」と連絡をしてメンバーを集めたので、FMあおぞらのスタッフは主婦の私を含め全員が放送未経験者。FM長岡の方に、中古の送信機とミキサーとマイク、CDデッキをつないでいただきある程度の説明はしていただきましたが、紙と鉛筆すらない状態からスタートしました。

ラジオ局を開設しても、情報をコンパクトかつ正確に伝えなければ意味がありません。私が災害時一番怖いと思ったのは、デマ。でもその反対で正しい情報が口コミで伝わったら、どんなに良いだろうと思いました。だからこそ「正確な情報と裏付け」これを徹底することを素人ながら目指したんです。

最初に集まってくれたのは12、3人。放送の記録を付ける人、話す人、取材に行く人など担当を割り振って、毎時間15分ぐらいずつ放送しました。放送内容は「生活には何が必要だろう?」「それを知るためにはこういう取材が必要じゃない?」と、みんなで考えながら決めました。具体的には、町の広報課の方から自衛隊のお風呂支援や灯油の巡回販売、給水車の時間や場所を教えていただいたり、そのほか罹災証明書のみまひ具合は自分たちで取材をして放送。また校歌が聞きたいという声もありました。

開設後「こういうことが知りたかったのよ」と言っていたいた時は「やっぱりみなさん町の情報を細やかに聞きたいと思っていたんだ」と再確認できました。そのうち、情報を持ってきてくださる方も現れて。「間もなく保育園が始まるけど被災したお宅では布袋が縫えないと思うから、一緒にやってくれるボランティアさんと布地を提供してくれる人がいないか、ラジオで呼びかけて」と頼まれたんです。それを放送したら、いろいろな方が布地を持ってきてくれて。町民が呼びかけて、それに町民が応える。「ラジオってこういう役割も果たしているんだな」と思いましたね。

### 災害時すぐにラジオ局を立ち上げられる体制と

#### ラジオを聞くという防災教育を徹底すべき。

FMあおぞらの立ち上げを振り返って思うのが、スタッフの多くが女性や主婦だったことがとても良かったと思います。今、目の前の生活に何が必要かは、女性や主婦の方が分かることが多く、生活に密着した情報を流せることや、不安や悲しみに寄り添いやすい点で、とても大きかったと思います。

逆に反省すべき点は、臨時災害放送局の立ち上げに関する点。今は大きな災害が起こってから総務省に臨時災害放送局の免許を申請する形ですが、それでは遅い。いち早く情報を伝えることを考えたら、事前にそういう体制があるべきです。そのためにはあらかじめ市町村に周波数を割り振っておいて「この町で災害が起こったら、この周波数でラジオからも情報を流しますよ」というパッケージをつくり、ハード面や経費的な支援もしていただけたら良いなと思います。

私も実際震災当日にラジオの存在を思い出し、非常袋から取り出して聞きましたが、その時はすでに津

波到達後で、流れてくるのは福島原発の話題ばかり。残念ながら県域放送では自分の町のことは分からないんです。だからこそ、町にひとつラジオ局があることは大事だと思います。

そしてなおかつ、防災教育のなかに「ラジオを聞く」ということも組み込まれるべき。電気が付かない、ケータイもパソコンもダメになったら、正確な情報を得られるのはラジオなんです。ラジオを聞くというのは生活習慣なので、普段聞かないと災害時も思いつかないんですよ。

FMあおぞらの臨時災害放送局としての免許は2013年3月まで。その後もコミュニティFMとして情報をお届けしていきたいと思っていますが、ここはにわかには立ち上がった放送局なので、続けていくためには新たに法人を立ち上げて免許申請をする必要があります。

亘理町はハード面ではほかの被災地域よりも復興が進んでいると思いますが、住んでいる人の心が回復していくには、まだまだ時間がかかると感じています。だからこそFMあおぞらを続けて、町内で開催されるイベントは全て情報としてお伝えしていきたい。例えばラジオで地域の盆踊りやカラオケのお知らせ



をしたら、荒浜から亘理に引っ越した方が新しいコミュニティに参加するきっかけになるかもしれません。せっかく良いイベントがたくさんあるので、災害復興情報はもちろんですが、こういったイベント情報も伝えていきたいですね。





前巨理町荒浜支所長  
渡辺 恵子 さん

## 荒浜支所からみんなで 流されていく自分たちの家を見ていた。

勤務先の荒浜支所で仕事をしているときに地震が起き、私の席の後ろにあったテレビが落下しました。その日は老人会の役員会と愛好会の教室をやっている日でしたが、その人たちに避難を呼びかけに行くにも、揺れが凄すぎて歩いたは行けない状態。それでもなんとか伝えに行きました。

その後支所は消防団の詰め所でもあるので、その準備をしていました。その後隣近所の人達が避難してきたので、2階の和室に誘導。その時、消防団の方が飛び込んできました。「鳥の海の水が引いてなくなっているから、すごい津波がくるかもしれない」と…。私たちもみなさんと一緒にすぐ2階に上がったんです。すると「あれは何？」というようなすごい高い波が海の方からきていて…。それが津波だったんですね。すごい勢いで家は流されるし、支所の前で立ち話していた人には2階から「津波が来てるから2階に上がって！」と叫びましたが、本人たちからは津波が見えなかったようで、流されてしまって…。

防災無線も最初は鳴っていたと思いますが、避難してくるみなさんの対応に追われて、聞こえなかったんですね。結局支所には3mほどの津波が押し寄せ、1階は浸水しました。避難してきた人もみんな自分の家が流される様子を見ているので、思い出すだけでもなんだか涙が…。

その晩はもともと支所にあったストーブと、津波が来る前に近所の方が持って来てくださったもう一台のストーブをつけながら、2階の和室で過ごしました。ただ大きい余震があるたびに屋根に上ったりしていたので、みなさん不安だったと思います。

また、支所には72人の人が避難してきました。トイレに一人で行けないお年寄りの方をみんなでトイレに連れて行ったり。子供も一人いましたが、大変な事態だと分かっているのか、泣きもせず静かにみんなといて。とにかくみんなで協力して、その後2晩を過ごしました。

## 1,300人が避難生活を送る逢隈小学校で、 1ヵ月間、責任者として過ごした。

翌日の朝、私たちが外を見たら生簀が流れてきたんです。それを消防団の人達が命綱をつけ取りに行ってくれ、さらに青竹が10本ほど束になって流れて来たんです。みんな作り話って言いますが、本当なんで



すよ。だからそれを船代わりにして、消防団の方が隣近所に声掛けに行き、そこから取り残されていた人を救出したりしました。

その後3日目に歩けない人はヘリで救出。私たちは支所の周りは水が引かないので生簀で、近くの荒浜小学校まで運んでいただいて、そこから逢隈小学校に避難しました。

逢隈小学校では私が避難所の責任者に。荒浜小学校に避難した方が先に逢隈小学校に移動していたので、私たちが到着した時、逢隈小学校には1,300人ほどの避難者がいました。「あー…どうしよう…」と思いましたが、まず教室に貼ってある名簿を確認して、避難してきている人を覚えるところからスタート。とにかく安否確認の問い合わせが多かったので、電話がきたらすぐに答えられるようにしていました。ただ、亡くなった人のことを聞かれたときはもう辛くて…。亡くなっていることは分かっているけど「確認した後で電話するからね」と伝えて…。それが一番辛かったです。

避難所ではマニュアルどころか食事も着替えもない状態。逢隈地区婦人防火クラブの方が炊いてくれたごはんをおにぎりにして食べたり、最初はほとんど食べる物がありませんでした。でもとにかく無我夢中だったので、その時どういう風に何をしたのか、今となっては覚えていないことが多いんです。

結局、逢隈小学校の職員室を本部として使わせていただき、寝る時も職員室で寝る生活を1ヵ月過ごしました。でも校長先生はじめ先生方は嫌な顔一つせずに避難所運営を手伝ってくださり、本当にお礼を何回言っても足りないくらいです。

その後学校が始まるので4月9日には避難所の編成があり、今度は、逢隈小学校体育館の避難所責任者になりました。ここからがまた大変で…。今までは教室ごとに分かれていたのでまだ良かったんですが、今度は体育館なので仕切りがないんです。だからスタッフがサイズを測り、一人何畳分と割り当てをしたり。それでもやはり次々要求が出てくるんです。更衣室がないとか、制服をかける所やアイロンがないとか。学校が始まると犬も通路で過ごさせるわけにもいかないので、犬小屋をつくってもらったり。あとは一番不満が多かったのは女性の下着を干す所がなかったことですね。だからテントを立ててそこに干したりしました。

逢隈小学校の体育館に移動してからは、職員も手伝いに来てくれたのでローテーションを組んで休みをつくり、家に帰ることもできました。夫と連絡が取れたのは震災後4日程してからでしたが、その後無事な顔を見られたのは1ヵ月後。また、わたり温泉島の海の近くにあった自宅が基礎だけの状態になっていたのを確認できたのも、確か4月末になってからでした。

逢隈小学校の避難所は6月頃に閉鎖したので、そこから今度は巨理中学校避難所、その後町民体育館で物資担当として物資の仕分け作業を行いました。最初の頃はパン、飲み物などの物資は本当にありがたかったです。また古着もみなさん、着の身着のまま逃げたのでとても助かりました。

### 指定避難所の2階以上の場所に、最低限の備蓄を備えておくべき。

今回の震災で感じたのは、とにかく避難所には備蓄が必要ということ。最低限、ラジオ、水、乾パン、毛布は必要。だから1階ではなく2階以上に備蓄倉庫をつくるべきだと思います。

実は荒浜支所には当時備蓄がありませんでしたが、その前の年の町民運動会が中止になったため、参加賞で子供たちに配ろうと用意したお菓子とお茶があったんです。1階にあったので水が引いてから探しに

行き、中身が無事だったのでみなさんに配りました。少しでも口に入る物があると、少し落ち着けるものなんだと感じました。

また避難所運営のマニュアルですが、こればかりは避難している方々の年代にもよります。例えば子供がいる避難所では「子供が受験生だから勉強部屋が欲しい」とか、若い人が多ければドライヤーを使いたいという要求や携帯電話の充電場所も必要です。またお年寄りならお茶が飲みたいから電気ポットが必要だとか…。最初はみなさん我慢しているんですが、人間ですから時間が経つにつれていろいろな要求も出てきます。こういった要求は、なかなか自分がその立場に立たないと思いつかないもの。最低限のマニュアルはあっても良いかもしれませんが、あとは運営しながら臨機応変に対応していくしかないと思います。

### 60年間過ごした荒浜に戻りたい。 そのために環境の整備を。

震災から1年を目前にした1月、荒浜支所は元の場所に戻りました。戻った頃は街灯もなく真っ暗でまだ住民も戻っていませんでしたが「支所が戻ったよ」と老人会の方に連絡をしたら「あー良かった！」と言われたんです。多くの方が仮設住宅に入居していましたが、なかなかお茶飲みもできなかったようで…。支所が戻ったことでまた人が集まるようになり、家を見に来たついでに寄ってくれたり。荒浜に支所があって、戻ることができて、本当に良かったと思います。

ただ、まわりを見るとがれきはきれいになりましたが、まだまだこれからです。震災前は荒浜地区には1,300世帯いましたが、今戻ってきたのは160世帯ほど。最終的に前ほどにはならないとは思いますが、できる限り戻ってきて欲しいと思います。私も今は亘理町内でのアパート暮らしですが、60年間過ごした荒浜に戻りたいです。そのためにも、早く戻れるような環境の整備をしていただきたいですね。

平成24年3月に定年でしたが、今も臨時職員として荒浜支所で仕事をしています。主な仕事は相談業務。みなさんとお話をしたり、荒浜の現状をお知らせしたりしています。震災当時に比べると、みなさんだいぶ元気になってきていると思いますが、一番元気なのは老人会のみなさん！ しかし実はご本人が荒浜に戻りたくても、ご家族が戻りたがらず、老人会で集まる時しか荒浜に戻って来られない方もいるんです。そういう方も、だんだんと日が経ち、荒浜は安心だということが分かって、また戻って来られるといいですね。





巨理町総務課長  
佐藤 仁志 さん

### 名取で被災し、すぐに役場へ。 1ヵ月間はほとんど役場で過ごした。

3月11日は午後から休みを取っていて、孫たちと名取の臨空公園に向かう途中に地震が発生しました。車のテレビで宮古や釜石に津波が到達している映像が流れていたのも、これは大変なことだと思い、すぐに国道4号まで引き返して役場に向かいました。かなりひどい状況だというのは分かっていましたが、ものすごい揺れだったので、私は津波よりもまず「役場がつぶれたのでは…」ということが心配で…。

1時間ほどで巨理に着いて家族を自宅に降ろして、そのまま役場に向かいました。着くと職員みんなが外に出て立っていて。災害対策本部を開くことになり、そこからは1ヵ月ほど、ほとんど役場に泊まっていました。

### すぐに来るはずの自衛隊が来ない…。 混乱の中、さまざまな指示を出していた。

役場庁舎は使えなかったもので、災害対策本部は庁舎の前で開くことに。何もない状態からのスタートだったので、まずはイベント用テントに長テーブルなどを入れて搜索活動などの準備を始めました。もちろんテントは壁がないし午後4時頃からは雪もばらついていたのでとても寒かったものの、現場の状況もつかめな、電気も水道も全て止まった状態では、寒さを忘れてしまうほどでした。

本来は大災害の時は自衛隊が災害対策本部に来ることが大前提になっていました。でもちょうど巨理に来るはずの船岡の部隊はその日午後3時まで王城寺原演習場で訓練があり、戻る準備態勢に入ったところで地震に遭ってしまったのです。結果、船岡で留守番の隊員2名が来たのですが、無線機の装備もなく自衛隊との連絡が全然できませんでした。携帯電話は通じないし、災害対策本部からは「今から対策会議やるのに、自衛隊がいなくてどうするんだ！」と怒られ、隊員の方はちょっと気の毒でしたね…。

結果的には翌日名古屋から自衛隊が来ました。また夜には国土交通省の方が四国から5名の方が来たのでいろいろな話し合いをし、被害状況の把握や避難所開設の指示段取り、搜索活動の内容等を検討しました。

当時のことは、あまり思い出したくもないですね…。私も40年以上勤めていて、初めての体験でした。



## 孤立した津波被害エリアの避難所から 全員を救出するのに3日かかった。

今回大変だったのは、住民の大半が津波の指定避難所に避難しなかったこと。津波の場合の指定避難場所は全て高台になっております。今回は大災害時の一時避難所に避難された方が多くいたんです。1年前のチリ地震の時も避難指示は出しましたが、結果的には50cmの津波だったので津波が来るという意識があまりなかったんでしょう。また2日前の地震でも荒浜地区では液状化現象が起きていたようで、3月11日の地震で再度液状化現象が発生。道路が陥没したりして、避難に苦労した方もあったようです。

特に今回被害が深刻だったのが荒浜地区。荒浜小学校に約850人、荒浜中学校に約450人、荒浜支所に72人の方が避難していたので、本部としてはいかにしてその人たちに食料を届けるのか、安否をどうやって確認するのが大変でした。

まずは「保育所にいた0歳児のミルクがない」と緊急連絡が来た荒浜中学校に、なんとか食料を届けようと亘理消防署のレスキュー隊にお願いしましたが、翌日の午前中はがれきに阻まれ荒浜中学校まで行けないということで断念。午後に再チャレンジしてミルクを含む応急的な食料を届けました。

また震災当日の夜に、職員に特別な救助体制を組ませることを町長に相談。「危険を伴うことからまずはあなたたちの考えで進めろ」との指示をもらったので、若い職員12人に志願してもらい津波警報が出ている中、翌日職員を荒浜に向かわせました。もちろん万が一帰って来られない可能性もありました。でもこれだけの人数の住民が避難している以上、なんとしても食料を届けなくては行けないということで、志願してもらいました。

荒浜小学校へは途中まで車で食料を運び、その後は食料を乗せた一輪車を押しながらサイクリングロードを進んで届けました。そして午前10時からは途中までバスを乗り入れ、荒浜小学校に避難している方全員を逢隈小学校まで誘導。荒浜支所に避難していた方も同様に救助しました。

また長瀬小学校に避難していた方は常磐線の線路まで歩いてもらい、そこから町のバスで亘理高等学校へ。ただこの時「私たちは津波がきたら死んでもいいからここに残りたい」と避難に難色を示す高齢者がいらっしやって…。これが二次避難の時には一番苦労しました。でも本部の命令なので、なんとか納得していただき避難が完了しました。

最後に、吉田支所に避難していた方は、食料を届けた時にまわりの水深がひざ上位でしたが、自力で線路上を歩いてもらい、浜吉田郵便局から町のバス等で、吉田小学校へ避難していただきました。

一番困ったのは水深が高く完全に孤立していた荒浜中学校。ここは自衛隊の方と連携を取ってヘリコプターでの救助活動を行いました。荒浜中学校は「歩け歩け運動」として中学生全員で50km歩くイベントをやっていたので、学校に夜間歩く時に使う誘導指示棒があったんです。それで屋上にヘリポートの目印をつくってもらい、2日目午後からの救助で200人ぐらいは救助できました。残る250人は翌朝7時から自衛隊の全部隊を荒浜中学校に派遣して一気に岩沼の陸上競技場まで運ぶことに。ただしここで問題が発生。朝5時頃から、全国から飛んできたヘリがたまたま荒浜中学校に取り残されていた人たちを発見して、それぞれに救助して福島や相馬、大河原などいろいろな所へ移送してしまったんです。町民がみんなバラバラになってしまったのでそれを把握するのも大変でしたし、迎えに行っても亘理に戻ることを拒否する方もいて…。でも最終的には3日目で津波被害エリアの全員を避難させ、沿岸の避難所を閉鎖することができました。

## 通常の防災計画では ここまで早い復旧はあり得なかった。

今回の震災では、国交省、自衛隊、緊急消防援助隊、亘理警察署、機動隊、交通安全指導隊、消防団、みんなが一体となって亘理のために動いてくれました。また建設業界や地元のスタンドなど災害協定を結んでいたみなさんには、復旧活動に何よりも優先していただきました。さらに近隣の市町村や山崎製パン様、亘理生協様、J A亘理様等に食糧を支援していただきました。支援体制は全体的に恵まれていたと思います。

また災害対策本部長である町長の決断が早かったので、本部会議ではスムーズに進めることができ、スピーディな復旧作業が進められました。がれき撤去の意思決定を3色の旗で住民に問う独自の方法を取ったことも大きかったと思います。職員が避難所に行き「建物が邪魔だから撤去したいわけではない。300人以上の行方不明者の捜索のため、どうしても撤去に協力していただきたい」と説明をし、住民のみなさんに協力していただきました。

撤去しがれきも、亘理町では一番復旧活動の害にならない東側3箇所にとどめました。その段階で8種類程度の粗雑分別も行っていたので、費用はかかりましたが今ではほとんどがれきの山がない状態になり、無駄ではなかったと思います。

そういう意味で、復興ではなく復旧作業は順調に進んでいるのではないのでしょうか。通常の防災計画で進めていたのでは、1年半でこれだけの状況は得られなかったと思います。

今後は地域防災計画や津波ハザードマップの見直しを進めていきます。今回、学校に避難した方はなんとか無事でした。そういう意味でも、学校を核とした避難が基本。復興事業の中でも、荒浜小学校も荒浜中学校も元の場所で再校させる予定です。

また、今回はとりあえず常磐道に上がった方で亡くなった方はいませんでした。だから歩きや車で津波の避難訓練を実施し、常磐道に上がるまで何分かかるか確認する対策等考えていく必要があります。今まで1路線しかなかった荒浜からの避難道路を、2路線等を増やすことも計画しています。道路の新設により、大渋滞で山側に避難できないという状況は回避できるはず。あとは一番大切なのは「津波警報が出たら考えはただ一つ、逃げる！」ということ。いくら防潮堤を整備しても安全ではありません。まずは逃げる、これが防災上の基本だと思います。





## 第6章

# 町長からのメッセージ







## 町長からのメッセージ

亙理町長 齋藤 邦男

この度の東日本大震災により亡くなられた方々に対し、哀悼の意を表しますとともに、被災された方々に心からお見舞い申し上げます。また震災直後からご協力・ご支援いただきました緊急消防援助隊、陸上自衛隊のみなさま、ならびに全国からお集まりくださいました数多くのボランティアの方々からの人的、物的ご支援厚く御礼申し上げます。本当にありがとうございました。

2011年3月11日は亙理町内の中学校の卒業式でしたので、午前中は式に参列し、午後からは翌日からの本会議に向けて庁舎の2階にて副町長、教育長、担当課長と打ち合わせをしておりました。東日本大震災が発生したのはその時です。庁舎は昭和37年の建物で築約50年の建物。コンクリートが劣化していて危険なので、すぐに職員全員を外の広場に避難させました。庁舎は強い揺れによって建物の後ろ側が崩れ、トイレ関係のブロックも破壊されました。

地震発生後、すぐに災害対策本部を設置。庁舎は危険で入れないため、駐車場に運動会用のテントを張りました。当日は電気もストーブもなく、雪も降っている状況でした。しかしまずは被災された方々の状況を把握することが先決でしたので、町の防災計画に基づき町内の各避難所に職員を派遣しました。

今回の大震災では、ライフラインに被害を大きく受けたため、食料、水、ガソリンの提供が主な問題となりました。食料に関しては地震発生当日は何もできませんでしたが、翌日からは職員とボランティアの方々が、JAから提供いただいた米でおにぎりを作ることに。ただし当時の避難者数が7,000人あまり。なかには1日中おにぎりを握っている職員、ボランティアの方もおりました。

しかし水に関しては、3年ほどまえに町内の井戸水の成分検査を行っておりましたので、そちらを活用することができました。またガソリンについても、町内に太陽光発電のガソリンスタンドが一カ所あり、町との災害協定も



結んでいたのが、警察・消防関係、災害に関係する車両に優先的にガソリンを提供することができました。

そして最大の問題となったのが、甚大な津波被害を受けた地域の人命救助と捜索活動です。震災翌日から、地元消防団、さらには愛知県の緊急消防援助隊、陸上自衛隊第10師団にもお手伝いいただき、まずは幹線道路に車が入れるようにながれきを撤去していただき、捜索活動を開始しました。その結果、現在亘理町の行方不明者はゼロとなっております。また人口3万5,500人に対して死亡者が306名。こちらに関しては、宮城県沖地震以来毎年6月12日の防災の日に行っていた防災訓練が、若干でも生かされたのではないかと考えております。

今回の大震災においては、国内だけではなく、海外からも多大なるご支援をいただきました。支援物資の保管場所であった佐藤記念体育館に入りきれないほどの物資をご提供いただきましたし、膨大な金額の義援金・寄附金もお寄せいただきました。本当にありがたいご支援でした。そしてみなさまの温かいご支援に感謝すると同時に今回感じたのは、地域の協力体制の大切さです。亘理町では平成20年に宮城県内では初めてとなる「亘理町まちづくり基本条例」を制定し、地域の考え方を町制に反映するため、5箇所のまちづくり協議会をつくりました。その中心となった方々が、今回の大震災では一生懸命活躍してくださったと思います。また、町民の中にも地域で助け合う「結」の心があったため、今回の大震災を耐え抜いたと確信しております。

現在は、津波被害に合われた方の住宅の再建、そして亘理のいちご完全復活のためのいちご団地の建設、農業・漁業の復興復旧が急務となっております。そして町民一人ひとりが暮らしやすさ、住むことへの安心と誇りを実感できる町として、震災前以上のまちづくりを進めております。これについては若干時間がかかってしまうかと思いますが、町民とのコンセンサスを取りながら進めていかなければなりません。

また防災教育に関しても、国、県の基準が発表され次第、それに基づき防災計画を見直してまいります。それと同時に、津波に対する防災訓練の徹底も必要となってまいります。東日本大震災の1年前に発生したチリ地震津波において、避難指示が出たのにも関わらず被害が少なかったことから、今回の震災で被害に合われた方も多数いたことはとても残念なことでした。今回306名もの尊い命が奪われたことから「津波がきたら逃げる」、このことを徹底していかなくてはならないと考えております。



## 第7章

# 支援物資・義援金・寄附金報告と御礼



謹啓

早春の候 貴殿におかれましてはますますご清栄のこととお慶び申し上げます。

一昨年の東日本大震災に際しましては、多大なるご支援・お心遣い・温かい励まし・ご協力を賜り厚くお礼申し上げます。

お陰様で、平成23年12月に「安全・安心・元気のあるまち亘理」を基本理念とした「亘理町震災復興計画」を策定しました。

これから復興に向けスピード感をもって計画を推進し、町民と連携を図りながら、新たな「新生亘理」を目指して全力で取り組んで参る所存でございます。

最後になりますが、貴殿のご健勝とご多幸をお祈り申し上げ、お礼のご挨拶といたします。

謹白

平成25年3月吉日

亘理町長 齋藤邦男

## ご支援いただきありがとうございます

「被災された方々の力になりたい」と皆様の温かい想いが、大きな力を生み明日への一歩を踏み出す勇気と希望になりました。心から厚くお礼申し上げます。

これからも巨理町を見守り続けていただければ幸いです。

### ■ 義援金 総額1億1,962万3,855円 (795件)

6月と12月の2回に分けて、総額1億1,272万円を被災された方々へお届けしました。  
(平成24年12月末現在)

### ■ 寄附金 総額2億3,710万3,475円 (484件)

災害復旧や、巨理の未来を担う子どもたちのための教育分野など町の復興のために使わせていただいております。

### ■ 支援物資 延べ3,269件 (食料：1,206件、物資：2,063件)

避難生活に必要な食料や生活用品などを被災された方々へお届けしました。

### ■ 災害ボランティア 延べ3万1,666人 (12月末現在)

がれき撤去や家屋の泥出しなど早期に自宅へ戻れる環境を整えていただきました。また、さまざまな生活支援を通して、心を休ませる場を取り戻していただきました。



## 【出典一覧】

---

「東日本大震災 1年の記録～みやぎの住宅・社会資本再生・復興の歩み～」

宮城県土木部

第1章 地震の概要

第2章 被害の概要

第3章 みやぎの住宅・社会資本再生・復興の歩み

「東日本大震災被害状況」（平成23年3月11日発生）

宮城県亶理郡亶理町

地震の概要

災害対応状況

被害状況

避難所運営状況

亶理町被災現況調査の再整理

国土交通省 都市局 市街地整備課

都市計画課

## 亶理町東日本大震災活動等記録集

---

平成25年3月31日発行

発行 宮城県亶理町総務課

〒989-2393 宮城県亶理郡亶理町字下小路7番地4

TEL 0223-34-1111 FAX 0223-34-7341

印刷 株式会社東北プリント

---





